
華と夕風の魔法

緋月雛菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華と夕風の魔法

【Nコード】

N2908T

【作者名】

緋月雛菊

【あらすじ】

華の国第一皇女のイリスは敵対関係の国の夕風の国の偵察中、夕風の国王位継承者のフェリシアーノと出会う。

※9月2日に原作を一件増やしました。
…もう一件増えました。

設定（前書き）

設定。

設定

＞ストーリー＜

夕凧の国。

王位継承者で予言者の青年フェリシアーノ。
幾年も変わらない毎日を過ごしていたが、ある日魔術師であり法術士でもある華の国の少女イリスと出会う。

＞キャラ設定＜

・フェリシアーノ・ヴァルガス

夕凧の国王位継承者の青年。

幾年も変わらない生活を送っている。

父親である国王が嫌い。

予言者でもある。

光の魔法と回復魔法が得意。

脱走中にイリスと菊に出会う。

・イリス・プラトリーナ

華の国の第一皇女だが、自由が認められているため街で暮らしている。

魔術師であり法術士でもあるが剣術も扱える。

敵国である夕凧の国を監察していた時、フェリシアーノと出会う。
すべての魔法と回復魔法が使用可能。

・本田菊

イリスの親友で剣の師匠でもある華の国の青年。
腕の立つ剣士であり陰陽師。

イリスと共に夕凧の国と監察していた時、フェリシアーノと出会う。
式神を操る。

・アーサー・カークランド

陽炎の国出身の魔術師の青年でイリスの師匠。
料理の腕はかなりやばいが魔術の腕はかなり凄い。
すべての魔法を扱えるが回復魔法は扱えない。

・セーシエル

海の国出身の踊り子の少女。

夕凧の国に植民地化される前に祖父と共に華の国に逃げ込んだ。
イリスと菊とは大の仲良しだが、アーサーは大の苦手。

特殊武器のチャクラムを扱える法術士。

・ロヴィーノ・ヴァルガス

フェリシアーノの兄だが訳あって華の国に居る。
レンとは大親友の関係。

自分を捨てた父親に復讐するため、軍に入った魔法剣士。

闇の魔法と氷の魔法が得意。

・初音ミク

歌の国の歌姫である法術士。

夕風の国に拉致されかけた時にイリスに助けてもらった。
セーシエルと仲良し。

・巡音ルカ

ミクの姉である錬金術師。

華の国に居る友人の紹介でセーシエルと暮らしている。
武器錬成が得意だが戦いには不慣れ。

・KAITO

歌の国出身の青年。

ルカの友人でリンとレンの兄。
菊とは親友関係。

イリス、リン、レンに「バカイト」と呼ばれた為、只今引き籠もり
中。

・鏡音リン

歌の国出身の踊り子。

セーシエルとは大の仲良し。

何時も兄のカイトにちょっかいをかけているが、本人に悪気はない。
闇の魔法が得意。

・鏡音レン

歌の国出身の魔法剣士。

ロヴィーノとは大の仲良しで何時も遊んでいる。

夕凧の国に復讐するためロヴィーノと同じ部隊に入った。

光の魔法と炎の魔法が得意。

・アントーニョ・ヘルナンデス・カリエド

海の国出身の青年。

魔法戦士だが魔法はあまり使えない。

ロヴィーノとレンの入っている部隊隊長。

ロヴィーノとレンをかわいがっているが、二人から頭突きを毎日喰らっている。

銀時とは大親友。

甘いものが好き。

炎の魔法と氷の魔法が得意。

・坂田銀時

霧の国出身の青年。

菊とは仕事仲間。

アントーニョとは大親友で何時も甘いものを食べに行く。

そのためか、糖分不足になるとイライラしている。

水の魔法が得意。

・ギルベルト・バイルシュミット

雨の国出身の大剣士。

アントーニョとデュオとは悪友関係。
何時も頭の上には小鳥が乗っている。
水の魔法と風の魔法が得意。

・神楽

雨の国出身の格闘家の少女。

ギルベルトとは喧嘩友達。
酔昆布が大好物。
回復魔法が得意。

・キラ・ヤマト

陽炎の国出身の魔法銃士。

フェリシアーノとは気が合う天然青年。
戦うのを嫌うが、守るために戦う。
風と水の魔法が得意。

・アスラン・ザラ

陽炎の国出身の魔法銃士の青年。

キラの親友でアーサーの弟子。
全ての魔法を扱える。
苦労者。

・ヒイロ・ユイ

雨の国出身の魔法銃士兼魔法剣士。
菊とは親友。
ギルベルトとデュオ、アントーニョは少し苦手。
闇の魔法と風の魔法を扱える。

・デュオ・マックスウェル

雨の国出身の魔法剣士。
ギルベルトとアントーニョとは悪友関係。
風の魔法と地の魔法を扱える。

＞国設定＜

・華の国

豊かな大地が広がり花々が咲き乱れる国。そのためか、名前に花の名前の人が多い。
夕風の国とは敵対関係。

・夕風の国

華の国と敵対関係の国で独裁国。
劣悪な環境で生活している民にきつい仕事をさせている悪国。

・海の国

蜃気楼の海に浮かぶ楽園国。
夕風の国に攻められ、植民地化した。

・歌の国

色々な音が溢れる芸術国。
海の国と同じ境遇になる。

・雨の国

雨が降り続く山に面する国。
華の国とは同盟国関係。

・霧の国

霞の山の頂上にある霧に包まれた国で雨の国とは仲良し。
華の国の同盟国。

・陽炎の国

幻影の高原にある国。
魔術師や法術士が暮らしている。
華の国とは姉妹国。

＞その他設定＜

法術士や魔法剣士などは、耳にピアスかイヤリングをつける。
魔術師・翡翠

法術士・瑠璃

魔法剣士・琥珀

魔法戦士・瑪瑙

予言者・ガーネット

魔法銃士・真珠

格闘家・ルビー

王位継承者・サファイア

錬金術師・エメラルド

など。

プロローグ

——リイーン…リイーン…

満月の夜、虫が鳴いている草原に一人の青年が立っていた。

「今日も…変わらなかったよ…」

ぽつりと呟く言葉は何処か儚げだった。

茶色の髪が風に靡くと、彼の左耳には王位継承の証である深い蒼色の宝石「サファイア」のピアス、右耳には予言者の証である紅色の宝石「ガーネット」のピアスが付いていた。

彼はサファイアのピアスを外し、近くの泉に投げ捨てた。

ピアスは何も言わず水底に沈んでいく。

青年はカクンと膝を地面についた。

「こんなの…要らない…」

彼はポロポロと涙を零しながら嘆いた。

そんな彼を連れ戻しに来たように、幾人の兵士が彼の腕を掴むと、何処かに連れ去った。

その様子を見ていた一人の少女は長い碧色の髪を靡かせ、その場をはなれた。

彼女の左耳には魔術師の証である赤色の宝石「瑪瑙」のピアス、右耳には法術士の証である青色の宝石「瑠璃」のピアスがあった。

辺りには静寂が訪れ、虫の鳴き声だけが響いた。

設定2（前書き）

追加設定です

設定2

追加設定

＞キャラ追加設定＜

・シン・アスカ

陽炎の国出身の魔法銃士。
妹がいる。

ロヴィーノとは仲良し。

魔法はアーサーから習っている。
料理の腕はアーサー並にやばい。
全ての魔法を扱える。

・刹那・F・セイエイ

海の国出身の魔法剣士兼魔法銃士。

セーシエルとは近所付き合いの中。

魔法は扱えるが主に接近戦を得意とする。

水の魔法と炎の魔法を扱える。

・ティエリア・アーデ

華の国出身の魔術師。

ローザとは犬猿の中だが基本的には仲良し。
接近戦が苦手。

料理はかなり下手。

回復魔法と氷の魔法を扱える。

・ローザ・クアドリフォーリョ

華の国出身の魔女。

ティエリアとは犬猿の中。

アーサーの料理が大の苦手。

リン、レンとは近所付き合いの中。
全ての魔法を扱える。

・旭かなめ

陽炎の国出身の魔術師。

アーサーとは師弟関係。

料理の腕は凄い。

キラとフェリシアーノとは仲良し。
全ての魔法を扱える。

出逢いと再会と戦闘(前書き)

長いですよ…

出逢いと再会と戦闘

夕風の国、城の城下町である風蓮の街。

其処にある隠れ家に少女イリスは入る。

隠れ家には六人の青年がいた。

「菊、アーサー、キラ、ヒロ、ギルベルト、ロヴィーノ、ただいま」

「おかえり。イリス。どうだった？」

キラの言葉にイリスは少し唸る。

「夕風の王位継承者は渚の草原に居たわ。泣いていたの。『もう…要らない』って」

「どういう意味なんだ？」

アーサーの言葉にイリスは首を横に振った。

「解らない。でも、王位継承の証のサファイアのピアスは泉に捨てていたから、自由になりたいのね」

「……………」

「ロヴィーノ？」

イリスはロヴィーノがぼんやりとしているのに気が付いた。

「大丈夫か？ロヴィーノ」

ヒロに問いかけられロヴィーノははっとした。

「あ…いや何でもない」

慌てて言うが、彼の本心を見抜いたキラはロヴィーノの頭を撫でる。

「心配だよね。大切な弟だから。毎日『あのクソ親父からフェリシアーノを助け出す』って言ってたもんね」

優しく語りかけるキラにロヴィーノはポロポロと涙を流しながら頷いた。

「大丈夫。私達も居るから」

「イリス…」

ロヴィーノは涙を拭う。

「ああ、彼奴の事は許さない。フェリシアーノを彼奴に悪用させて
たまるか！」

「予言の力は悪用されたら能力者が消滅する可能性があるからな。
急がないとな……」

「……失敗は許されない」

アーサーとヒロは頷き合う。

と、その時イリスが持っていた「通信石」が光り出した。

淡い緑色の光を放つ魔石を取り出すと、声が聞こえた。

『こちらシン。イリス、聞こえる？』

「シン。こちらイリス。聞こえるわ」

『こっちの手配は済んだよ。そっちはどう？』

「大丈夫よ。アーサーと菊を連れてそっちに向かうわ」

『分かった。じゃあまた後で』

途端、声が途切れ光が消えた。

イリスはスペアの通信石をヒロに渡すと、アーサーと菊を連れて
隠れ家を出た。

「せっかくですから、城まで偵察しに行きましょう」

街中を偵察し終え、商店街で菊の提案に二人は頷いた。

「じゃあ、駆けっこだよ！」

「あ！こら、イリス！」

アーサーの言葉を見殺して、イリスは城に行こうとした時。

——ドンッ！

「きゃっ！」

「ヴェッ！」

勢い良くイリスは青年とぶつかった。

「「イリス！？」」

慌てて菊とアーサーが駆け寄る。

「ヴェー……」

「あいたたた：お兄さん、だいじょ：え？」

イリスは青年を見て呆然とした。

彼はロヴィーノと良く似ていた容姿だからだ。

「嘘……ロヴィーノ？」

イリスがロヴィーノの名前を言った途端、青年はイリスの手を握り締めた。

「君、兄ちゃんを知っているの！？」

彼の言葉にイリスは顔色を変えた。

「兄ちゃんって：まさか！」

と、その時。

「おい！居たぞ！」

「っ！！」

遠くからの兵士の声に青年は青ざめ、震えた。

イリスはポケットから通信石を取り出すと文字を繋げる。

「こちらイリス。ヒロ、シン、聞こえる？」

『こちらヒロ。聞こえる』

『こちらシン。ちゃんと聞こえるぜ』

「救出目標と接触：『本当かイリス！』ロヴィーノ、落ち着いて」
興奮するロヴィーノをイリスはなだめた。

ロヴィーノの声に青年は驚いた。

「に：兄ちゃん？兄ちゃんなの？」

『フェリシアーノ！』

「兄ちゃん！兄ちゃん！」

「：一度通信を切るわ。集合場所は隠れ家よ」

イリスは通信を切った翠色の魔石を菊に投げ渡し、武器であるチャラムを構えた。

彼女の目の前には兵士が二人が居た。

青年―フェリシアーノを菊とアーサーに預ける。

「……幻影の華」

途端、辺りに沢山の花弁が舞い散り、視界を奪う。

だがそれはアーサー、菊、フェリシアーノ、イリスには見えなかった。

幻覚の花弁だった。

「アーサー、菊、フェリシアーノ、今だよ！走るよ！」

イリスの声と共に四人は一気に走った。

花卉が消えると其処に四人は居なかった。

残っていたのはフェリシアーノが付けていたガーネットのピアスが地面に落ちていただけだった。

——隠れ家に辿り着いたイリス、菊、アーサー、フェリシアーノは中に入る。

中にはキラ、ロヴィーノ、ギルベルト、ヒイロの他にシン、デュオ、アスランの三人が居た。

ロヴィーノはフェリシアーノを見た途端、彼に抱き付いた。

「フェリシアーノ！大丈夫か！？」

「うん、大丈夫だよ」

「良かったね、ロヴィーノ」

キラの言葉にロヴィーノは涙をポロポロ零しながら頷いた。
フェリシアーノも涙を流していた。

「：こほんっ。えーっとだな、これからど：」「とりあえず、夕風の国から出ましょう。シン、手はずはどう？」：おい！無視すんな！」
アーサーの言葉を遮り、完全無視したイリスはシンを見る。

「ああ、まずは誰かが一発派手に敵を引き付けてその間にフェリシアーノを連れて華の国に向かうってやつだよ」

彼の言葉にイリスはクスツと笑った。

「なら派手に引きつける役は私がやるわ。いざとなったら『幻影の華』で脱出する」

「なら俺様もやってやるよ」

「俺もやるぜ！」

「僕もやるよ」

「じゃあ引き付け役はイリス、ギルベルト、デュオ、キラ、俺を含めて五人。ロヴィーノ、ヒイロ、アスラン、菊、アーサーの五人はフェリシアーノを連れて華の国に向かう…これで良い？」

全員頷くと、イリスは立ち上がった。

遠くから数人の足音と鎧の音が聞こえてきた。

「どうやら敵さんが来たみたいだな」

デュオは不敵に笑うとデスサイズを出現させ、構える。

ギルベルトはクレイモア、キラはマスケット、シンはルーンソード、イリスはチャクラム構える。

「ヒイロ、菊、アーサー、ロヴィーノ、アスラン…フェリシアーノを連れて隠れて…この小屋、囲まれたわ」

イリスの言葉に緊張が走る。

全方位から同じ足音と鎧の音が響いた。

「チツ…感づかれたか」

ヒイロはそう言うのと、ライフルを構える。

ロヴィーノは二丁拳銃、菊は刀、アーサーは弓矢と本、アスランは短剣を構える。

「に…兄ちゃん？みんな？」

「フェリシアーノ、お前は隠れている…戦わなくて良い」

「…貴方だけは助けなければいけませんから」

ロヴィーノと菊の言葉にフェリシアーノは固まった。

「な…何だよそれ…まるでみんな死に行くみたいなの…」

「死ににいくんだよ…下手すればな…」

アーサーは警戒しながら呟いた。

「そんな…そんなのやだよ！何で！？」

イリスはチャクラムを構えたまま、フェリシアーノを見つめる。

「貴方の持つ予言の力はこの世界を左右する力なの。だから悪用されたくないの」

「！！！！」

フェリシアーノは絶句した。

自分の持つ予言の力が世界を左右する力だと信じたくなかった。

「…だから、早く隠れ…嫌だ！…え？」

「やっと…やっと兄ちゃんに会えたんだよ？離れたくないよ！」

「でも…っ！フェリシアーノさん、危ない！」

「え？」

イリスはフェリシアーノを突き飛ばす。

と同時に彼女の左肩に矢が当たった。

「っ！！」

「イリスっ！」

慌ててアーサーはイリスに駆け寄り矢を抜き取ると、傷口に白い布を巻いた。

「ぐっ！痛うっ！」

白い布には赤い血が滲み、滲んだ部分は赤黒く染まっていた。

「回復魔法を！」

「っ駄目！時間がないわ！早くみんなはフェリシアーノさん連れ
て逃げて！」

「イリス！あんたは華の国の皇女なんだ！置いていける訳…」

「良いから早く！幻影の華でなら時間稼ぎ出来るから！」

イリスは呪文を唱えるが幻影の華は上手く発動しなかった。

痛みのせいで精神集中が途切れたからだ。

と、その時に幾人の兵士が入ってきた。

キラとアスラン、ロヴィーノ、ヒイロは銃撃戦で戦った。

だが戦っても兵士は湧いてきた。

「チィッ！しつこいんだよ！」

デュオはデスサイズを振るう。

大鎌の刃は兵士の首や胴体を斬り裂くと同時に辺りに鮮血を撒き散らした。

ギルベルトとシンはデュオに応戦するがなかなか数が減らない兵士に苛立ちを感じていた。

「なかなか減らねえな、おいっ！」

「ギルベルト！油断するなよ！」

「分かってる！」

すると外で断末魔の悲鳴が聞こえてきたと同時に隠れ家の壁が破壊された。

其処にいたのはアントーニョ、レン、刹那、セーシエルの四人だった。

「アントーニョ！？それに刹那、レン、セーシエル！？」

ロヴィーノとアスランは驚いた。

「イリス！大丈夫！？」

セーシエルは武器であるチャクラムを放り投げイリスに近寄る。

「だ…大丈夫だよ…くうっ…」

「じっとしてて。癒やしの泉よ…」

彼女が唱えるとイリスの傷はたちまち癒えた。

癒えた腕を軽く動かすとイリスは立ち上がった。

「ありがとう、セーシエル」

イリスがお礼を言うとセーシエルはににこと笑った。

「セーシエル、戦える？」

「うい！大丈夫だよ！」

二人は頷き合うとチャクラムを構える。

レンはダガー、刹那はロングブレードとダガー、アントーニョは戦斧を構える。

と、フェリシアーノは杖を握り締めた。

杖はイリスが隠れ家に予備として備え付けた武具だった。

「俺だって、魔法使えるよ！俺も戦う！」

イリスは反対しようとしたが、フェリシアーノの意思が固い事を知り諦めて頷いた。

途端、フェリシアーノの顔はぱあっと明るくなった。

「ありがとう！えーっと…」

「イリス、でいいよ」

「うん！ありがとう、イリス！」

クスツとイリスは笑うと敵に向かい合おうとチャクラムを投げた。チャクラムは回転しながら殺傷力を高め、兵士に斬りかかった。フェリシアーノは呪文を唱える。

「……………閃光」

彼が唱え終わると同時に一線の光が兵士を貫いた。貫かれた兵士は蒸発するかのように消え去った。

「どけえええっ！」

レンはダガーを投げ、兵士を攻撃する。

刃は的確に急所を突いた。

アントーニョと利那はギルベルトとシンの援護をした。

「煌めく星は流れて消え去る運命！さあ、舞い上がれ！時風の華！その生命の輝きを見せ付けろ！瞑翔の風蓮！」

イリスが唱え終わると辺り一面に漆黒の花が咲き乱れた。

その花は兵士たちの動きを止める力を持っていた。

「アーサー！今だよ！」

「分かってる！ブラッドアウト！」

イリスに急かされたアーサーは闇の魔法を発動させた。

漆黒の花は赤黒く染まり、兵士を包むかのように呑み込んでいく。兵士が呑み込まれた場所には黒い柱だけが残った。と、その時。

——グシャッ！

潰れる音と共に柱の上からは鮮血が溢れんばかりに滴り落ちた。
黒い柱が消えると其処には何もなく、床には血の海が広がっていた。
静寂が訪れるとイリス達は武器を仕舞い、隠れ家を出た。

そして華の国に向かうため夕風の国を出ようとした。

だが出ようとした時、イリス達の前に一人の少年が立ちふさがった。
彼を見たフェリシアーノは微かに震え、ロヴィーノの背後に隠れた。
「フェリシアーノ様、お迎えにありがとうございました」

彼の言葉にロヴィーノは警戒を露わにした。

「…夕風の国最強の魔法剣士のシアトルⅡクロア・メイティック…」
イリスはチャクラムを構えるとシアトルを睨み付ける。

「災厄の皇女イリス・プラトリーナと災厄の皇子ロヴィーノ・ヴァ
ルガスか…」

「兄ちゃんとイリスをそんな風に言うな！」

フェリシアーノはぎっとシアトルを睨み付ける。

「兄ちゃんとイリスは災厄なんて持ってない！それに俺は帰らない。
もう王位継承者じゃない！」

「……ならば、力づくでも連れ戻します」

シアトルはパチンと指を鳴らした途端、彼と契約をしている精霊が
現れた。

「フェリシアーノを道具としか思っていない君達に、彼は渡さないよ」
キラはマスケットを構えるとそう言った。

アーサーとフェリシアーノも武器を構え、何時でも詠唱出来るよう
に精神を集中させた。

「シアトルは夕風の国最強の剣士…油断しないで」
イリスの言葉に全員は頷いた。

と、その時だ。

「メール・ティアドロップ！」

少女の声と同時に水の魔法がシアトルを攻撃した。

「この声は…」

「くっ！旗色が悪過ぎる！一時撤退するが…イリス・プラトリーナ、ロヴィーノ・ヴァルガス…いずれフェリシアーノ様は返してもらいます」

「「返すなんてしねえよ（ないわ）！！」」

イリスとロヴィーノはハモリながら叫んだ。

「僕は貴方たちのやっている行いを許さない…いずれその腐った性根を叩き直す！」

闇の中から少年の声が聞こえ、現れたのは深紅の薔薇のような髪色の少女と太陽の光のような髪色の少年だった。

「ローザ、かなめ！」

イリスの言葉にシアトルは顔を歪めた。

「『精霊華の魔術師』ローザ・クアドリフォーリオ、『草月の魔術師』旭かなめ…どう考えたって私の負けは見えたも同然…」

「シアトル…どうして」

ローザの言葉にシアトルはマントを翻しその場から消え去った。

「シアトル！！」

「かなめ…もう良いよ…追わなくていい」

消え去ったシアトルを追いかけてようとしたかなめをイリスは止めた。イリス達は華の国に向かい歩んだ。

そんな彼女たちを満月が慈しむように照らしていた。

もう一人の予言者

――華の国、城下町である風蘭の町。

其処にある小さな一軒家にイリス達は居た。

家の中には最小限の家具が置かれていた。

「イリスの家って何時見ても最小限の家具しか置いてないね」

リンの言葉にイリスは溜め息混じりに語った。

「城に居たとき、家具がごしやごしや置かれていたの。それスツゴく邪魔だったんだよね」

「あ、それ分かる」

ミクとイリスは家具の最小限について熱弁し始めた。

それを見ていたティエリアは小さく溜め息を吐いた。

「まったく：イリスは皇女としての自覚は：「無いよ」……………」

即答のイリスに呆れかえったティエリアは深く溜め息を吐いた。

彼の肩をアスランは軽く叩いた。

「ティエリア、諦めなよ。イリスが頑固なのは知っているだろう？」

「それはそうだが：」

「そうだと諦めろ」

イリスが言った途端に傍にいたアントーニョが黒い笑みを浮かべた。

「イリス？何言うてんねん。あかんなあ。ちょっと其処に座りや。きつーいお灸を据えたるさかい」

「うわあああつ！ごめんなさいー！トーニョ怒らないでええつ！」

慌ててイリスは逃げたが見事に捕まり、ティエリアとアントーニョ、アスランから説教を喰らった。

それを見ていたフェリシアーノとロヴィーノ、キラ、菊は笑っていた。

イリスは床に正座をして半泣き状態で説教を喰らっていた。

「ははっ！イリスだっせえ！」

「うゝー！ロヴィーノ、後で覚えていろよ！」

「イリス！話を聞け！」

アスランに叱られたイリスはしゅんとなりながらもロヴィーノを恨めしそうに睨み付けた。

「あはは！…はあ俺、こんなに笑ったの久し振りだよ」

目尻に涙を浮かべながらフェリシアーノは言った。

「毎日毎日叱られてばかりで…一人ぼっちで…笑う事さえ出来なかったから…」

辺りに沈黙が訪れた。

と、イリスは立ち上がると小さく泣いているフェリシアーノを優しく抱きしめた。

「イリス？」

「大丈夫。此処には私やロヴィーノ、菊、キラ、アスラン…みんなが居るからね。一人じゃない…寂しくないよ」

フェリシアーノは小さく頷くと明るく笑った。

それを見たイリスはフェリシアーノの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「よし！これで大丈夫…「んなワケあらへんで、イリス。説教の途中やで」…ですよねえ…トニーヨさん」

イリスは暗く笑うと再び正座をし、説教を喰らった。

するとロヴィーノは再びイリスをからかった。

「ロヴィーノのばか」

イリスは誰にも聞こえない程小さく呟くとロヴィーノを睨み付けた。

——説教が終わる頃は既に日が暮れていた。

リン、レン、ミクは自宅に戻り、キラ、アスラン、ティエリア、菊、

アーサー、アントーニヨは警備の仕事があるため王城に向かった。
イリスは夕食の支度を始めるために台所に向かった。

「イリス、今日の夕飯はなんだ？」

ロヴィーノの問いかけにイリスはエプロンを着けながら答える。

「ラタトゥイユパイ、ロールキャベツ、ジェノベーゼ、野菜サラダとブッタネスカ。あとデザートとしてフルーツグラタンとトロピカルピザ」

「随分豪華だな」

「私から兄弟再会のお祝い。それに折角貰った野菜や果物、パスタ、お肉、穀物を早く使わないと勿体無いでしょ？」

「まあ、イリスの料理は結構美味いから良いけどさ…あの二人のは…」

「アーサーとローザね…あれは勘弁してほしいわね」

イリスは苦虫を噛み潰したような表情になった。

「あの時は死ぬかと思った…」

「…そうね…」

イリスとロヴィーノは苦笑いを浮かべる。

「ま、今日は私一人で作るわ。ロヴィーノとフェリシアーノは休んでて」

「いや、俺も手伝う。一応世話になっているからな。一応」

「一応って何！？どーいう意味よ！しかも二回言った！」

「一応は一応だ、このやろー」

ロヴィーノはイリスを無視して壁にかけてあるエプロンを取ると着けた。

「あ！俺も俺もー！」

フェリシアーノもエプロンを着けるとイリスとロヴィーノの居る台所に入った。

夕食を作り終え、食卓に料理を乗せると三人は話ながら夕食を食べた。

賑やかだった夕食の後、後片付けをするイリスは顔を上げてリビン

グを見る。

其処にははしやぎすぎて疲れ果ててソファで眠っている兄弟が居た。イリスは小さく笑うと近寄り毛布を二人にかけた。

するとドアをノックする音がした。

警戒しながらイリスはドアを開けると、其処にはアントーニヨとイリスの妹のスイレンが居た。

「アントーニヨ、スイレン、どうしたの？」

「お母様からのお使いですわ。お姉様これを」

スイレンは持っていたバスケットから小さな紙袋を二つ取り出すとイリスに渡した。

受け取ったのを確認したスイレンはアントーニヨと共に城に戻った。イリスはドアに鍵をかけるとリビングに戻り、紙袋を開けた。

その中にはピアスが二つずつ入っていた。

桜色の紙袋には翡翠と瑠璃のピアス一つとガーネットと琥珀のピアス一つ。

萌葱色の紙袋には翡翠と琥珀のピアス一つと瑠璃と真珠のピアス一つ。

二組のピアスを見たイリスは悲しくなった。

「……これも、予言通りなのよね……」

イリスが俯くとチリンと音と共に彼女の耳に着けてあるピアスが揺れた。

そして瑠璃のピアスの金具部分には小さなガーネットが煌めいていた。

エレメント・マテリア

翌日、イリスの自宅には菊とアーサー、アントーニョ、ギルベルト、セーシエルが来た。

その後、刹那、ティエリア、キラ、アスラン、シン、ヒロ、デュオが来た。

イリスは紅茶を人数分淹れると、テーブルに置いた。すると菊が一つの袋をフェリシアーノに渡した。

「菊。これは？」

「開けてみてください」

フェリシアーノが袋を開と中には杖があった。

杖の本体は白い木で作られ、先端には小さいが宝石をあしらった細かい金細工の飾りがあった。

「コレって、アスランが作ったやつでしょ？」

「よく分かりましたね」

菊の言葉にイリスは語る。

「私のチャクラムだってアスランに作ってもらった武器だもん。分かるよ」

その言葉に菊は頷いた。

キラはフェリシアーノの隣に座った。

「フェリシアーノ。アスランは華の国でも右に出る者は居ない武器の作り手なんだよ」

「そうなの？」

フェリシアーノの問いにキラは頷いた。

「あ、武器作ってくれてありがとう。アスラン」

「いいよ、そんなお礼なんて。俺は好きで武器を作っているんだ。凄いのはルカだよ」

「ルカ？」

フェリシアーノは首を傾げる。

「ああ、巡音ルカか。彼奴、鍊金術が凄いやな」

デュオの言葉にフェリシアーノはハテナマークを一杯にしていた。

「明日、ルカの家に行こうか。そろそろ私のチャクラムとロヴィーノの銃と剣のメンテに行かないとね」

イリスはそう言うのとチャクラムを取り出す。

チャクラムには細かな傷が所々に付いており、刃は欠け、小さなサファイアとアメジストには亀裂が入っていた。

それを見たアスランは眉間に皺をよせた。

「ボロボロだな。これはルカに直してもらわないと駄目だ。魔力も欠けているぞ」

「あ、やっぱり？どれくらいかかるかな？」

「それはルカに聞け。だがサファイアとアメジストは新しく変えな
いといけないな」

それを聞いたイリスは深々と溜め息を吐いた。

アスランはロヴィーノの銃と剣を見る。

銃は引き金部分が壊れ欠け、今にも取れそうだったのと序でに小さな黒真珠も欠けていた。

剣も刃が欠け、アクアマリンが罅割れていた。

「ロヴィーノ。このままじゃ銃は弾詰まりを起こすぞ。宝石も変え
ないとな」

「はあ…しゃーない。『水月の坑道』に向かいますか。ロヴィーノ
行くよ」

椅子から立ち上がったイリスはドアに手をかける。

「なら俺も行く」

「ヒイロ」

「俺のライフルのルビーも割れているからな。ついでだ」

「分かった。じゃあ私とロヴィーノ、ヒイロで水月の坑道に…俺
も行く！」…やっぱり、フェリシアーノも行くか…じゃあ、この四
人ね」

イリスはそう言うと、ドアの近くに立てかけてある長剣を二つ手に

取ると、鞘から刀身を抜き出した。

白銀に輝く刀身はイリスの顔をはっきりと映し出した。

長剣の一つをロヴィーノに投げ渡すとイリスは鞘の帯を腰に巻いた。

「じゃあ、行くよ」

イリスがそう言うのとヒロ、フェリシアーノ、ロヴィーノの三人はイリスの後を追って水月の坑道に向かった。

——風蘭の街から数十分位で着く場所に水月の坑道はあった。

中に入ると陸地の筈なのに海風の匂いがした。

「ヴェー…渚の草原と同じ匂いがする」

「同じ匂いだよ。水月の坑道にある水源と渚の草原にある泉とは繋がっているんだ。じゃあ、奥に行こうか」

イリス達は奥に向かった。

途中、スライム程度の魔物が現れたが、弱かったので簡単に倒せた。暫くすると潮の匂いが強くなった事が分かる。

「今はあるかな？エレメント・マテリア」

「彼奴に喰われてなければな」

「ヒイロ冷たい…」

「兄ちゃん、兄ちゃん」

「何だ？」

「エレメント・マテリアって何？」

「^{ジエム}宝石の原石だよ。水月の坑道でしか取れないんだ」

「へえ」

フェリシアーノが納得すると同時に坑道の最深部に着いた。

と、其処には巨大な魔物が巣くっていた。

「キマイラかあ…面倒だなあ」

「仕方ないだろ。行くぞ！」

ヒイロのかけ声と同時にイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノはキマイラに飛びかかった。

ロヴィーノは長剣を鞘から抜くと手慣れた手付きで脚部に斬りかかった。

ヒイロはライフルがオーバーヒートしないように警戒しながら銃撃戦をした。

フェリシアーノは魔術を発動させて戦った。

イリスはロヴィーノの援護をした。

キマイラの爪がロヴィーノを襲うが間一髪でイリスがシールドの術を放った。

数時間後、キマイラを倒した四人はエレメント・マテリアを探した。エレメント・マテリアが見つかりと全員は風蘭の街に戻った。

花茶と鉱石（前書き）

イリスは第二のロシアさん設定（笑）

花茶と鉱石

風蘭の街に戻ってきたイリス、ヒイロ、フェリシアーノ、ロヴィーノはミクの家を訪ねた。

ミクはイリス達を中に入れると、紅茶を淹れた。

すると奥からピンク色の長い髪を持つ女性が来た。

「あら、イリス。おはよう」

「おはよう、ルカ。あのさ、私とロヴィーノ、ヒイロの武器がやばいからメンテナンスお願いできる？ エレメント・マテリアは見つてきたから」

イリスはそう言うと言とエレメント・マテリアと武器のチャクラム、銃、剣、ライフルをテーブルに置いた。

ルカはチャクラムを診ると小さく溜め息を吐いた。

「：この修理はミスリルとオリハルコンが必要ね。大分痛んでるわ」

「ミスリルとオリハルコンかあ：エレメント・マテリアには無い鉱石だね：とりあえず調達して来るわ。ミスリルとオリハルコンは『時守りの泉洞』だったよね」

「鉱石を守っているゴーレムには勝たないと駄目よ」

ルカの言葉にイリスは苦虫を噛み潰した表情になった。

「ゴーレム：あの堅物魔物ね：」

「あの時、苦戦したもんな。もう行きたくねえよ、ちくしょー」

ロヴィーノの言葉にイリスは苦笑いを浮かべた。

「何時夕風の国が攻めてくるか解らないから、あまり遠出はしたくないし：うーん：お城にミスリルとオリハルコンあるかなあ」

イリスは小さく呟くと紅茶を飲み干した。

小さな可愛い花弁が浮かんでいる淡い紅色のお茶は、果実のような甘い香りが漂っていた。

フェリシアーノは初めて飲んだ紅茶に笑みを零した。

「フェリ、気に入った？」

イリスの問いかけにフェリシアーノは頷いた。

「うん！これ、何のお茶なの？」

「『フィラの花茶』。林檎のような甘い香りがする『フィラの花』を乾燥させて作る紅茶で、華の国にある銘茶の一つなんだ」

「一つって事は他にもあるの？」

「ええ。檸檬の香りの『ルノアールの花茶』、柘榴の香りの『アルチエアの花茶』、葡萄の香りの『メイルの花茶』、無花果の香りの『フェリエの花茶』とか色々あるわ。淹れ方は結構難しいから、華の国の人々しか淹れられないの。ミク達は別だけどね」

「へえ。そうなんだあ」

キラキラと子供のように瞳を輝かせているフェリシアーノを見て、イリスは思い付いた。

「花茶は城で作っているの。行ってみる？」

「え？大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。フェリはもう夕風の王位継承者じゃないんだから」

「でも良いのか？」

ロヴィーノの問いにイリスは「大丈夫」と言って笑った。

「ロヴィの時も同じだったじゃん。大丈夫だよ。私は一応皇女だしイリスはそう言うのと立ち上がった」

「ヒイロはどうする？」

「武器の調整をするから残る」

「そう：じゃあ、行くよフェリ、ロヴィ」

「あ！イリス待って！兄ちゃん、早く早く！」

「分かった！分かったから引くな！」

フェリシアーノはロヴィーノの手を引きながらドアに向かったイリスを追った。

――華の城に着いた三人は、自由に行き来している街人たちの中にいた。

白を基準とした城壁には、鮮やかな蔦が青々と葉を茂らせながら這い蹲っていた。

壁に刻まれた紋章は白い翼に包まれた蒼い薔薇の紋章だった。

「あの紋章は母さんの紋章。私のは雛菊とアイリスの紋章なんだ」
アイリスの説明にフェリシアーノは頷いていたが、理解が出来ていなかったのは一目で分かった。

三人は城の中庭に入った。
と、その時。

「アイリス姉様あああっ！」

「え？あ…どわあっ！」

いきなり飛びかかってきた少女を、アイリスは驚きながらもすれすれで交わした。

少女はそのまま地面に激突した。

「あー…プラム。悪い…許せ」

アイリスが立ち去ろうとしたその時、少女は彼女の足にしがみついた。
「ぎゃあああっ！離せええええっ！」

「姉様…ウッフ…捕まえましたわあ…」

「キモイ！失せろ！」

とっさにアイリスは魔術を放った。

まともに魔術を喰らった少女はバタリと倒れた。

イリスはツンツンと棒切れで突つつき、少女が動かない事を確認する。

「イリス…大丈夫か？」

「大丈夫…なワケねえだろおおおおっ！」

ロヴィーノにツツコミを返したイリスは泣きながら叫んだ。

決意

——花蓮の庭園。

様々な花が咲き乱れている庭からは、甘い芳醇な香りが漂っていた。イリスは、淡いピンク色の可愛らしい花をフェリシアーノに見せる。

「これがフィラの花。これを干して作ったのがフィラの花茶だよ」

「綺麗だねー」

「フィラの花はメンタルケアによく使われるんだよ」

イリスが説明していると、一人の青年が来た。

「イリス、其奴が夕風の‘元’、王位継承者か」

「グラス兄さん！フェリは王位継承者じゃない！」

「ちゃんと‘元’、って付けて言ったぞ！バカ妹！」

「バカとはなによ！バカとは！このあほんだらバカ兄さん！」

「んだと！？」

喧嘩をはじめた二人を見ている双子は、巻き込まれないように少し離れた。

と、その時。

「グラス！イリス！何しているの！？」

「「カシス姉さん！？」」

「喧嘩しないの！迷惑でしょ！！」

一人の女性——カシスが腕を組みながらグラスとイリスを叱りつけた。

「カシス・アルメリア。苗字はイリスと違うが、れっきとした姉妹

でイリスの姉ちゃんだ。本当はカシスが第一皇女だけど、訳あって

イリスが第一皇女なんだ」

ロヴィーノの言葉にフェリシアーノは頷いた。

カシスの説教を喰らっている兄妹はしぼんでいた。

暫くして説教は終わった。

イリスはロヴィーノとフェリシアーノを連れて母親である華の国女王に会いに行った。

女王、フローラは三人を見て小さく微笑んだ。

「来ましたね、イリス。そして夕風の双子の皇子よ。今回はなによりで来たのですか？」

「母さん、ミスリルとオリハルコンはありますか？ 武具の修理に必要なんです」

「ミスリルとオリハルコン：ありますよ。ですが、イリス。貴女は皇女なのですよ？ フェリシアーノさまと同じ予言の神子である貴女が戦い続ける事はないのですよ？」

フローラの言葉にロヴィーノとフェリシアーノは驚いた。

イリスにも予言の力があることを初めて知ったからだ。

「母さん、私はその力を弄ぶ夕風の国を許せないのです。フェリを道具として閉じ込め、ロヴィを災いの皇子として捨て去った夕風の国が！」

イリスは激昂しながら叫んだ。

強く掌を握り締めたせいか、赤い血が滴り落ちていく。

「私は皇女だけど、みんなを守るために戦い続ける！それが私の覚悟なんだ！」

その言葉にフローラは驚いたがすぐに顔を引き締めた。

「：分かったわ。貴女の決意もね：」

フローラはそう言うと言銀の鉱石と黄金の鉱石を出現させ、イリスに渡した。

「ミスリルとオリハルコンよ。イリス、その力、守るために使いなさい」

「はい」

イリスは頷くと、フェリシアーノとロヴィーノと共に城を後にした。

「：祈りの華を咲かせたのね：イリスアリア」

フローラは呟くと、自室に戻った。

ルカの家に戻った三人はルカに二つの鉱石を渡した。
そしてルカは、イリスの武具を直すために作業に取りかかった。
自宅に帰った三人は夕食を済ませて、眠りについた。

原石のルビー

明くる日、目を覚ましたイリスは朝食を作るために台所に向かった。

「♪♪♪♪」

歌を口ずさみながら卵を割っていると、其処にフェリシアーノが来た。

「イリス、おはよう」

「おはよう、フェリ。ロヴィは？」

「兄ちゃんならまだ寝てる。今日のご飯は？」

「今日は軽めに、トースト、野菜サラダ、オムレツ。後、デザートとしてクッキー。飲み物は紅茶か珈琲だよ」

「じゃあ俺も手伝うよ」

フェリシアーノは壁に掛けてあるエプロンを器用に身に着けると、イリスのいる台所に立った。

「助かるよ。じゃあ、野菜サラダを担当して。材料はトマトとレタス、胡瓜、玉葱。玉葱はもう切ってあるから、トマト、レタス、胡瓜をお願い」

「わかったあ」

早速フェリシアーノは野菜を切るのにかかった。

イリスはボウルに卵を割り入れるのを再開した。

卵を割り入れると、味付けしながらよくかき混ぜ、温めたフライパンにバターを入れて溶かした。

バターを溶かしたときの、芳醇な香りが辺りに漂う。

香りに気付いたのか、ロヴィーノが来た。

「んー：おはよう：」

「おはよう、ロヴィ」

「今日はオムレツか：」

イリスは頷くと、フライパンに溶いた卵を流し入れる。

香ばしい匂いと音が辺りに漂った。

イリスは三人分のオムレツを作り終える。

と、その時ドアをノックする音がした。

「おい。イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノ、いるか？」

「シン？いるよー。入って」

ドアがひらくと、其処には髪をボサボサにしたシンがいた。

「あんた…また朝食食い忘れたな？」

「あはは…はい」

「全く…仕方ないなあ」

イリスは苦笑いを浮かべながら、もう一人分のオムレツを作り始めた。

「シン、なんで朝ご飯食べ忘れたの？」

「俺が居るところは寮だからな。寝坊したら朝飯は抜きで、昼飯まで我慢しないと駄目なんだ。その点ではロヴィーノが羨ましいよ。」

イリスの飯はアーサーとローザより美味しいから」

「私をアーサーとローザと比べるな」

イリスはそう言うのと、作り終えたオムレツをテーブルに乗せた。

「さんきゅ！」

「ったく」

イリスは素直に喜ぶシンを見て呆れていたが、微かに笑っていた。

「んー♪やっぱイリスの飯は美味いや」

「三人共、紅茶と珈琲、どっちにする？」

イリスはティーポットとコーヒーマイルを持ちながら、シン、フェリシアーノ、ロヴィーノに尋ねる。

「俺は珈琲」

シンはサラダを頬張りながら言う。

「俺は紅茶がいいな」

フェリシアーノは、パンを千切りながら言う。

「シンと同じで珈琲」

ロヴィーノはサラダのトマトをかじりながらそう言った。

「珈琲二杯に紅茶二杯ね。フェリ、紅茶は花茶にする？」

「うん！」

「わかったわ」

イリスは微笑むと、珈琲と花茶、紅茶を淹れた。甘い香りと芳ばしい香りが辺りを包む。

賑やかな朝食を終え、シンとロヴィーノは城に向かった。

イリスとフェリシアーノは、街の広場に散歩に出かけた。

「あ！イリス姉ちゃんだ！」

「イリス姉ちゃん！」

イリスの姿に気づいた幼い少女達が来た。

「アルメリア、リナリア、おはよう」

「姉ちゃんおはよう！」

「姉ちゃん、そっちの男の子は誰？」

大きなピンク色の瞳を開いて、アルメリアはフェリシアーノを見つめた。

「フェリシアーノ。ロヴィーノの弟なんだ」

イリスが説明すると、アルメリアとリナリアは、ぱあと笑った。

「ロヴィーノちゃんの弟なんだあ！」

「ホントだ！ロヴィーノちゃんに似てる！」

明るい少女たちは小さな手で、フェリシアーノの手を握る。

「フェリシアーノだから、フェリ兄ちゃんだね！あたしはアルメリア！」

「私はリナリアだよ！よろしくね、フェリ兄ちゃん！」

きやつきやつ、とはしゃぐ少女たちに囲まれたフェリシアーノは少し戸惑った。

「俺が怖くないの？俺は夕風の王子だったんだよ？」

すると、アルメリアはぷうっと頬を膨らませる。

「なに言ってるの？フェリ兄ちゃんはフェリ兄ちゃんだよ！」

「ロヴィーノちゃんも夕風の王子だけど、今は私の家族だもん！フェリ兄ちゃんも私の家族だよ！」

その言葉にフェリシアーノはポカンとした。

「華の国はね、国民全員が家族なんだ。難民や移民でも家族として迎える。それが華の国と云う国なんだ」

「イリス…」

「フェリはもう、私達の家族なんだ。夕風の王子でも、予言者でもない。フェリシアーノ・ヴァルガスと言う、ロヴィーノの弟。私達の大切な家族の一員だ」

優しくイリスが語った途端、フェリシアーノは堪えきれず、涙を零した。

「えっ！フェリ！？」

「フェリ兄ちゃん？どうしたの？」

イリスとアルメリアは少し慌てた。

「…俺、凄く嬉しいんだ」

「フェリ兄ちゃん、泣かないで！」

「そうだ！」

何かひらめいたアルメリアはスカートのポケットから、彼女の手のひらからはみ出るくらいの綺麗な赤色の石を取り出し、フェリシアーノに突き出した。

「これ、フェリ兄ちゃんにあげる！」

「アルメリア！これ、あんたが大切にしているルビーじゃ…！」

イリスの言葉に、アルメリアは大きく首を振った。

「いいの！フェリ兄ちゃんにあげるの！」

アルメリアはフェリシアーノの手にルビーを握らせた。

「もう泣かないって約束！」

「うん…。約束する。ありが…とう…」

嬉しそうに笑うアルメリアは、リナリアと共に2人の側を離れた。

「イリス」

フェリシアーノはイリスに向き合う。

その表情は真剣だった。

「俺、あの笑顔を守りたい。だから…」

「わかったわ。フェリが決めたのなら、私はそのサポートをする」

「ありがとう」

イリスは小さく笑うと、くるりと向きを細工師の工房が集まる地区に体を向けた。

「じゃあ、ルカの家に行こう。そろそろチャクラムが直ってると思うから」

「うん！」

二人は、ルカの家に向かうため、歩き出した。

蒼い華（前書き）

ひさびさの更新です？

蒼い華

イリスとフェリシアーノはルカの家に向かうため、細工師や工房が軒を並べる路地を歩いていった。

ふと、イリスはとある工房の近くにある酒場の前で歩みを止めた。

「イリス？」

「しっ」

耳を澄ませたイリスは何かを感じ取り、フェリシアーノが着ている服の袖を掴むと、近くの工房の影に隠れる。

酒場からは見覚えのある紋章の刺青をいれた二の腕をさらしている男が二人出てきた。

途端、フェリシアーノはびくりと体を震わせる。

「夕風：だな」

イリスはじつと息を潜めながら、相手の様子を窺う。

男達はイリス達に気付いてはいないらしく、そのまま市街地方面に向かった。

「：フェリ、急ごう」

「うん」

二人は頷き合い物陰から出ると、ルカの家の方角へと走り出した。

——ルカの家についたイリスとフェリシアーノは中に入る。

「あら、イリスとフェリシアーノ、おはよう。イリス、武器の修理なら終わったわよ」

「ありがと」

イリスがチャクラムを受け取る瞳に陰しい光が宿っているのを、ル

カは見逃さなかった。

「何かあったのね」

「ルカ、右腕に刺青を入れた男達は来てないよね？」

イリスの言葉にルカは小さく頷く。

「ええ、来てないわ。刺青って、どんな刺青かしら？」

「夕風の紋章をした刺青。多分、フェリを連れ戻しに来たんだと思う」

夕風の単語に反応したルカは表情を陰しくする。

「華の国に夕風の兵士は入れない筈よ」

「ううん…、例外が一人だけいる」

「シアトル…ね」

その言葉にフェリシアーノは頷く。

「確かにシアトルは簡易結界なんて簡単に壊せる程の魔力を持つからね」

「かなめ」

奥の工房に続く扉の前にはかなめが立っていた。

「何時の間に居たの」

「僕もルカに武具の修理を頼んでいたからね」

「そう」

かなめは表情を陰しくしながらフェリシアーノを見据える。

「フェリシアーノ、お前はシアトルが何処出身が判るか？」

「え？ううん、知らない」

「…此処だよ。彼奴の本名はシアトル・ベイリーフ。彼奴はこの国を裏切ったんだ」

その言葉にフェリシアーノは驚きを隠せなかった。

「シアトルは以前、夕風の国への戦線に行ったんだけどそれ以来行方知れずになり、そして夕風に属する魔法剣士になったんだ」

かなめは怒りを抑えながら語る。

親友に裏切られたショックがよほど大きかったらしく、その瞳には憎しみが入り交じっていた。

「かなめ、落ち着いて。確かにシアトルは夕凧側の魔法剣士になった。けど何が理由が在るはずよ」

イリスがかなめを落ち着かせようとするが、彼は溢れ出る感情を抑えきれなくなった。

「僕の姉さんはシアトルに殺されたんだ！だから僕は…！！」

「清廉の眠り！！」

イリスが呪文を唱えると催眠作用のある蒼い華が出現しかなめを包み込み、華が消え去るとかなめは床に倒れ込んだ。

「…かなめは精神不安定だから、こうやってイリスの華術で眠らせるの。イリスは国一番の華術士なのよ」

ルカの説明にフェリシアーノは一筋の涙を流しながら眠る少年を見詰めた。

華の魔法を発動させたイリスは掌に乗せている金色のペンダントを強く握り締める。

「…ノーチェ」

掌に握り締めているペンダントの持ち主の名前を呟き窓の外を見据えると、既に日は微かに西に傾いていた。

知と光

帰宅したイリスとフェリシアーノはそれぞれソファや椅子に腰をかける。

カチカチと音を鳴らしながら時計の針は夕方の紋様を示す。

「：イリス、訊きたい事があるんだけど：」

「何、フェリ？」

「イリスにも、予言の力があるって：本当なの？」

フェリシアーノの問いかけにイリスは俯く。

「確かに、私には華の力の他に予言の力がある」

「：やっぱり、夕風の王に：父様に狙われたの？」

「狙われたよ。私に宿る予言の力はフェリに宿る予言の力とは対の力だから」

「対の力？」

「予言にはね、二通りがあって、一つは未来を見通す力で、もう一つは光の言葉を聞き取る力。私は後者の力、フェリは前者の力を宿しているんだ」

一息つくくと、イリスは額に指をあてがった。

「『知と光が揃い、新たな光への御霊を授かりし時、御霊授かる代償として2人の神子を捧げ奉らん』……………華の国に伝わる予言だよ」

「神子を捧げ奉らんって：まさか：」

「生贄。私とフェリ、2つの命を捧げないと新世界の鍵は手に入らないって意味：」

フェリシアーノが肩を小さく震わしたのをイリスは見逃さなかった。「：訊きたくないよね、こんなの。でも、私は生贄としてもフェリを守る：。それが、フェイとロヴィとの約束だから」

イリスの口から零れた名前にフェリシアーノは驚きを隠すことは出来なかった。

「フエイ…。まさかフエイエルノート!?」

「知ってるの?」

その驚き様にイリスは一つの予感を感じ取った。

「…まさか、フエイはフェリとロヴィの…」

「うん、俺達の姉ちゃんなんだ。でもフエイ姉ちゃんは…、父様に…」

「…知ってる…。フエイは、夕風王に…」

一気に静寂が流れる。

時計の針は流れ続けるが2人は時間が止まったかのように沈黙を守っていた。

その時、街の広場のある方角から爆音と絶叫が響く。

「街の広場から!?!」

「フェリ、行こう!!!」

イリスはチャクラム、フェリシアーノは杖を握り締めると家を飛び出し、広場へと向かった。

広場に着くと2人は息を呑む。

瓦礫の山が広がる広場の周囲には血痕と血の海が広がっていた。

途端、か細い声が2人の耳に届く。

「…うう…」

「…いたい…よ…。イリス…姉ちゃ…、フェリ兄ちゃ…、助け…」
聞き覚えのある少女の声だった。

「アルメリアとりナリア!!!」

「フェリ、こっち!!!」

イリスは手招きをしてフェリシアーノを呼ぶ。

其処には、血を流している幼い姉妹が瓦礫の下敷きになっていた。

「清廉の華弁よ！我が声に応え、彼の者を救い賜え！風欄の息吹！」

桜色の花卉が舞った途端、アルメリアとリナリアを押し付けていた瓦礫が消滅する。

フェリシアーノが2人に回復魔法をかけると忽ち姉妹の傷が癒えた。

「うわああああん！！イリス姉ちゃん、フェリ兄ちゃんっ！！」

「わああああん！！」

2人はイリスとフェリシアーノに抱きつくとき大きな声で泣き出した。

「一体、何があったの？」

「知らない2人のおじさんが呪文唱えたら、魔物が出て来たの！！」

「魔物が、みんなを…みんな殺しちゃったの！！お父さんもお母さんも、フィネスもテイルダもファビオラも、みんな…みんな！！」

その言葉にイリスとフェリシアーノは沸々と無関係の人々を殺した男達への怒りが湧き上がるのを感じた。

だが、その怒りを抑え込むと2人は城へ続く道の先を見据える。

「アルメリア、リナリア。私達の家に行ける？」

「うん。お姉ちゃんとお兄ちゃんは？」

「俺達は城に行くよ。多分、そいつらは城に行った筈だから」

途端、アルメリアはぎゅっとイリスとフェリシアーノの手を握りしめる。

「イリス姉ちゃん、フェリ兄ちゃん、ロヴィ兄ちゃんとキラ兄ちゃん達と一緒に絶対に帰ってきてね」

「うん。約束する」

「待ってて。みんな一緒に帰ってくるから」

少女の頭を優しく撫でると、2人は城に向かって走り出した。

本当の姿（前書き）

戦闘描写抜きまくり？

本当の姿

城ではロヴィーノ達が魔物と応戦していた。

そんなに強くはなかったが数が多く、負傷者も出ていた。

「クソッ！これじゃキリがねえよ！」

「デュオ、油断するんやない！」

苛立っているデュオをサポートしているアントーニョが声をかける。

「あー！糖分が足りねええ！」

「お腹すいたアル！」

「んなこと言うな！」

シンは銀時と神楽にそう言うのと、目の前の敵を倒していく。

「全然終わらねえぞ、このやろー！」

「ロヴィ、後ろっ！」

レンの声にはっとしたロヴィーノが振り返ると背後に魔物がいた。

「しまっ……！！」

「紅き月、戒めの牢！戒に囚われし光姫よ、その光を解放せよ！ルー

ーン・セイレーン！」

「舞い散る華よ！光の森に潜みし生命を解放せよ！聖霊の花蓮！」

詠唱と共に深紅の閃光と空色の花卉が魔物を倒す。

其処にはイリスとフェリシアーノが居た。

「イリス！フェリシアーノ！」

「ロヴィ、油断はするなって言ったでしょ！？」

「ゆ、油断してねえよ！」

イリスの叱りにロヴィーノは子供っぽい言い訳をする。

「もう……、私とフェリも参戦する！全員、戦闘態勢を整えよ！」

途端、イリスの双眸が血の様に紅く染まる。

「第一部隊は前線で戦闘！第二、第三部隊の術師は負傷者の回収、及び治療！第四部隊と共に第一部隊のサポート！第五部隊は城の防衛！特殊部隊の各小隊メンバーは遊撃に当たれ！」

分かり易く、無理のない命令を下すイリスにフェリシアーノは驚きを隠せなかった。

「あれが、イリスアリア・デイジー・セルフイーア。この国の光の予言者である皇女であり僕達の指揮官。他の国が知らない、イリスの本当の姿だよ」

キラが教えるとフェリシアーノはイリスを見詰める。

碧の髪はギルベルトとよく似た白銀の髪へと変わり、体からは強い魔力を放っていた。

「久し振りに見たぜ、イリスの本当の姿」

「そうね。私も、この姿になったのは何ヶ月ぶりかしら？」

ギルベルトと話すイリスは小さく笑うと、チャクラムを構える。

「お喋りはもうお終い。ヒイロ、フェリ…。バックアップよろしく」
「了解」

「うん、分かった」

2人が頷くのと同時にイリスはチャクラムをベルトのホルダーにかけ、鞘から深紅の刃の霊剣―フランヴェルジュを抜くと掲げあげ、声を張り上げる。

「全部隊、戦闘を開始せよ！」

その声と共に、彼等は戦闘を再開した。

「精霊の声を聞き届きし巫女、その御霊を解放せよ！フェアリー・レイ！」

ローザは魔法を放ち魔物を消滅させ、レンはナイフを急所へと投げ魔物を倒していく。

「ふぉあちゃあぁあぁあっ！！！」

神楽は得意の格闘技で魔物を蹴散らしていると、銀時に蹴りをいれそうになった。

「神楽 あぁあぁあぁ！！！」

「戦闘に集中しろ！！！」

イリスは叱咤をいれると華術を発動させ、魔物を切り裂く。

「悠久の星…その御霊に宿りし夢幻の輝きを解き放て！インフィニ

ティ・シャイン！」

「フレイム・ラーヴァ！」

フェリシアーノの詠唱と同時にヒイロは焰の魔弾を放つ。

「疾風の刃に切り裂かれる！ウインド・ブロー！」

「翔桜斬！」

「雷破！」

解き放たれた風の刃に菊とデュオは遠距離系の攻撃を繰り出した。

漸く全ての魔物を倒したのは夜明けになってからだ。

「各部隊の隊長は部隊員を引率！特殊部隊は少し此処に残れ！」

その声に従い、特殊部隊以外の兵士は城に戻っていく。

途端、イリスの髪と瞳の色が元に戻った。

「みんな、お疲れ様」

「ああ…。十人が犠牲になっちゃったけどな…」

アーサーは唇を噛みしめる。

「…けど、今悲しんだら犠牲になった人達も悲しむよ。だから、今は前を向こうよ」

「そう…ね。キラの言うとおり、今は泣かないようにしないと…」
ぼんやりと霞む光をイリス達は見据える。

と、その時。

——グルル…

獣の唸り声が響く。

はっとしたイリスはフェリシアーノの方を見ると、彼の背後に倒し損ねたらしい魔物がいた。

「フェリシアーノ、後ろ…！」

「え…！？」

振り返ると同時に魔物はフェリシアーノに襲いかかろうと跳躍をつける。

イリスは素早くフェリシアーノの前に立つと、庇うように両腕を広げた。

「ローザ、早く詠唱を！」

「駄目！間に合わない！」

ローザが叫んだと同時に魔物はイリスに襲いかかる。その時。

「はあああああつ！」

一線の閃光と共に魔物は紫の血を撒き散らしながら倒れる。

イリスの前には金髪の青年が立っていた。

「大丈夫か、イリス？」

「ルッツ！帰ってきたのか？」

驚きを隠せないイリスは青年ルートヴィッヒを見据える。

「私達も居るよ」

ひょこつと顔を出した人の少女と1人の少年に菊は驚く。

「フランさん、レミリアさん、チルノさん、それにフリージアさん

！？」

「みんな、蒼天の国から戻ってきたの？」

「うん。ルナサ、メルラン、リリカの三姉妹とルーミアは今日の昼

に帰ってくる筈だよ」

チルノの言葉に菊とリンは頷く。

一方イリスはルートヴィッヒと話していた。

「久しぶりだね、ルッツ。一年ぶりか？」

「レミリア達と共に国を出たのは、二年前だ」

「あ、そっか」

あはは、と笑うイリスはフェリシアーノに向き合う。

「フェリ、彼はルートヴィッヒ。ギルの弟だ。ルッツ、彼はフェリ

シアーノ。ロヴィの弟なんだ」

「ルートヴィッヒ・バイルシュミットだ」

「フェリシアーノ・ヴァルガスです。よろしくお願いします。えつと…」

「呼び方は好きでいいぞ」

「じゃあ、ルート。よろしく願いします」

2人は握手をする。

「みんな、私の家に行こう。アルメリアとリナリアが待ってる」

イリスは声をかけると、全員はイリスの家に向かって歩き出した。

設定3（前書き）

追加キャラが多いです。

設定3

【追加設定】

・イリス・プラトリーナ

本名・イリスアリア・デイジー・セルファイア

華の国の皇女。

本名であるイリスアリアになるとき、双眸は深紅、髪は白銀になる。
武器もチャクラムではなく、霊剣・フランヴェルジュに変わる。

【追加キャラ】

・ルートヴィツヒ・バイルシュミット

雨の国出身の青年でギルベルトの弟。

二年前、蒼天の国へ遣いに行くレミリア達の護衛と修行の為に華の国を出た。

魔法剣士。

光の魔術と氷の魔術を扱える。

・レミリア・スカーレット

華の国出身の少女で、今では希少種となってしまった天翼族の子供。
大人びたふいんきを持つが、イリスの作った菓子や料理を見ると子

供らしさがでる。

闇の魔術の他に弾幕を操れる。

・フランドール・スカーレット

華の国出身でレミリアの妹である天翼族の少女。

姉のレミリアとは違い、七色の結晶が連なる羽根を持つ。

好物はイリスの菓子と料理。

闇の魔術と弾幕を操れる。

・チルノ

雨の国出身で天翼族の少女。

水晶のような羽根を持つ。

大らかでかなりの馬鹿。

氷の魔術と弾幕を操れる。

・ルーミア

雨の国出身の少女。

天翼族と同じ希少種である精霊族の子供。

真面目な性格。

闇の魔術と弾幕を操れる。

・バチユリー・ノーレッジ

華の国出身の少女。

生まれつき体が弱い為、あまり戦闘に出ない。
主に図書館にいる。

全ての魔術と弾幕を操れる。

・ルナサ・プリズムリバー

歌の国出身でルーミアと同じ精霊族の少女。

ミク達とは親友で三姉妹の上。
ヴァイオリンで戦う。

光の魔術と弾幕を操れる。

・メルラン・プリズムリバー

歌の国出身の少女で三姉妹の真ん中。

トランペットで戦う。

レンのトランペットの師匠でもある。

光の魔術と弾幕を操れる。

・リリカ・プリズムリバー

歌の国出身で三姉妹の末っ子の少女。
イリスの菓子が大好きで、フランドールと共によく遊びに行く。
キーボードで戦う。
光の魔術と弾幕を操れる。

・西行寺幽々子

華の国出身の少女。
花見が好きで、よく城の花園に行く。
けっこう食べる。
全ての魔術と弾幕を操れる。

・霧雨魔理沙

陽炎の国出身の魔女。
バチュリーのいる図書館から無断で本を盗っては、イリスに叱られている。
アーサーとは犬猿の中。
全ての魔術と弾幕を操れる。

・博麗霊夢

華の国出身の少女で巫女。

よくカイトをからかいに行っている。
菊と幽々子とは花見仲間。
光の魔術と弾幕を操れる。

・フリージア・エルフィール

華の国出身で希少種であるエルフ族の少年。
魔術は扱えないが、バチュリーから弾幕を教えてもらい、弾幕を操れるようになる。
ルートヴィッヒとは同期の弓使い。
弾幕を操れる。

【新しく出た国】

・蒼天の国

華の国とは同盟を結んでいる国。
国民の大半は希少種为天翼族や精霊族、エルフ族。
空に浮かんでいるため、夕凧の国の侵攻はなかった。

帰還

イリス達は一回自宅に戻ると、すぐさま王城に向かう。

報告や状況を国王のフローラに知らせるためであるのと、城内にある図書館に向かう為だった。

謁見の間に着くと其処にはフローラは居なく、カシスと8人の少女がいた。

「遅いぞ、イリス」

黒い服を着た少女魔理沙がイリスを見て呟く。

「魔理沙、バチュリー、幽々子、霊夢居んだ。それとルーミア、ルナサ、メルラン、リリカお帰り」

「ただいま」

ルナサがにつこりと笑いながら言う。

「カシス姉さん、母さんは？」

「お母様は緑霊村に行ったわ。どうやら村の大樹が病気になったらしいのよ」

納得したイリスはレミリアを見据える。

レミリア達は頷くとカシスに向き合う。

「お疲れ様です、レミリア。ルートヴィッヒも護衛、ご苦労様です」

「ありがとうございます」

ルートヴィッヒは頭を下げる。

「ルーミア、蒼天の王は何と言っていましたか？」

「はい、マリアージュ様は『夕凧との戦いに手を貸す』との事です。実際、蒼天の国も夕凧から発せられる魔導の影響を受けていました」その言葉にカシスは俯くと、目を閉じる。

「ありがとうございます。貴方達はゆっくり休みなさい。蒼天への遣いはカナリーに任せますから。イリス、後は宜しくお願いするわ」

「はい」

カシスが側近と共に謁見の間を後にすると、イリス達は中庭に向か

う。

中庭ではこの時期に咲く花茶の花や霊草の花が咲き乱れていた。

「いつ来ても此処は変わらないね。ね、ルート」

「そうだな。二年前とは変わっていないな。変わったとしたらイリスの大雑把さがかなり増えた事だな」

「あ、確かにそうかも」

フランドールとルートヴィツヒの会話にイリスは頬を膨らませた。

「大雑把さが増えたって、私はそんなじゃ……なくもないかも」
苦笑を浮かべながら呟くイリスの肩をレミリアは軽く叩く。

「気にしない方がいいと思うわ」

「レミィ……、ありがと」

「イリス、お腹すいた。お菓子ない？」

一発で空気を破壊するチルノにバチュリーは軽く叩く。

「チルノ、空気呼んで」

「うっさいなあ……。黙っててよバチュリー。なんならアタシと弾幕で勝負する？」

「遠慮する。チルノの弾幕は氷だから、花が氷漬けになるからやめて」

バチュリーは軽く流すと、庭園の奥でレンにトランプットを教えているメルランと、2人の隣でヴァイオリンとキーボードを弾いているルナサとリリカに視線を移す。

「彼奴ら、飽きないのか？」

同じように4人を見ていた魔理沙が呟く。

「歌の国の民は、飽きることを知らないのよ。魔理沙、ミクから訊かなかった？」

「き、訊いていたよ！」

霊夢の言葉に魔理沙は顔を赤くして反論する。

「幽々子さん、今度イリスとフェリシアノ君、ルートヴィツヒさん、ロヴィーノ君と一緒に花見でもしようと思っているのですが、どうですか？」

「勿論行くわ。場所は？」

早速、花見の話をしている菊と幽々子にイリスは呆れていたが、小さく笑うとフェリシアーノを見ると、彼はロヴィーノ、シンと一緒にルーミアと話し合っている。

意気投合したらしく、色々と話しているようだった。

「良かったね、フェリ」

小さく呟くイリスは空を見上げる。

「フェイエルノート…、あんたの約束、必ず守るよ。だから…ノーチェとあずさと一緒に見ていて…」

その呟きに応えるように一陣の風が吹いた。

精霊樹の森（前書き）

なんか原作が増えた

精霊樹の森

翌朝、目覚めたイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノはリビングでくつろいでいた。

「あ、そうだ。ねえ、イリスの家って何部屋あるの？」
ふと思い出したようにフェリシアーノが訊ねる。

イリスの家は小さい家ながらも部屋が沢山あった。

その一室の部屋を使わしてもらっているヴァルガス兄弟の部屋の他にもスカーレット姉妹やチルノ、ルーミアの部屋もあった。

「んー：私の部屋と：フェリとロヴィの部屋：レミイとフランの部屋にチルノの部屋とルーミアの部屋：、後は客室が5つか7つ：かな？」

「かなりあるね：」

「三階建ての家だからね。幽々子とか菊も泊まりに：、ああーっ！」

突然の叫び声にフェリシアーノとロヴィーノは驚く。

「ど：どうしたの？」

「今日：幽々子達と花見する約束してたの忘れてた！」

・
・
・
・
・
・
・

「忘れるなよ！！」

間を置いてイリスにツツコミを入れるロヴィーノ。

慌てふためくイリスは台所に立つ。

「フェリとロヴィはレミイとフラン、チルノ、ルーミアを起こして！」

「判った！」

同じように慌てるフェリシアーノをロヴィーノは軽く叩くと、レミリア達を起こす為に二階へ上がる。

数時間後、沢山のおかずやおにぎり、更には沢山のクッキーやケーキ、タルト等を作り終え、巨大な弁当箱に詰め込み、紅茶、花茶、珈琲の水筒を弁当箱と同じ鞆に入れて持ったイリスと、支度を整えたフェリシアーノ、ロヴィーノ、レミリア、フランドール、ルーミア、チルノが広場に居た。

暫くすると幽々子と菊、霊夢、魔理沙、ルートヴィツヒ、ギルベルトが来た。

「イリス、お早う。かなり早いわね」

「おはよー、幽々子。実は慌ててたのさ。料理もかなり作ったよ」
あはは、と苦笑するイリスとは対称的に幽々子はパアツと顔を明るくする。

「ヴェ？幽々子？」

「幽々子はああ見えてかなり食べるんだぜ。んで、イリスの作るご飯が大好きってワケ」

魔理沙の説明にフェリシアーノは納得したようなしてないような表情になった。

「幽々子、精霊樹の森は桜霊樹と星霊樹の花が咲き乱れてるか？」

「ええ」

「んじゃ、行きますか」

イリスを先頭に彼等は精霊樹の森に向かう。

精霊樹の森に着くとまず視界に映ったのは光の魂だった。

「綺麗…」

じっと光の魂を見ている時、その一体がフェリシアーノに近寄ってきた。

『未来の予言を司る神子ですか…。ようこそ、精霊樹の森へ』

「リリー、久しぶり」

『お久しぶりです、イリスアリア。長なら桜霊樹の所にいますよ』

「ありがと。リリーは大丈夫？夕風の魔導は受けてない？」

『私達は大丈夫です。カシス様とフローラ様、長のおかげで魔導の影響はありませんから』

妖精リリーホワイトは弱々しくはにかみながら答える。

夕風が放つ魔導の影響で、かなり弱っている事が目に見えた。

「そっか…。でも、異変が起きたらすぐに知らせて」

コク、とリリーホワイトは頷くと森の奥に姿を消した。

「…夕風は一体、どれだけの罪のない人達を苦しめるんだろう」

フェリシアーノは呟く。

「最終手段として夕風は『破壊魔導』を使うつもりなんだろうな」
ルートヴィッヒの言葉にイリスは唇を噛みしめる。

「破壊魔導…。無垢な魂を魔導波へと変え、全てを破壊する暗黒魔法。その贄としてフェイ、あんず、ノーチェが殺された…。彼奴が破壊なら私は…」

「『破戒ノ華』を使うってのか」

俯くイリスにロヴィーノは怒りを露わにする。

「お前…忘れたのか？予言者のお前を守るために破戒ノ華を使った彼奴の…、サクラの最期を！？」

「忘れるわけない！サクラが死んだあの日は！」

「兄ちゃん、イリス落ち着いてよ！」

慌てて言い争いを止めようとフェリシアーノは2人の間に入ったが、言い争いは激しさを増す。

「お前は何時もそうだ！自分を犠牲にして何が変わるってんだ！？」

「ロヴィには判らないよ、あの時の私の気持ちなんて！私は…！」
『お止めなさい、ロヴィーノ、イリスアリア』

2人の言い争いを止めたのは、ふんわりとウェーブがかった長いサファイアカラーの長髪の女性…精霊樹の森の長、デルフィニウムだった。

「デルフィニウム…」

『イリスアリア、貴女はサクラと同じ悲しみを繰り返すと云うのですか？』

違う、とイリスは呟く。

「…違う…違う違う違う！私はサクラと同じ悲しみを繰り返したくはない！けど…最大の禁忌華術…『破戒ノ華』じゃないと…破壊魔導は消滅しないんだ…」

その声は儚げに聞こえ、誰もが俯く。

「ねえ、どうすれば華術を扱えるの？」

「華術は…イリスやサクラ…『華の神子』と呼ばれるが扱う事を許されたモノ…。誰でも扱える術ではないのよ」
幽々子の言葉にフェリシアーノは俯く。

「確かにそうね。でも、フェリシアーノならサクラと同じ華術師になれるかもしれないわ」

「え？」 全員の視線が一気にレミリアに集まる。

「『なれるかも』だから断言は出来ないけど、でも可能性はあるわ。サクラは彼と同じ予言の能力を持っていたしね」

「じゃあ、フェリは『臨星の華』を持っている可能性が？」

「まだ判らないわ。この事は彼に聞いてみないとね」

「アルトさんですね。確かに彼なら判るかもしれませんが。サクラと同じ村の出身でしたし」

納得する菊。

「ランカとシェリルにも会えるかな？」

「チルノ、それ今は置いといて」

目を輝かせているチルノに突っ込むルーミア。

「とりあえず明日、アルト達に会いに行きましよう。後はそれからよ」

一気に場をまとめる幽々子の言葉にイリスは頷く。

その後、彼女達は花見を楽しんだ。

だが1人フェリシアーノは胸騒ぎを覚えていた。

（何だろう…。嫌な予感がする…）

フェリシアーノが感じ取った予感はいリスも感じ取っていた。

（…明日は、警戒したほうが良さそうね…）

イリスは目を綴じる。

世界は闇に染まり、辺りに漂う匂いは弱々しい、遠くから発せられる麝香の様な匂いに変わった。

過去の後悔

翌日、イリス達は蒼蓮村に向かった。

蒼蓮村は『臨星の華術師』と呼ばれた少女サクラ・カノンの出身村であり、『華術師の里』と呼ばれ、様々な華術師が暮らす村だ。

村に入るとふわりと甘い香が漂ってきた。

「…香草の匂い。サクラと同じ…」

「あっ、イリスだ！」

入口に佇んでいたイリスに気付いた村の子供の1人が此方に駆け寄って来る。

「イリス、久しぶり！サクラの墓参りに来たのか？」

「あ…まあ、ね。楓、アルトはいるかな？」

「アルトならリリと話してる」

楓が言った人の名前にイリスは俯く。

「…リリは私の事、憎んでるよね」

「リリはイリスの事、憎んでなんかいないよ。一回話をしてみたら…」

「リリにとってサクラはたった一人の肉親…、大切な妹だったんだよ？私は彼女を殺したのも同然だよ…」

「イリス…」

フェリシアーノはじっとイリスを見つめる。

「…サクラの墓参りに行ってくる。ロヴィ達はアルト達の所に先行ってて」

「あ、イリス！」

フランドールが呼び止めるが、イリスは村の奥へと走っていった。

「やっぱり…イリスは気にしているのね」

レミリアは俯きながら呟く。

じっとイリスが走り去っていった奥を、ロヴィーノとルートヴィッツとは見据えた。

——白い花卉が舞う墓地にイリスは居た。

彼女は前に佇んでいる墓石に刻まれた少女の名前をなぞる。

墓石に刻まれている名前は『サクラ・カノン』。

嘗て『臨星の華術師』と呼ばれた華の神子の少女で、数年前、イリスを魔導から守るために禁忌華術を使用し、命を落とした。

「…サクラ…」

「あれ？其処に居るのってイリスちゃん？」

イリスは背後を振り返ると、其処に緑の髪の少女が花を入れた籠を持って立っていた。

「ランカ…」

「久し振り！元気にしてた？」

「……………」

「イリス…ちゃん？」

俯くイリスの表情が曇っているのにランカは気付いた。

「どうしたの？顔色よくないよ」

「ランカ…私が生きている意味は何？」

「えっ？」

「判らないよ…何で私は予言者として生まれたのか…創星の華を宿して生まれたのか…意味が…生まれてきた意味が判らないよ…教えてよ…誰か教えてよ…私が生まれてきた意味と理由が…判らないよおっ！！」

ポロポロと涙を零しながら理由を求めようと叫ぶイリス。

するとランカはイリスを優しく抱きしめた。

「…判らなくて、いいと思うよ」

「え？」

一瞬だけ、その言葉に理解が出来なくなった。

「生まれてきた理由と意味なんて判らなくていいの……。そうして人はみんな生きているんだから」

「ランカ……」

「そうよ。イリス」

不意に名前を呼ばれ、イリスは背後を振り返る。

其処には白銀の髪をショートカットに切った少女が居た。

「リリ!？」

「確かに妹は……サクラは死んだ。けどね、あの子は自らの意志で、命を捨てる覚悟で貴方を守る事を決めたの。私は貴方を憎んだりはしないわ。あの子が死んだのは、貴方を守るために命をはったからよ」

何度も語ったリリの言葉。

だがイリスはずっと頑なになっていた。

「……誰をも許し、民を愛する優しさを持っているから気にしているのね」

リリはじつとイリスを見据えながら呟く。

「お前がそんなんで、どうすんだよ」

「ロヴィーノ君」

ランカは後ろに立っていたロヴィーノとフェリシアーノに気付いた。

「……と、貴方は？」

「此奴はフェリシアーノ。俺の弟だ」

「ロヴィーノ君の弟……。じゃあ貴方が『言霊の予言者』なのね。私はランカ・リィ。この蒼蓮村に暮らす『歌風の華術師』なの」

「私はリリ・カノン。『聖刹の華術師』」

リリとランカが自己紹介すると軽くお辞儀をし、フェリシアーノの視線は俯くイリスに向けられた。

「イリス……なに何時までもズルズル引き摺っていんだよ。いつまでたっても変わらないぜ」

「……………」

「お前が不安になっていると民も、国も、サクラも不安になるんだぞ」

「!？」

イリスはバツと顔を上げる。

其処には強い光を帯びた瞳を持ったロヴィーノが居た。

「昔、お前、みんなに言ったよな。『1人が不安になると、みんなが不安になる』って」

「…あ」「今、そうなってんだ。イリスが不安になってるから、全員不安になってる。お前、フェリシアーノを守って決めたんなら、自己犠牲以外の守り方をしろ」

厳しさと優しさが入り混じった言葉。

イリスは思わず涙を零す。

「…そう…なのか…？」

すると苦笑を浮かべたロヴィーノが近寄り、幼子を慰めるようにイリスの頭を撫でる。

「そうだ。だから何時までもグズグズしてんな」

「…ありがと…う…」

泣きながら、笑みを浮かべながらイリスは呟く。

「よし、じゃあ、アルトのところに行くぞ。みんな待ってるからな」
「うん」

ゆっくりと立ち上がり頷くと、ロヴィーノは小さく溜息をつく。

「まったく、流石イリスアリア姫だな。立ち直りが早すぎだって」

「私は姫でも戦姫。何時までもグズグズしてられないわ」

「ホントに立ち直り早いね」

「でも、そこがイリスの良いところだよ」

「ふふっ、そうね」

五人は笑いあった後、目的地に向かった。

存在しない華・同じ華

目的地に辿り着いたイリス達は、とある民家に入る。

中には先に行っていたルートヴィツヒ達と青年と少女が居た。

「遅かったな」

「ごめん。漸く気持ちの整理が出来たからもう大丈夫だよ」

その言葉にルートヴィツヒは安心したような表情になる。

「よう、イリス。久し振りだな」

「久し振りね、アルト。そう言えばシェリル達は？」

「シェリルとミハエルはデルフィニウムとこ行ったぜ。リースとリュナは精霊が心配だからって『聖晶の洞窟』に」

「やっぱリリー達だけじゃなく、彼等にも影響が出ているのか」

「ああ。カーバンクル、シルフ、サラマンダー、ウンディーネ、ドライアード、ノーム、ウィル・オ・ウィプス、オーロラ、スノウ、シェイド…更には『精霊のたまご』、精霊の源であり飯の『マナ』にも影響が出てる」

イリスはアルトの語る言葉に唇を噛みしめる。

「たまごとマナにまで…」

「カシス姫様やフローラ様のお陰で精霊達は安定を保っているよ。けど、夕凧の国が放つ魔導を何とかしないと…」

「ごめん…」

ランカの言葉にフェリシアーノは謝り、慌ててランカは手を振る。

「フェリシアーノ君が謝る必要はないよ！」

「そうだよ。フェリが悪いんじゃないんだからさ。気にしない、気にしない」

「ランカ、チルノ」

小さく「ありがとう」とフェリシアーノは呟く。

と、アルトはフェリシアーノの内に何かを感じ取った。

「アルト？」

「イリス、フェリシアーノは『華』を持ってる。しかも、サクラがその内に宿していた『臨星の華』だ」

「!!」

イリスは驚きを隠せなかった。

亡くなったサクラがその内に咲かしていた華が、フェリシアーノの内に咲いている事に。

華術師が死する時、その身に宿す華は宿主が死ぬと同時に消滅する。つまり、同じ華術師でも同じ華は咲かない。

だが、フェリシアーノの内に宿る臨星の華は、死んだサクラが咲かしていた臨星の華で、嘗てない異例のパターンだった。

「嘘…。『華』に『同じ個体』は『存在』しない。姿カタチが同じ華はあっても、似たような華は無い」

「俺もその事は判ってる。けどな、フェリシアーノに宿る臨星の華は、確かに『サクラの臨星の華』なんだ」

イリスは呆然とし、フェリシアーノを見据える。

——暗い闇が包む空間、少女は1人歌う。

「…『存在しない華』の星詠みの神子、『同じ個体の華』の言霊の神子…見つめ、御霊を捧げた新たな世界はココロが欠けた不完全な世界…ココロ欠けた新たな世界…月の雫が滴り落ち、太陽が涙を流し、星の泉が満ち溢れる…また2人、新たな神子が生まれ落ちた…眠れぬ夜に哀しむ血のごとく紅き月…目覚めぬ朝に消え去る儚き蒼き太陽…戒の呪縛に縛られた終わらぬ狂詩曲を私は謳う…」

歌う少女の胸元に輝く銀のペンダントに刻まれた名は————

『サクラ・カノン』

六つの華

——アルトの話に驚きを隠せなかったのはイリスだけではなかった。サクラの華を宿すフェリシアーノも、ルートヴィッヒ、菊、レミリア、フランドール、チルノ、ルーミア、幽々子、魔理沙、霊夢、ギルベルト、リリ、ランカも驚いていた。

「…ありえないわ。サクラの華は『あの日』確かに消滅したのよ」リリは首を横に振り否定する。

「アルト、ランカ：フェリの華、取り出せる？」

「今すぐは無理だよ。シェリルさんとミシェル君、リースちゃんとリユナちゃんがいらないもん」

「取り出した事のない個人の華は『幽玄』『双廉』『鳴鈴』『黎翔』『歌風』『刹那』の力を合わせないと取り出せない事は、イリスも知ってるだろ」

そうだけど、とイリスは呟くと考え込む。
と、ある考えが浮かんだ。

「『創星』…、私の華は使えない？」

「イリスちゃんの華？確かに『創星』は全ての華とは違う『存在しない』力を持つけど…」

「…やっぱ無理ね」

「それはそうだろ」

「きっぱり言わなくてもいいじゃん…」

きっぱりと言い張るアルトに、しゅんとなるイリス。

2人の会話にランカは「仲が良いんだねえ」と語る。
その後2人に怒られたが。

フェリシアーノに宿る臨星の華が、本当にサクラに宿っていた臨星の華かどうか調べる為には彼に宿る華を取り出す事しかなかった。だがその力を使うには、アルトに宿る『刹那の華』、ランカに宿る

『歌風の華』の他に『幽玄の華』、『双廉の華』、『鳴鈴の華』、

『黎翔の華』の力が必要だった。

『幽玄の華術師』シェリル、『双廉の華術師』ミハエル、『鳴鈴の華術師』リース、『黎翔の華術師』リュナが居ない今、真相を知るのは難しい。

今は不在の4人を待つしかない、誰もが思ったその時。

外が異様に騒がしく、同時に禍々しい気配が流れた。

「たっ、大変だ！」

慌てふためく男性が家の中に入ってきた。

「どうした！？」

「さ…サリエルとレミエルが、自我を失って村を破壊しているんだ！」

「サリエルとレミエルが！？まさか魔導の影響…」

「考えるのは後にして、アルト！村人は大丈夫なの！？」

イリスは男に向かい叫ぶ。

「は、はい！精霊樹の森に避難させました！」

「わかった。2人を押さえている華術師達も避難するように指示して。後は私達に任して貴方達も避難を」

「わかりました、イリス様！」

男は強く頷くと家を飛び出した。

外から匂う薫りが甘い匂いから血汐の匂いと異臭へと変わっていった途端、イリスの髪は白銀、双眸は深紅へと変わる。

「行こう。サリエルとレミエルを助けに」

イリスはそう言う外に出、先に出た彼女の後をフェリシアーノ達は追った。

イリスの歌

焰が舞い上がる広場。

夕風の放つ魔導の影響で自我を失った2人の天使が暴れていた。

広場に辿り着いたイリス達はそれぞれの武器を構える。

城に救援要請を入れたが恐らく間に合わない。

最大限、食い止める為にイリス達は戦う事を決めた。

「サリエル！レミエル！お願い止めて！」

ランカは必死で天使の暴走を止めようと叫ぶが、自我を失った2人に彼女の叫びは届かない。

アルトは手にしていた銃剣の柄を握り締める。

やるせない気持ちになったランカも白木の弓を構え、矢を引き絞る。地にフランヴェルジュを突き刺したイリスは深く息を吸う。

「…夢見た世界は闇へと消える。フラジールの祈りは儚く解ける…」突然、歌い出したイリス。

歌い始めたのと同時に辺りに白い羽根が舞い散り、彼女の背に白い翼が生えた。

その様子に驚き、呆然としたフェリシアノ。

「あれは創星の力。イリスに宿るもう一つの華…『神歌の華』を使って具現化したモノだよ」

フランドールはジツとイリスを見据えながら語る。

イリスには、二つの華が宿っている。

存在しない力を操る『創星の華』と、全ての華術を操る『神歌の華』。

『イリス・プラトリーナ』と云う『神歌の華術師』。

『イリスアリア・デイジー・セルフイーア』と云う『創星の華術師』。

『プラトリーナ（希望）』と『アリア・セルフイーア（祈り）』。希望と祈りの花『イリス』の名を持ち、二つの華を宿す華の皇女。

イリスの白い翼からは強い光が放たれる。

「：月夜に沈め、哀しみに暮れる神。その光はけして喪われない事を誓おう。古のコトバを抱いて：」

澄み切った風のような、天空のような歌声。

そんな歌声に似あわない焰舞い上がる光景。

自我を失った天使と、歌い祈る皇女。

誰もが息を呑む光景だった。

途端、サリエルはイリスに光弾を放つ。

アルトはすかさずイリスの前に立ち、光弾を弾く。

「おい！ボサツとしてるな！サリエルとレミエルを元に戻すためには『イリスの歌』が必要なんだ！イリスを守るぞ！」

「判った！」

フェリシアアノは頷くと詠唱を始めた。

ルートヴィツヒ、ギルベルト、ロヴィーノ、菊はアルトと共に接近戦。

ルーミア、チルノ、レミア、フランドール、幽々子は弾幕で応戦し、ランカ、フェリシアアノ、リリは魔術や華術で応戦した。

レミエルの攻撃が全方位に放たれ、リリはすかさず結界を張るが、一つが結界を破壊しイリスを襲いかかる。

「イリス！」

「清廉の結界！」

青年の声が響きイリスの周りに結界が張られ、攻撃を防ぐ。

そして、サリエルとレミエルの足元に魔法陣が浮かび上がり、2人の動きを封じ込めた。

「ふう……。危なかったな」

「危機一髪ってところかしら」

「：リユナ、あの2人」

「うん、リース。2人は、あの力に侵されてる」

「ミシエル君！シエリルさん！リースちゃん、リユナちゃん！」

背後に現れた青年と女性、少女2人にランカは驚く。

「ミハエル、シェリル、リース、リュナ！来るのが遅い！」

苛立ちを隠せないアルトが叫ぶとミハエルは小さく笑う。

「俺達はデルフィニウムの所に居たんだ。それに、リース達は精霊の様子を見に行った。遅くなるのは当たり前だろ、アルト姫？」

「てめえ…喧嘩売ってんのか？」

「アルト！ミハエル！戦闘に集中しろ！」

ルートヴィッヒの言葉にアルトは渋々喧嘩腰を抑える。

「了解、ルートヴィッヒ隊長」

「ミハエル、後で覚えてろよ？」

ギツとミハエルを睨むアルトが呟く。

「まったく、喧嘩してんなよ。喧嘩ばかりだと、やってられなくなるぜ」

「魔理沙も少しは集中して」

霊夢は呟くとレミエルに向かって弾幕を放つ。

サリエルはレミエルに向かって放たれた弾幕を結界で防ぐ。

終わりが見えない攻防戦。

だが、遂に終わりを迎える。

「…錆び付いた刃には遥かな煌めきが宿る。祈り捧げる神を貫くのは…その光…。終わり無き夢想曲…未来を見つめる瞳に願いを込めて…」

イリスが歌い終えた途端、無数の花卉が天使達を包み込み、巨大な水晶の華を形成する。

華が舞い散ると、其処には横たわる天使が居た。

正気に戻ったサリエルとレミエルが唸りながら起き上がると同時に、イリスはガクンと膝を折る。

「イリス！」

フェリシアアノは慌ててイリスに駆け寄り、支える。

「…大丈夫？」

「うん…。華術を操る時、精神力を使うの。二つの華を操るなんてかなり精神力を使うものなのよ」

白銀から元の碧色の髪に戻ったイリスは、少し苦しげな笑みを浮かべる。

暫くして、アントーニヨ達が来、全員は村の長を訪ねる事にした。

悪魔の華（前書き）

長の会話が
ない…

悪魔の華

村長の家には村の長と、正氣に戻ったサリエルとレミエルが居た。

「イリス、ありがとう」

ふんわりと笑いながら礼を言うレミエルと、小さく会釈するサリエル。

「レミエル、サリエル」

「何、フラン」

「2人が自我を失った原因って、魔導の影響なの？」

フランドールの質問に2人は俯くと、微かに頷く。

「確かに私達は夕凧の魔導で自我を失ったわ。けど、何かおかしいのよ」

「おかしいって？」

「夕凧の魔導には、何かが混じってる感じがするの。そう、『悪魔の華』と同じ波動の」

「悪魔の華って、闇の国に咲く華でしょ？ルシア女王の許可ナシに採ることは出来ない筈だよ」

イリスは怪訝そうに言う。

悪魔の華は闇の国に咲く特殊な華で、睡眠薬として利用される華。だが魔術的な価値もあり、呪いを使うときにも利用される。

そんな事から闇の女王ルシアは悪魔の華の採取に制限を設けた。

「でも、ルシア様の眼を逃れて悪魔の華を育成している人もいるらしいよ。悪魔の華は条件さえ揃えば他国でも育てられるから」

「ルーミア、何で知ってるの？って、そうか。ルーミアのお母さんは闇の国出身だったね」

フランドールの言葉にルーミアは頷いた。

「夕凧の国で悪魔の華を育ててるか、その違法を犯している人から輸入してるかになるわね」

「そうだね」

レミエルとサリエルはうなずき合う。

「…ねえ、みんな」

「何、イリス？」

「あのさ、フェリに咲いている臨星の華の事、忘れてない？」
イリスの一言で訪れた沈黙。

「」「」「あ」「」

「…忘れてたな…」

全員の声にイリスは苦笑を浮かべた。

その後、長とサリエル、レミエルと別れたイリス達は、フェリシア
ーノに宿る華を調べるために『華星の神殿』に向かった。

臨星の華と無の華

村を出て、イリス達は白い花が咲き乱れる草原にポツンと聳え立つ神殿『華星の神殿』に着いた。

神殿と云うよりも塔と云った方が良いというかんじの建物に入ると、澄み切った空気が辺りを漂う。

神殿の最上階へと向かうと、複雑な魔法陣が描かれた床と、目の前にある祭壇に置かれた石像の前に立つ1人の少女がいた。

『イリスアリア姫、ようこそ』

「華の守護神フェナサイト・シード。訊きたいことがある」

『フェリシアーノ皇子の華についてかしら？』

フェナサイトの言葉にイリスは頷く。

『けど、訊くよりも、みた方が早いわ。魔法陣を使いなさい。話はその後で』

そう言うどフェナサイトは、祭壇に置かれたユニコーンを模した石像の上に乗る。

途端、魔法陣が輝き出す。

「フェリ、魔法陣の真ん中に行って立って。貴方の中にある華を調べるために華を取り出すから」

「う…うん」

不安げになったフェリシアーノの肩をイリスは軽く叩き、勇気づける。

気分が少し楽になったフェリシアーノは恐る恐る魔法陣の中央に向かい、立つ。

その後、アルト、ランカ、シェリル、ミハエル、リース、リュナはそれぞれ『刹那』、『歌風』、『幽玄』、『双廉』、『鳴鈴』、『黎翔』と古代文字が書かれた場所に立つ。

「フェナサイト」

『判っていますわ』

イリスに促されたフェナサイトはフェリシアーノの近くに寄る。

『地の精霊、水の精霊、焰の精霊、風の精霊、雷の精霊、樹の精霊……六つの御霊の力を借り、今此処に立たん神子に咲きし神の華を見せたまえ……フェナサイト・シードの名の下に咲き乱れよ……』

フェナサイトが詠唱を終えた途端、フェリシアーノの胸元から光に包まれた薄い紅色の華が現れた。

『……サクラに宿っていた臨星の華です……』

「やっぱり……」

『……サクラは彼に『返せた』のですね。華を』

「え……？」

「返せ……た？」

意味不明な言葉に全員の視線はフェナサイトに集まる。

『サクラに宿っていた臨星の華は、本来は言霊の神子に宿る華です……』

「でっ、でも！サクラも言霊の神子の力があつたよ！？」

理解が出来なくなったフランドールは叫ぶ。

『サクラにあつた力は『予言』ではなく『預言』……。預言の力は、神からの言葉を授かる言霊の神子の力と酷似した力なのです』

冷静を失ったイリス達とは対称的に、落ち着いて語るフェナサイト。

『臨星の華の仮宿主となった預言者は、本来の宿主である言霊の神子に華を返す役目があります。サクラはその使命を理解し、華をフェリシアーノ皇子に返したのです』

「じゃあ、あの時……サクラが死んだ時に消滅した華は？」

『あれは『無の華』。神子に返した時に咲く、膨大な力を一時的に解放させる能力しか持たない虚いの華。サクラは無の力と生命を解放して、破戒ノ華を発動させたのです』

その言葉に全員は哑然とした。

臨星の華を本来の宿主であるフェリシアーノに返したサクラに宿った無の華。

その華の波動と生命を解き放って、サクラは禁忌華術を発動させた

のだ。

だがサクラは全員にその事は伝えなかった。

これは自分の使命で、誰の手も借りてはいけなと感じ取り、言えなかった。

そして、サクラは夕風の国に遠征についた時、相手の隙についてフエリシアーノに華を返した。

無論、当の本人が眠っている間に。

イリスが危険に陥った時、サクラは生命を犠牲にして禁忌華術『破戒ノ華』を発動させ、息絶えた。

真実を知った全員は黙っているしか出来なかった。

真実を知って何も言えなかった。

サクラの心と歌（前書き）

…悪魔の華、存在忘れてた（苦笑）

ダメじゃん、俺。

サクラの心と歌

——華星の神殿を後にしたイリス達は沈黙を守っていた。

悪魔の華の事もフェナサイトに聞いて、夕凧が悪魔の華を育成していることも知った。

だが、それとは別。

彼女達はサクラが使命の事を言えなかった理由を考えていた。

「あたし、サクラの気持ち、判るよ……。サクラ、辛かったと思うんだ……。言いたくても言えなかった事溜め込んでいた筈だから……」

「チルノ……」

「あたし達にだって言えないことはある。サクラは、死んじゃうかもしれないような重い使命を黙っていた……。あたしがサクラの立場になったら、誰にも言わない……。言ったら迷惑を掛けそうって思うもん……」

チルノの言葉に、その場に居る全員が俯いた。

皆、チルノが言ったように、サクラの立場を考えていた。

結果、チルノと同じ、誰にも言わないと云う事に全員が辿り着いた。

「……サクラ……」

イリスは空を見上げ、思わず彼女の名を呟いた。

——その頃。

漆黒の闇の中、サクラの名が刻まれたペンダントを胸元に提げている少女はまだ歌っていた。

「儚い世界は闇へと消えてく、光の欠片は泡沫の果てへ。歪んだ心は刃で貫かれ、偽りのコトバ胸に抱いて、虚無に包まれ消え果てる

…。諸刃の剣は闇の悲しみのフラジール、夢見た世界は漆黒へ解けてった…。さ迷う魂は水底に囚われ凍てついた、泉の水は幻の花と変わり果てた…」

『…サクラ、また歌っていたの？』

「フェンネル、うん。フランドールに教えてもらった歌を私なりにアレンジした歌」

サクラと呼ばれる少女は目の前にいる少年、フェンネルにそう言う。フェンネルはフェナサイトの弟で、魂の守護神。

靈魂の都と呼ばれる異次元空間に存在する場所で天に向かう魂の管理をしていた。

『サクラ、帰りたい？』

「フェンネル、私はもう死んでるし、華術師でも預言者でもないの。帰る理由なんてないよ…」

突き放すようにサクラは言うが、言葉は悲しみを帯びていた。

あの日、サクラはイリスを守るために禁忌華術『破戒ノ華』を発動し、死んだ。

だが、サクラの魂はあるべき場所へは還らず、靈魂の都でさ迷っていた所をフェンネルに助けてもらった。

フェンネルはあるべき場所へ還らないサクラに違和感を感じ、調べたところ、サクラは肉体が精神体と同化し、所謂、魂だけの存在となっていた。

彼は元の世界にサクラを帰そうとしたが、彼女は自分が死んだ事とタダの人間になっている事を理解していた。

そのため、サクラは元の世界には帰らず、フェンネルの手伝いをしている。

フェンネルはサクラが元の世界へ帰りたいと思っているのを感じていたが、当の本人は頑なに帰る事を拒んでいた。

サクラは「あっちでは自分は死んでるのに、いきなり生き返ったらみんなに怖がられる」とだけ言うだけで、本当の理由は教えなかった。

フェンネルは呆れていたが、真の理由を理解していた。

『…無理はしないでよね』

「判ってる。いこ、フェンネル」

心配するフェンネルの手をサクラは繋ぎ、歩き出した。

（本当は無理してるくせに…）

ひっそりとフェンネルは思いながら歩いた。

フローラの手紙

城下町のイリスの家に戻ってきた、イリス、フェリシアーノ、ロヴイーノ、チルノ、ルーミア、レミア、フランドール。

会話は無く、誰もが沈黙を守っていた。

すると、家の扉がノックされる。

「はい…」

イリスが扉を開けると其処には一人の少年がいた。

「姉上、僕です」

「…エルバ？」

「母上から書状を渡すように云われました」

エルバは手にしていた書状をイリスに渡すと、一礼して家を離れた。途端、全員がイリスを囲む。

「イリス、それは書状？」

ヒョイとイリスの手元を覗き込んだフランドールが訊ねる。

「ううん、書状よりも手紙に近い。…読むよ」

イリスは封筒の封を切ると中にある手紙を読む。

――イリス、真実を知ったのならフェリシアーノと共にある場所に向かい、其処にある試練を乗り越えて、神器を手に入れなさい。

試練は貴方にも、フェリシアーノにも辛いもの。

乗り越える覚悟があるのなら、行きなさい。

世界を、夕風を含む全てを救いたいのなら新たな力を授かりなさい。

貴方達なら出来るわ。

あの神子の姉弟の生まれ変わりである貴方達なら。

場所は靈魂の都。

其処にいるフェンネルに会い、試練を受けなさい。

手紙の内容に、イリス達は何かを感じ取った。

その何かは判らないが、イリスとフェリシアーノにとっては何故か懐かしい感覚に陥らせるモノ。

封筒に手紙を仕舞うとイリスはフェリシアーノと向き合う。

フェリシアーノは真剣な眼差しでイリスを見据える。

「…イリス」

「判ってる、フェリ。行こう。私達が何で予言の力を授かったのか…夕風を変えられるのなら…今、此の世界で起こっている事柄を知るいい機会だからでしょ？」

「うん。もし、夕風が変えられるのなら俺は行く。辛いものだし、でも、乗り越えられるなら…」

「行くんだね。イリス」

突如聞こえた声にイリス達は振り返ると、其処にはミクと青い髪の青年がいた。

「ミク、カイト」

「靈魂の都に行くのなら、判ってるよね？」

「判ってる。歌の国に受け継がれる『魂の追想曲』…。それを奏でる歌姫のミクと、ルナサ、メルラン、リリカの楽器の力が必要だ…」

「判ってるみたいだな」

「じゃっ、私と兄さんは場所は夢見の遺跡。待ってるからね、イリスアリア、フェリシアーノ」

ミクとカイトが家を出た後、イリスは一息はく。

「…辛い試練…。私達の過去に関係するモノかな…」

「フェイ姉ちゃんの幻と戦う…とか？」

「あり得る。もしかしたら二度と生きては帰れない戦い…」

「ヴェ…」

フェリシアーノは俯く。

「とても辛く、とても厳しい試練…。でも…、受けないと駄目だよ」

「そうだね。コレを受けないと、みんなを助ける事も出来ないから…。行こう、イリス」

「うん。世界を…夕風の魔導を破壊するために…」
2人は頷くと、ロヴィーノ達に向き合う。

「はぁ…どうせ俺達が止めたって行くんだろ？」
溜息混じりにロヴィーノは呟く。

「行ってらっしゃい！イリス、フェリ！」

「アタイ達、待ってるからね！頑張ってよ！」
応援するフランドールとチルノ。

「頑張りなさいよ」

「帰ってきたら試練の内容教えろよな、イリス！」

「魔理沙は黙ってて」

霊夢に叩かれる魔理沙。

「靈魂の都には妖夢が居るはずだから、彼女に私は元気だって伝えて置いて」

「判った、幽々子」

イリスは幽々子からの伝言を覚えると、チャクラムをテーブルの上に置く。

「フランヴェルジュだけ持ってくのか？」

「うん。二つの華を制御する（操る）に武器は一つだけでも十分だからさ」

にっこりと笑うイリスはロヴィーノの質問にそう答えると、入り口に向かう。

フェリシアーノも慌ててイリスの後を追いかけた。

ふと、扉のノブに手をかけると2人は後ろを振り返る。

「「行ってくる」」

そう言うと2人は家を出た。

イリスとフェリシアーノが居なくなった部屋に、微かなイリスの花とフィラの花の香りが漂った。

設定4

【キャラ紹介】

・サクラ・カノン

華の国出身の少女。

言霊の力とよく似た預言の力を持っていた華術師。

身に仮宿りしていた臨星の華をフェリシアーノに返した後に無の華が咲き、華の力と生命を解放してイリスを守った。

だが、魂と肉体が同化し、靈魂の都で仮住まいをしている。
武器は剣。

・リリ・カノン

華の国出身の少女でサクラの姉。

聖刹の華を身に宿す聖刹の華術師。

戦闘でかなりの実績を持ち、一瞬で敵を殲滅する事から『刹那の術師』と呼ばれる。

武器は杖。

・リース・カノーパス

華の国出身の少女でリュナの妹。

黎翔の華を身に宿す黎翔の華術師。

相棒である光の精霊ウィル・オ・ウィプスのリリアと共に戦場で傷

付いた兵士達を癒やす精霊術師でもある。

『光霊華の術師』の称号を持つ。

武器は杖。

・リュナ・カノープス

華の国出身の少女でリースの姉。

鳴鈴の華を身に宿す鳴鈴の華術師。

相棒である闇の精霊シェイドと共に敵を殲滅する精霊騎士。

『闇霊華の騎士』の称号を持つ。

武器は剣。

・ランカ・リー

華の国出身の少女でサクラとは同期の華術師。

歌の国出身の母を持つ。

歌風の華を身に宿す歌風の華術師。

明るく、歌う事が好き。

キラと同じで争うことは好まない。

武器は弓。

・早乙女アルト

華の国出身の少年。

刹那の華を身に宿す刹那の華術師。
少女と見間違える程の顔立ちで『アルト姫』とからかわれる事がある。

イリスとは旧友の仲。
武器は銃剣。

・ミハエル・ブラン

華の国出身の少年でアルトとは幼馴染。
幽玄の華を身に宿す幽玄の華術師。
ルートヴィッヒが居る部隊に入隊している。
アルトの事をよくからかっている。
武器は剣。

・シェリル・ノーム

華の国出身の少女。
双廉の華を身に宿す双廉の華術師。
ランカと同じで母が歌の国出身。
高飛車な性格だが芯は優しい。
生命をかけてイリスを守ったサクラに憧れを抱いている。
武器は双槍。

靈魂の都

華星の神殿に程近い夢見の遺跡に着いたイリスとフェリシアーノ。狭そうな外見とは裏腹に中はかなりの広さがあった。

先に着いていたミク、カイト、ルナサ、メルラン、リリカは2人が来た事に気づき、振り返る。

「遅いよ、イリス、フェリシアーノ」

リリカはフワフワと宙に浮いているキーボードの鍵盤をコツコツ叩きながら言う。

ルナサはヴァイオリン、メルランはトランペットを持って待っていた。

ミクは確認していたらしく、古代文字が書かれた楽譜を持っていた。カイトはと言うと、床に描かれた魔法陣の点検をしていた。

「ごめん、みんな。カイト、魔法陣は大丈夫なのか？」

「ああ。準備は整っているよ。イリス、フェリシアーノ、魔法陣の真ん中に立って」

コクンと頷き、イリスとフェリシアーノは魔法陣の中央に立つ。

そして、ミク、ルナサ、メルラン、リリカはそれぞれの立ち位置に立った。

ミクは深く息を吸うと歌い始め、歌に合わせてプリズムリバー三姉妹は楽器を鳴らす。

透き通った歌声は空間を揺るがし、光を放つ楽器の音色は異空間へと繋げる。

歌の国に伝えられている魂の追想曲は、歌の姫君の声、光楽器の音色が奏でる繋の曲。

その音色は靈魂の都への鍵となり、華術師は試練へと向かう。

だが、その試練を越えた者はおらず、帰ってきた術師はいなかった。

「フェリ。失敗したら二度と帰れないよ。それでも行くの？」

その事を思い出したイリスがフェリシアーノに訊ねる。

「俺は行くよ。試練は乗り越えるモノ、でしょ」

フェリシアーノの答えにイリスは思わず吹き出す。

「ふっ…。そうね」

イリスは何時の間にか白銀の髪と紅い双眸へと変わっていた。すると空間に歪みが生じた。

「ゲートが開いた…。靈魂の都へと繋がったよ」

カイトはそう言うのと表情を引き締める。

「靈魂の都に入ったら、試練をクリアしない限り出られない。覚悟はあるのか？」

「何を今更。試練は乗り越えるモノ」

「俺達、覚悟は出来てるよ」

その答えにカイトは小さく笑う。

「そうだな…。行つてらっしゃい」

「「行つて来ます」」

2人はそう言うのと、ゲートへと入った。

――暫く歩いていると、2人の目の前に白い球体を従えた少女が立っていた。

「妖夢」

「お久しぶりです、イリス。幽々子様はお元気でしょうか？」

「ん。元気だよ」

妖夢は小さく笑うと、すぐに表情を引き締めた。

「此処に居る、と云う事は試練を受けに来たのですね」

「うん。フェンネルに合わせて」

「判りました。此方です」

先頭に立つ妖夢の後をイリスとフェリシアーノは追った。

暫くすると、一人の少年がイリスとフェリシアーノの来訪を待っていた。

「はじめまして、フェリシアーノ・ヴァルガス。僕はフェンネル・シード。靈魂の都を治め、華術師に試練を与える魂の守護神」
フェンネルはイリスに視線を向ける。

「イリス・プラトリーナ：いや、今はイリスアリア・デイジー・セルフィーアだね。久しぶり」

「初めて合ったのはフェナサイトと一緒に居たときね…。それよりも」

「試練、でしょ？」

イリスは頷く。

するとフェンネルは表情を険しくする。

「イリスアリアとフェリシアーノの試練は特殊で単独で行うモノ…。成功する確率は極めて低い…」

「それでも：俺達はやらないとダメなんだ」

「フェリの言うとおり、私達はやる」

その言葉にフェンネルは目を綴じる。

「じゃあ、行こうよ」

フェンネルが手を振り上げた途端、イリスとフェリシアーノはそれぞれ隔離された。

フェリシアーノが居たのは漆黒の闇に閉ざされた場所。
そして、彼の視線の先に居たのは：

イリスもフェリシアーノと同じように漆黒の闇に閉ざされた場所だ。
彼女の視線の先には…

試練開始（前書き）

イリスとフェリシアーノの影の性格は好戦的だよ。

：まあ、私がイメージする大体の影の性格は何故だか好戦的。

理由？

ゲームとかの影響。↑分かってんかい！

試練開始

——フェリシアーノの視線の先に居たのは、彼自身だった。

「お…俺!？」

思わずフェリシアーノは叫ぶ。

『そう、俺は君…。君の影、って言った方が分かり易いかな?』

「俺の…影…」

呆然と、フェリシアーノは自分の影を見据える。

『けど、君は此処で終わる…。何故なら俺が君を殺すから』

「!？」

『予言するだけの生き方しか出来ない、弱い俺なんか要らない…。ずっとそう思ってたんでしょ?』

フェリシアーノは影が言うことに理解が追いつかなかった。

だが以前、フェリシアーノはそう思った事があった。

フェイエルノートが死に、同時にロヴィーノが追放された日以来、ずっと。

『だから、俺が変わってやるよ…。フェリシアーノ』

「っ! バリア!」

フェリシアーノはすかさず攻撃をシールドで跳ね返す。

『あっはははっ! フェリシアーノ、やるね!』

「っ! こんな…俺じゃないっ!」

フェリシアーノは杖を握り締め、影と対峙をする。

——同時刻、イリスは向き合っている2人の少女を見据えていた。

片方はイリスの影、もう一人は…。

「サクラ…」

「久しぶりね、イリス」

サクラは小さく笑う。

亡くなった親友と戦う事をイリスは躊躇いを感じた。

『イリス、躊躇ってるのかな？』

影の言葉にイリスは何も言い返さなかった。

『まあいいか…。どうせイリスは此处で死ぬのだからね…』

「な…に!？」

イリスは絶句する。

『安心して…。私が変わりになってあげるから…。負の苦しみを捨てられないイリスなんか要らないから…』

そう言うとき影はイリスに切りかかる。

イリスはフランヴェルジュを抜刀し、刃を防ぐ。

「臨鈴の華」

サクラが華術を発動させる。

刃を弾くとイリスはすかさず攻撃をかわした。

『あはっ！消えなよイリス!』

「誰が…消えるか!」

怒りに震えるイリスはフランヴェルジュの柄を強く握り締めると、影とサクラと対峙をした。

フェリシアーノの試練（前書き）

今回はフェリがメインですっ！

ちよつとした過去話もあります！

フェリシアーノの試練

自分の影と対峙をしているフェリシアーノ。
だが、圧倒的に影の方が強く、フェリシアーノは体力的に限界がきていた。

「はっ…はあっ…」

『あれ？もうバテたの？つまらないなあ…』

影は空を斬るように右腕を薙ぎ払う。

同時に衝撃波がフェリシアーノを襲った。

「っ！！」

吹き飛ばされたフェリシアーノの体は床に思い切り叩きつけられる。
肺が潰れるかのような衝撃に息が一瞬止まる。

「かはっ…」

『あははっ』

影は愉しそうに嗤い、フェリシアーノへと近づく。

「っ…」

『俺さ、お前の事なんて嫌いだよ。弱くて、泣き虫で、すぐ何にでも怯えるお前なんか大っ嫌い』

静かな怒りを湛えながら影は語る。

その表情は愉しそうに嗤っていたが。

フェリシアーノは反撃するが、攻撃はするりとかわされる。

『無駄な足掻きだよ。フォースレイ』

放たれた魔術はフェリシアーノを直撃した。

「っ！！」

『言っただろ？俺はお前が大嫌いだって…。だからさ、消えてよ。』

フェリシアーノ』

影はゆっくりと手を振り上げる。

「フェイ…ねえ…ちゃん…ロヴィーノ…にい…ちゃ…」

フェリシアーノは思わずフェイエルノートとロヴィーノの名を呟く

と、目を綴じる。

その時。

――フェリに手を出さないで！

――フェリシアーノに手を出すな！

「!?」

突然聞こえた声にフェリシアーノは目を開く。

そこはあの漆黒の世界ではなく、夕風の王城の中。

視線の先に居るのは夕風王と言い争っている栗色の髪の少女とロヴィーノ。

「フェリを殺すなんて、喻え父親だろうが許さない！絶対に！」

怒りに震えているフェイエルノートは夕風王に向かい、叫ぶ。

「お前なんか親父じゃねえ！あいつは：フェリシアーノは絶対に守る！何があってもな！」

すると夕風王は腰に携えた剣を鞘から無言で引き抜く。

フェイエルノートは危険を感じ、ロヴィーノを背後に追いやるとフルーレを構える。

その時。

「フェイ姉ちゃん、ロヴィーノ兄ちゃん。なにしてるの？」

「「!?」」

2人が振り返ると其処には眠い目を擦っているフェリシアーノがいた。

「っ！フェリ、来ちゃダメ！」

「来るな、フェリシアーノ！」

「えっ？」

理解が追いつかないフェリシアーノ。

姉と兄が叫んだと同時に夕風王はフェリシアーノへ向けて魔導を放つ。

フェイエルノートとロヴィーノは素早くフェリシアーノの前に立ち、結界を張り、魔導を跳ね返す。

だが威力は凄まじく、二重に張られた結界に罅が入る。

「逃げるよ！」

フェイエルノートはロヴィーノとフェリシアーノを抱きかかえると、外に出る。

暫くして中庭に着き、彼女は双子の兄弟を中庭の椅子に座らせた。空は青黒く染まり、満月が昇っていた。

と同時にフェリシアーノの脳裏に紅い床に倒れ込んだフェイエルノートと、シアトルによって夕風から出されるロヴィーノの姿が映る。予言の力が働いたのだ。

「っ！」

「フェリ…、何か視えたの？」

「あ…その…」

言葉に詰まる。

何かを感じ取ったフェイエルノートは小さく笑う。

「フェリ。姉ちゃん、そんなに生きられないかもしれない。王に楯突いた人間の末路は死、あるのみだから。大丈夫。2人は夕風から出してあげるから…」

「姉ちゃん…」

「もし、華の国へ行けたならこのペンダントを華の皇女イリスに見せて。彼女は2人と同じ十二歳だけど、幾つもの戦場を駆け抜けた戦姫なの」

フェイエルノートはロヴィーノに金のペンダントを渡す。

「姉ちゃん…俺…」

不安にかられているフェリシアーノはフェイエルノートを見つめる。

「…シン・ナータ・ラクト・アルケ・ウィアス・ヴァル・エスト・ポース」

困ったように笑うフェイエルノートは呪文を呟く。

「それは？」

「ある人から教えてもらった呪文。『無垢なる魂よ、女神の希望を唄い、永遠なる世界に光を』って意味。覚えておいてね。何時かフェリを導いてくれるから。大丈夫。フェリは1人じゃない。ロヴィー

や、あの子達も居るから」

にこやかにフェリエルノートは優しく言う。

其処で幻は途絶え、闇の世界に戻った。

我に返ったフェリシアーノは影の攻撃を杖で防ぐ。

『しぶといね…』

「…確かに俺は…弱いし、泣き虫だし、臆病だ…」

『？』

怪訝そうに影はフェリシアーノを見据える。

「けど、大切な人達が、弱くても、泣き虫でも、臆病でも良いって言うてくれたんだ…。それは俺が俺である証…」

フェリシアーノは瞳に強い光を灯す。

「俺は…俺は絶対に消えない！俺が俺である証を持ってる限り！」

『なっ…』

「シン・ナータ・ラクト・アルケ・ウィアス・ヴァル・エスト・ポース！」

呪文を唱える声。

その時、フェリシアーノに宿る臨星の華が現れ、光を放つ。

「臨星の華！」

臨星の華は強い光を放ち、再びフェリシアーノの中へと戻る。

一つの槍を残して。

「姉ちゃん…」

フェリシアーノは目を綴じると、小さく笑う。

そして、旗の着いた槍を構えると、詠唱をする。

「咲き乱れよ、永久の光をたたえし華！その祈りを解き放て！悠久の華！」

唱えた途端、白い花卉が影を包み込み、花卉が弾け飛ぶと影は消えた。

「…終わった…のかな？」

小さく呟く。

すると、フェリシアーノは体が浮くような感覚を感じた。

そして、ある場所へと飛ばされた。

イリスの試練（前書き）

今回はイリスの試練ですが、イリスにとって凄く過酷で辛い事があります。

イリスの試練

フェリシアーノが試練をしている時と同じ頃、イリスは攻防戦を続けていた。

一向に止まない華術と接近戦に苦戦を強いられていた。

「闇に集え、幽玄の者よ！ダーク・インフェルノ！」

イリスは闇の魔法を放つが、かわされた。

「翔遊斬！」

「黎明の華！」

影とサクラの攻撃を素早くかわすが、左足に攻撃が当たる。

「くっ！」

紅い血が流れる脚を押さえながらイリスは、次々と来る攻撃を胡蝶のようにかわしていった。

『しぶといな。でも、遅いよ』

影が刃を横に薙ぎ払うと真空波がイリスを襲った。

避けきれず、まともに攻撃を受けたイリスは宙を舞い、床に叩きつけられた。

「うっ…」

起き上がろうとした時、イリスの目の前に刃が突き付けられる。

『私ね…貴方が嫌い。みんなを護れない私なんか、存在する価値なんてないよ…。だから…消えて、イリス』

「…みんな…フェイエルノート…ごめん…」

イリスは目を綴じる。

と、吹き抜ける風が違う事に気付いた。

ゆっくりと瞼を開けると、其処は白い花が咲き乱れる草原だった。

「ここ…は…」

「私と最期合った場所よ。イリス」

サクラの声にイリスは背後を振り返る。

「此処はイリスの私との最期の記憶が生み出した幻。現実ではない

わ」

「私が生み出した…幻…」

「フェリシアーノさんも、彼の…フェイエルノートとの最期の記憶が生み出した幻を見ている筈よ」

そう言うとき、サクラは草原に咲く花に触れる。

「あの時、イリス言ったわよね…。『私の事は守らなくていい』って」

「……………」

「私は、臨星の華をフェリシアーノさんへ返すという使命に従っていた…。その事はみんなに言えなかったの。無の華を宿した華術師の末路は、虚無に消え去るって知っていたから」

弱々しくはにかみながらサクラは語る。

その瞳には憂いさえ宿っていた。

イリスは何も言えなかった。

「死んだ筈の私は肉体と魂が同化し、靈魂の都へと流れ着いた。理由は判らなかった…」

イリスはいやな予感を感じ取る。

「私ね、ずっと本当の死になるために方法を探していたの…そして…」

「やめろ…」

「私が本当に死ぬためには…」

「やめろ…言うな…」

だがサクラは語ることが止めない。

「それは、イリスが私を殺すこと」

凜とした声がイリスを貫く。

「やめろおおおおっ！！何も言うなあああああっ！！」

絶叫が響き渡る。

イリスは耳を塞ぎ、膝をつく。

サクラは悲しげにイリスを見据える。

「イリス…」

「私は…サクラを殺せない…。殺したくない…。もう…あんな思いはしたくないんだ…」

イリスは微かな声で呟く。

するとサクラは屈むと、イリスの頬に優しく触れる。

「イリス。貴方は今を生きないとダメよ。イリスは生きているんだから」

イリスはゆっくりと顔を上げる。

其処には優しく微笑むサクラがいた。

「生きて、イリス。私の分まで、ずっと」

「…サクラ」

途端に幻は弾け飛び、目前には影の持つ剣の刃が映る。

イリスは刃を弾く。

「…私は…絶対に…！」

煌めく焰のごとく紅い双眸が輝く。

「…負けない！」

叫んだ途端、イリスの脳裏に浮かんだ言葉。

「月夜に浮かびし清廉の華！我の声に答えし、暁の花卉と共にあれ！悠暁の華！」

詠唱を終えると、真紅の花卉が影を包み込み、影と共に消え去った。残ったのはイリスとサクラ。

するとサクラは両腕をゆっくりと広げる。

「此処、しっかり狙って」

サクラは自分の鎖骨辺りを示しながら言う。

「サクラ…」

「早く」

「…でも…私は…！」

「早く、イリス！私を殺して！」

「っ！」

震える手に力を入れ、フランヴェルジュを構える。

「うああああああっ！！」

叫びながらイリスは跳躍し、サクラとの距離を縮めると：

サクラの胸元にフランヴェルジュを突き刺した。

紅い血が紅く揺らめく焰の靈剣の刃を伝い、地に滴り落ちる。

刃を引き抜くと溢れんばかりの血が流れ、サクラは小さく微笑みながら倒れた。

「…サクラ…」

イリスは俯きながら、嘗ての仲間の名を呟く。

と、体が浮かび上がり、イリスはある場所へと飛ばされた。

生きること(前書き)

タイトル意味ふ(泣笑)

生きるって

イリスとフェリシアーノはあの場所、夢見の遺跡へと飛ばされた。其処にはミク、カイト、ルナサ、メルラン、リリカが2人の帰りを待っていた。

「お帰り！その武器：試練、合格したんだね！」

メルランが嬉しそうに言う。

イリスは腰のベルトホルダーに新たな剣の鞘があるのに気付いた。鞘から剣を引き抜くと、刀身は星の煌めきのごとく輝いていた。

「創星の華から生まれた剣……。何時の間に……」

小さく呟くと剣を鞘に収める。

ルナサはイリスの様子がおかしい事に気付く。

「イリス、どうしたの？顔色が良くないわよ」

「……………」

イリスは俯くと、掌を強く握り締める。

かなり強く握り締めた為、指の間から紅い血が滴り落ちた。

「サクラが靈魂の都に居たのを知ったから。肉体と魂が同化した不死の存在として」

「妖夢！？」

リリカは何時の間にか居た妖夢に驚いた。

「サクラが！？不死の存在として……」

「そのままの意味。サクラはあの日、確かに死んだけど、肉体と魂が同化して靈魂の都へと流れ着いた」

「じ、じゃあ、サクラは生きてるの？」

「ええ。死の無い苦しみを味わいながら生きていた」

「いた？何で過去形？」

疑問に感じたリリカは訊ねる。

「…私が…サクラを殺したんだ……」

「「「！？」」」

全員は驚き、イリスを見据える。

「う…嘘でしょ？何で…」

「サクラは死ねない苦しみを解放するために、色々調べた。辿り着いたのが『不死の者にとって大切な者が不死の者を殺すこと』と言う答え」

「そんな…」

ミクは絶句した。

「自分は解放されると共に、相手に苦しみを与える矛盾を孕んだ方法…。悲しい…方法だね…」

フェリシアーノは俯きながら呟くと、微かに震えているイリスを見詰めた。

大切な人を手に掛ける。

かなりの覚悟が必要であり、彼の者に更なる苦しみを与える。

フェリシアーノにとっては、考えたくない事でもあり、したくない事であった。

俯くイリスは唇を微かに動かす。

「…サクラは私に生きろって言った…。私はサクラを殺したんだ…。許されない事だって判ってる…。ううん…私は沢山の人を殺した…。それでも生きていいのか…？」

重くのしかかるような言葉に辺りには沈黙が流れる。

「…いいんだよ」

ふとフェリシアーノはイリスに言う。

「フェ…リ？」

思わずイリスは彼を見据える。

彼は優しく笑っていた。

「人を殺したって言ってもイリスはイリスだよ。イリスや俺達は『此処』にいる…。イリスがいなかったら、俺達は今此処にはいないよ。だから生きて、イリス」

その言葉にイリスは呆然とする。

「フェリ…。お前たまにフェイやロヴィと同じような事言うよな」

聖星華の祭―初日―（前書き）

今回は長編です！

聖星華の祭―初日―

街に戻ったイリス達はそれぞれ別れ、イリスとフェリシアーノは家に戻った。

家では2人の帰りを待っていたスカーレット姉妹、ルーミア、チルノ、そしてロヴィーノがいた。

戻ってきた2人を5人は囲んだ。

「おかえりー!」

2人の生還を喜んでいるフランドール、チルノ。

「おかえりなさい」

小さく笑いながら言うレミリア。

「ちぎー…。心配せんよ、このやろー…」

悪態をつきながらも泣きながらフェリシアーノを抱いているロヴィーノ。

「わぁーん! イリス、無事でよかったよおー!」

泣きながらイリスに抱きつくルーミア。

「ただいま」

イリスとフェリシアーノは小さく笑いながら言う。

その夜はロヴィーノとレミリア、ルーミアが作ったパスタ等の料理で、楽しく2人の試験合格を祝った。

翌日、イリス達は王城へと向かった。

この日は華の国全土の花が咲き誇る日で、国上げての祭りが行われていた。

華の国では『聖星華の祭』、他国からは『結界華の祭』と呼ばれ、何故かこの日から一週間だけ国境では結界が張られ、華の国へは入れなくなる。

その前日に聖星華の祭を見たいという他国の人々は華の国へ入国しなければならなかった。

元々華の国は治安が良く、盗賊などの輩はいないので犯罪と言う犯罪は一つも起こった事は無い。

侵入してきた夕風の兵士達が国内で魔物を召喚する事はあるが、それ以外では起こった事は無かった。

朝食を済ませたイリス達は城へと向かった。

中庭では咲く時期など関係なく、様々な花が咲き乱れ、美しい色彩を描いていた。

「ヴェー…、すごい綺麗…」

「聖星華の祭は華の国の守護神である華の女神を敬う祭だ。大昔、この国に華の女神が舞い降り、天界に還る一週間まで華の国全土で全ての花が咲き誇ったらしい」

イリスが祭の逸話を話すとフェリシアーノはキラキラした瞳で彼女を見る。

「ホントなの!？」

「いや…本当かどうか判らないけど…。でも毎年、聖星華の祭の時期になると国全土で全ての花が咲き誇るんだ」

フェリシアーノの勢いにイリスは少しひきながら言う。

と、何かを思い出した。

「って、あぁーっ! そうだった! フェリ、ロヴィ、レミイ、フラン、ルーミア、チルノ! 急いで! 特殊部隊はあの服装に着替えんだった!」

「「「「!」」」」」

「ヴェー?」

1人だけ読めてないフェリシアーノをイリスは引き摺りながら、七人は城の中に向かった。

城の更衣室で特殊部隊はとある服装になった。

白布地の軍服によく似た服に、一人一人の左胸にそれぞれ違う花を模したブローチを着け、頭には女子は羽根飾りと白百合の着いた髪飾り、男子は羽根飾りと青薔薇の着いた小さなシルクハットを被っていた。

イリスは白い質素なハーフパンツとスカートの前が開いたシフォンドレスを着、胸元には羽根飾りの着いたリボン、頭には雛菊の華飾りが付いた小さな白銀のティアラ。

フェリシアーノは白い質素なロングコートを羽織り、ハーフパンツとYシャツを着、胸元には羽根飾りの着いたリボantai、頭にはフイラの華飾りの着いたシルクハット。

全員、揃いの白いブーツを履いていた。

豪奢でもなく、質素過ぎない、純潔をイメージした服装は聖星華の祭で特殊部隊の部隊員だけが着る特別な服装だ。

女神を守る華の天使と、イリスは創星の神子、フェリシアーノは臨星の神子をイメージした服装だ。

「イリス！リボンが結べないであります！」

「はいはい。待ってて」

慣れない服装にフェリシアーノはイリスに助けを求めた。

イリスは苦笑しながらもリボantaiを結び、羽根飾りを着けた。

その後、フェリシアーノは一週間同じ格好でいることを後で知ると、深くうなだれた。

そのため、かなり支度に手間取る羽目になった。

漸くフェリシアーノの支度が整うと、特殊部隊全員は王族が待つているバルコニーへ向かう。

バルコニーに着くとカシス、グラス、プラム、スイレン、エルバ、そしてフローラが居た。

彼女達はイリス達が来たのを確認すると、フローラはバルコニーの手摺に近寄る。

下には沢山の国民や他国の民が居た。

「此より、聖星華の祭を開催します！」

フローラの透き通った声に、彼等は歓声をあげた。

その夜、城に設けてある特殊部隊専用の宿舎でイリス達は眠りについていた。

聖星華の祭―再会と生き物―（前書き）

今回もちたりあが出て来ます。

聖星華の祭―再会と生き物―

翌日、目覚めたイリス達は街中へと昨日の衣装のまま出掛けた。

街中を歩いていると華の国の伝統衣装を着ている人がほとんどだ。

ふと、フェリシアーノは少女達が持っている薔薇の花を象った淡い桃色の石の付いた羽根飾りに気がついた。

「イリス、あの人達が持っている羽根飾りは何？」

「ん？あれは『ローズクォーツの羽根飾り』。聖星華の祭最終日、少女達は羽根飾りを精霊の湖に沈める。ローズクォーツの羽根飾りには精霊の湖に沈むと恋が叶う、逆に浮かび上がると運が上がるって噂があるんだ」

「へえ…」

「水の精霊ウンディーネは『最終日は後片付けが大変よね』って言うくらい半端ない数の飾りが浮いている」

「……………」

イリスの話に、フェリシアーノは有り得ないという表情になった。

「毎年、私も手伝いしてるんだ。消失の華で羽根飾りの片付けはしてるんだけどさ、数が半端なかった…」

「今年、俺も手伝うよ」

「ありがと…」

微妙な表情の2人に、後のメンバーも微妙な表情になった。

彼等もまた、精霊の湖の片付けを手伝いをしているので、苦労が手に取るように判っているのだ。

沈んでいる羽根飾りは滅多になく、沈んだ羽根飾りは片付けしないと言う。

理由はウンディーネ曰わく「沈んでいるのは水の神様がなんとかしてくれるからほっといいよ」だそうだ。

暫く街中を歩いていると、菊は数人の人影を見つけた。

「あれは…」

菊が呟くと同時に2人が此方に気付いたらしく、振り返った。

「あれ？イリス達じゃん。お久しぶりのな」

「菊さん！イリス！」

2人は此方に駆け寄って来る。

イリスと菊に声をかけたのは、まだ幼さが残る少年と少女だった。

「香と湾って事は…」

「王さん達も居るって事ですか？」

菊は香と湾に訊ねる。

「まあ、そうっすね。あと、他の国の人も3人くらいいる的な」

「すっごくcawaiですヨ！」

「ちよっとパネェっす」

2人の言葉にイリス達は再び微妙な表情になる。

「香、湾…、もちっと分かり易い言葉で喋って…」
と、その時。

「菊うううう！！」

誰かがもの凄いスピードで菊に駆け寄ろうとする。

「イリス、結界を！」

「へっ？あ！うん！簡易…、展開！」

菊の言うとおりに結界を張ると、同時に見えない壁に黒髪の青年がぶつかる。

「へぶっ！？」

「王さん！今、私達は衣装を着ているんです！飛びつくのは止めてください！」

菊は借りてる衣装が汚れるのを防ごうとしていた。

「耀…。弟との再会の気持ちは判るけど…止めるよな」

「そ…そうあるな…」

王は赤くなった額を押さえながらにつこりと笑う。

「菊、イリス姫。元氣そうで何よりある。ん？」

ふと、王はイリスの後ろに居たフェリシアーノを見据える。

「そっちのロヴィーノによく似た青年は、言霊の神子あるか」

「ええっ！何で、判ったの！？」

フェリシアーノは驚いたように王を見る。

「まだ名乗ってなかったあるな。我は王耀。これでも仙人ある。予言者なら簡単に見抜けるあるよ」

「自称っすけどね」

「そうだヨ」

王の説明に香と湾はツツコミを入れる。

「香、湾、ちょっと説教聴いてくよろし」

その言葉に青筋を立てた王は2人に言う。

「エスケープ的な」

「逃げるネ！菊さん、イリス、またネ！」

「まつある！」

脱兎のごとく逃げた香と湾を王は追いかけた。

「あの3人、ぜんっぜん変わってないな」

シンは苦笑を浮かべながら呟く。

菊はと言うと真っ赤になりながらフェリシアーノに謝っていた。

幾らか街中を歩いていると、花の香に混じり甘い香が流れてきた。

「この匂い…花実餅か」

鼻を利かせるイリスは呟く。

「花実餅？」

フェリシアーノはイリスに訊ねる。

「菓子だよ。花卉とその花の果実を練り込んだ餅がこの時期に作られる。焼くと甘い香がするんだ。練り込む花卉と果実で味と匂いは異なるけど、甘い風味なのは共通だな」

「じゃあ、この匂いは何の花実餅？」

「これは…フィラだな。食うか？」

そう訊ねると、フェリシアーノは明るい顔で頷く。

イリスは匂いの元を辿り、花実餅を売ってる場所を探す。

見つけると花実餅を2つ買い、急いで戻ると、フェリシアーノに1つ渡し、花実餅を食べた。

フェリシアーノは幸せそうな顔で餅を食べる。

イリスも餅を食ようとしたが、餅が小さく動いているのに気がついた。

よく見ると、餅に顔とフェリシアーノとロヴィーノのようなくせつ毛がついていた。

「ええええええっつ!!?!?」

「イリス、どうし:!!?」

フェリシアーノはイリスの手の中にいる生き物に驚く。

「へー、フェリシアーノにソックリだな」

デュオは餅をまじまじと見ながら呟く。

「可愛いですね」

「菊、問題其処じゃないぞ」

餅を見て頬を赤くしている菊にレンはつつこむ。

「わあ:ちよつと触らして!」

ランカは撫でようと手を伸ばすが、ほのぼの顔のフェリシアーノによく似た餅はイリスの肩にぴょんと乗る。

「わっ」

驚いたイリスは餅を肩越しに見据える。

「うー:、イリス羨ましいなあ:」

「其処、問題じゃねえぞ」

アルトはつつこむ。

その後バチュリーの協力を得て、餅がスライム系の魔物ではなかったが、結局餅が何かは判らなかった。

餅はイリスに懐いているので、結果的にイリスが餅の世話をする羽目になった。

聖星華の祭―再会と生き物―（後書き）

イリス「作者、なんで私が？」

作者「ん？もちたりあの件？イリスに懐いていたから」

イリス「それだけ？…まあ、食費があまりかからないから良いけど…」

作者「じゃ、いいじゃん。あ、感想等お願いしますっ！」

イリス「話を逸らすなああああ！」

聖星華の祭―花と精霊―

次の日イリスは肩に餅（因みにイリスはフラウと名付けた）を乗せ、フェリシアーノ達と行動した。

「一体何なんだ？」

ロヴィーノは餅をつつきながら呟く。

「…アスラン、何か判る？」

「俺も判らないな…流石にこれは…」

キラとアスランはじつと餅を見つめながら唸る。

「羨ましいなあ…イリス」

じつと餅を見据えながら呟くランカにイリスは微妙な笑みを浮かべる。

フェリシアーノがイリスの肩に乗っている自分ソックリの餅を不思議そうに見つめると、餅はフェリシアーノに飛び乗った。

「わっ！」

驚くフェリシアーノの頭の上に餅は乗ると、ほわほわとした表情で昼寝を始めた。

「お、フェリにも懐いたのか」

デュオはからかうように言う。

するとヒイロはデュオの頭を軽く、と言うより強く叩いた。

「迷惑な昼寝位置だな…」

「ヴェー…」

イリスは苦笑しながら小さくうなだれるフェリシアーノを見据えた。と、其処にフランドール、レミリア、ルーミアの三人に連れられ、1人のメイドが来た。

「あ、咲夜さん、お久しぶりです」

ランカは頭を下げ、咲夜に言う。

「お久しぶりです、ランカ様。イリス姫様もおかわりないようで」

「堅苦しいなあ…。普通でいいのにさ…、ん？」

イリスは咲夜の手の中にある青と紫の花に目移った。
ふわっと、イリスは柔らかに笑う。

「青薔薇と紫薔薇、上手く咲いたんだな」

その言葉に咲夜は頷くと柔らかい笑みを浮かべる。

「はい。姫様のお陰です。姫様の助言あってこそ開花できたのです」
「全ての花の言葉を聞き、その生命を開かせよ…王家に伝わる言葉の1つ。その子は咲夜からの愛情をめいっばい受けたから、咲夜に綺麗な花を見せたんだ」

イリスは咲夜に近寄ると彼女の持つ薔薇にそっと触れる。

「私はただ言っただけだ。頑張って咲かせたのは咲夜。私じゃないんだからさ、礼を言われる必要はないよ」

「…ですが、ありがとうございます。イリス姫様」

「…どうぞ致しまして」

お礼を言う咲夜に、イリスは苦笑した。

イリス達は王城の中庭に向かった。

中庭では、様々な色彩を織り成す花々が咲き誇り、何時もより花の香が強く、心の疲れを取ろうと訪れている人々は彼方此方で花茶を飲んでいた。

「すごく体が羽根みたいにふわふわするね」

フェリシアーノは辺りを見渡しながら、体が軽い感覚を感じていた。
「フィラの花とフェリエの花の香が混じっているからなんだ。2つの花を混ぜ合わせた香は体を軽くする作用があるからな。フィラとフェリエの香を嗅ぎながら花茶を飲むと疲れが取れ、リラックス出来るんだ」

イリスが説明するとフェリシアーノは納得したように頷いた。
と、目の前に羽根の生えた緑色の毛色の小さい猫のようなのが現れた。

木の精霊ドライアードだ。

「ドライアード」

『みゅー、みゅー』

「ごめん。今は遊べないんだ。また今度遊ぼっか」

『みゅー』

ドライアードはひと啼きすると、花と花の間に溶け込むように消えた。

「イリスって、精霊と話せるの？」

「そうよ。イリス様は私達姉妹より力が強い」

「姉姉様は、私達より精霊のコトバがわかるの」

リースとリュナはフェリシアノの問いに答える。

気付くとイリスは緑がかった黄の体毛に額には赤い宝石、小さな兎の姿をした雷の精霊カーバンクルと話をしていた。

『キュー…』

甘えるように啼き、カーバンクルはイリスの手に頭を擦り付けると、くるんと回って姿を消した。

「…精霊って、動物に似てるの？」

「そうだよ。何体かは違うけど」

ルーミアの答えにフェリシアノはじっとイリスを見据えた。

聖星華の祭―古の歌・光の花と闇の花―

聖星華の祭も後5日を切りイリスは忙しそうにしていた。

祭最終日に、イリスは華の国第一皇女として、創星の神子、神歌の華術師として『神子の歌』の1つを謳うことになっている。

フラウをフェリシアーノに預け、イリスは披露する歌を覚えていたが、イリスは机に突っ伏していた。

「うー…」

と、イリスの部屋の扉がノックされ、レミリアが入ってきた。

「イリス、上手くいってる？」

「全然…上手くいってない…」

溜息混じりにイリスは呟く。

それもそのはず。

イリスが謳うのは古の^{いにしえ}コトバを用いた歌で、しかも、華の女神が謳ったとされる『女神の歌』と呼ばれる歌だ。

『神子の歌』はその歌詞の1つ1つの意味を捉えなければ歌として成り立たない。

イリスにとって、歌の旋律を覚えるのは簡単だが、その意味を捉えるのはかなり難しかった。

「はあ…あともう少しなんだけどなあ…。最後…何の意味なんだろう…」

意味の大半を必死で捉えたイリスは呟く。

「イリス、あのさ」

「ん？なに？」

「私とフランが育ててるエルシアの花とイルフィアの花が咲かないの。蕾はついたのに」

エルシアの花は天使の涙が花と化した純白の花で、イルフィアの花は悪魔の羽根が花と化した漆黒の花だ。

育てるのは難しく、一般的に出回っている花は全て王城の中庭で育

てられた花だった。

以前、レミリアとフランドールはイリスに頼みあってエルシアの花の種とイルフィアの花の種を貰い、育てていた。

「ちよつと来て」

レミリアは机に突っ伏しているイリスを起こし、外に連れ出す。

イリスが連れられたのは街に近い霊歌の森にある硝子張りの小屋。スカーレット姉妹とバチュリーが薬草や霊草などを育てている温室だ。

中に入ると、霊草が放つ若草の匂いが鼻腔に飛び込んできた。

「フラン、バチュリー」

レミリアが中にいたフランドールとバチュリーに声をかける。

「レミィ、まだ花が咲かない」

「お姉様、どうしよう」

「大丈夫、イリスを連れてきたよ」

慌てる2人を落ち着かせるようにレミリアは言う、イリスを見上げる。

イリスは頷くと、エルシアの花とイルフィアの花が植えられている花壇に近寄る。

2つの花はそれぞれ白と黒の蕾をつけていた。

イリスはそつと蕾に触れる。

「闇結晶、月結晶、光結晶、日結晶はちゃんと与えた？」

「うん」

レミリアとフランドールは頷く。

「……………」

イリスはじつと心を落ち着かせると、蕾を見据える。

蕾は親指の爪の大きさに膨らみ、今にも花が開きそうだった。

「…エルシアは日の光、イルフィアは満月の光を当ててみて。それ

に今夜は丁度、満月」

「うん」

レミリアはエルシアの花を丁寧に取り出す。

外に出、花に日の光を当てると蕾が膨らみ、日光のごとく柔らかい純白の花弁がゆっくりと開く。

同時にエルシアの花独特の柔らかい日の光の匂いが漂った。

「開いた！」

フランドールは驚いた様子でイリスを見上げる。

「蕾のついた、エルシアの花は太陽の光、イルフィアの花は満月の光を当てれば花開く」

イリスはそう言うと、開花したばかりのエルシアの花に触れる。

「その前にエルシアの花に必要な光結晶と日結晶、イルフィアの花に必要な闇結晶と月結晶の与える量を間違えれば蕾はおろか、芽さえつかない」

レミリアとフランドールは不思議そうにイリスを見据え、バチュリーは彼女の言葉を紙にまとめる。

「其処がエルシアとイルフィアを育てる難しい所なんだ」

「ふむふむ…」

バチュリーは頷きながら紙にまとめている。

「…バチュリー、なにしてるの？」

気になったフランドールが訊ねる。

「エルシアの花とイルフィアの花、育成の仕方と記録、ポイントをまとめてるの」

「……………」

レミリアは微妙な表情になりながらバチュリーを見据える。

苦笑を浮かべながらイリスは咲いたばかりのエルシアの花を見つめた後、まだ温室に入っている蕾状態のイルフィアの花を見据えた。

夜になるまでイリス、レミリア、フランドール、バチュリーは温室にいた。

その間もイリスは歌詞の意味を捉えようとしていた。

「まだ、時間はあるんだから、ゆっくり解いたら？」
バチュリーは言う。

『神子の歌』は誰の手も借りず、必ず神子が意味を理解しなければならぬ。

サクラが預言者として生き、臨星の華を宿していた時、2人は協力して歌の意味を捉え、聖星華の祭で2人は謳った。

だが今は違う。

フェリシアーノは臨星の華術師、言霊の神子だが、華の国に伝わる古のコトバは知らない。

ミクは一国の姫として歌の国に伝わる歌を謳うが、それは歌の国に伝わる古のコトバの歌。

華の国に伝わる古のコトバを知るのはイリスしかいなかった。

「夕風の国に伝わる古のコトバ：今じゃ、知る術はないしな」

イリスは溜息混じりに呟く。

夕風の国にも古のコトバは伝わっていたが、今の王になってからは誰も知っていない。

唯一知っていたのは今は亡きフェイエルノートだけだ。

満月が昇り、レミリアは外に出ると丁寧に取り出したイルフィアの花に月光を浴びせる。

イルフィアの花は月の光を浴び、蕾を膨らませ、漆黒の花弁を開く。開いた途端、辺りには凜とした麝香によく似た匂いが漂った。

聖星華の祭ーきょうだいー（前書き）

今回はきょうだいが居るキャラが四組出てきます。

聖星華の祭―きょうだい―

最終日まであと4日。

イリスは古のコトバが書かれた楽譜を持ちながら街中を歩いていた。ふらふらと歩いているとイリスはカイトと、彼の隣にいる紫色の髪
の青年を見つけた。

「カイト！」

イリスの声に気づいた2人は振り返る。

「あ、イリス」

「おはよ。それと、久しぶりだな、がくぽ」

「久しぶりでござる、イリス殿」

がくぽはイリス彼女が持っている楽譜が『神子の歌』だと気がついた。

「それは神子の歌でござるか？」

「よく判ったな。聖星華の祭最終日に謳う歌だよ。確か、ミクも謳うんだよな」

カイトは頷くと、何かを思い出したようにがくぽの肩を叩く。

「そうだ、ミク達に花実餅を頼まれていたんだ。がくぽ、行こう」

「心得た」

がくぽはイリスに会釈をすると、カイトと共にその場を離れた。

1人になったイリスは再び街中を歩く。

「あっ！イリス！」

聞き覚えのある声にイリスは振り返ると、其処には神楽と髪を短くし、右側にリボンをつけた少女リヒテンシュタインがいた。

「お久しぶりです、イリスさん」

「久しぶり、リヒテン。バッシュは元気か？」

「はい。兄様は相変わらずです」

すると、神楽は2人の間に入る。

「リヒテンシュタインはイリスに頼みたい事があるらしいネ」

「え？」

イリスはリヒテンシュタインを見ると、彼女は少し頬を赤くしていた。

「その…兄様へと育てているアリシアの花がなかなか咲かないのです」

「あー、その相談、確かエリザからも聞かれたな…」

苦笑しながらイリスは呟く。

「エリザベータさんも訊ねられたのですか？」

「まーね。エリザはローデに熱あげてるみたいだしな…」

イリスはそう言うのと、リヒテンシュタインが持っている鉢植えに植えられたアリシアの花の蕾を見る。

「この調子だと、今日の夕方には咲きそうだな」

「本当ですか!？」

「ああ。でも、開花前のアリシアの花は日を嫌う。なるべく日の当たらない場所に置くといい」

「ありがとうございます！」

リヒテンシュタインは頭を下げ、パタパタと帰路についた。

「そう言えば、神楽はどうなんだ？確かお前、兄さんがいたよな」すると、神楽はさしている日傘を苛立たしげにたたむ。

神楽の様子にイリスは、仲が悪いのかと思った。

「あのバカ兄貴にはあきれたアル。気づけばグラスの所に行って修行してるし、勝手に私の酢昆布食べているネ」

「……………」

イリスは一瞬、神楽が言ったことを理解できなかった。

「…ちょっと待て。それだけで怒るのか？」

「そうアル！私の大切にしてた限定品酢昆布が全部食べられた時はかなり怒ったアル！」

「…そうか…」

微妙な表情になりながらイリスは呟く。

神楽と別れたイリスは、街の広場へと向かった。

広場では様々な花実餅を売っている店や、花を売っている店などが活気づいていた。

すると、視界に幸せそうに花実餅を食べるフェリシアーノと、フラウを突っつきながら果実水を飲むロヴィーノが映った。

フェリシアーノはイリスに気づいたらしく、餅を頬張りながら手を振る。

イリスは兄弟の元に向かう。

「イリス、歌は覚えたの？」

「まだ。最後の意味さえ解れば完璧なんだけどね」

苦笑しながらイリスは答える。

「大変だね…。俺も謳えれば…」

「この歌は、華の国に伝わる古のコトバを用いてるからフェリには無理だよ…。出来るとしたら夕風の国に伝わる古のコトバだけど、それはフェイしか知らなかったし…」

「古のコトバ？」

フェリシアーノはキョトンとしてイリスを見据える。

「まあ、聴いてみないと判んないよね」

イリスは息を深く吸うと、謳い始めた。

何時もイリスが謳う歌詞とは違う、精霊の言葉のように思える歌。

イリスが謳い終わると、フェリシアーノは彼女の肩を掴む。

「イリス！俺、姉ちゃんからイリスが謳ったような感じの歌、幾つか教わった事があるよ！」

「それ、本当！？」

驚きを隠せないイリス。

「うん。姉ちゃん、兄ちゃんが追放される前、イリスが持っている

楽譜と同じような楽譜を全部俺にくれたんだ。その時、全部を兄ちゃんに預けていたから、夕凧には置いてきてないよ」

「ちよつと、聴かせて」

フェリシアーノは頷くと、深く息を吸い、謳い始めた。

その旋律と言葉にイリスは気付いた。

フェイエルノートが謳っていた、夕凧の国に伝わる古のコトバを用いた歌。

そのメロディーとよく似ている歌をフェリシアーノは謳った。

彼が謳い終わるとイリスは悲しげに俯く。

「それ、夕凧の国に伝わる古のコトバの歌…。フェイ…、見抜いていたんだな…」

「イリス…」

フェリシアーノはじつとイリスを見据えた。

その後イリスは、フェリシアーノ、ロヴィーノと共に城に向かい、フローラにフェリシアーノが謳った歌の事を告げ、帰宅した。

聖星華の祭―焦り―

最終日まであと3日が過ぎ、イリスは焦っていた。

意味はまだ掴めず、時間だけが過ぎて行っているからだ。

イリスは机の天板を強く叩く。

木で作られた天板は大きくひび割れ、叩かれた場所はへこんでいた。焦りは消え、虚しさだけが訪れ、イリスは顔を掌で覆った。

「…イリス、入るぞ」

控えめに扉が開かれ、ルートヴィツヒとギルベルト、菊が入る。

イリスは顔を覆っていた手を放すと、入ってきた客人に目を向けた。

「ルツツ、ギル…それに菊」

「悩んでるみたいだな」

ルートヴィツヒの言葉にイリスは頷く。

「あと少ししか無い…どうしよう…」

するとギルベルトは、頭を抱え込むイリスの肩を叩いた。

「イリス、こんな時は遊びに行こうぜ」

「は？」

一瞬、イリスはギルベルトが言った事が理解できなかった。

「今はそんなんじゃない…！いーからいーから！ケセセ！」…話を聞け、ギル！」

ギルベルトに半ば強制連行されたイリス。

2人の後をルートヴィツヒと菊は追いかけた。

街中に出ると、先に向かったのは果実水を売っている店だった。ギルベルトは4つ買おうとイリス達に渡す。

「…で、何で外出？私、時間が無いんだけど」

「隠りっぱなしじゃ、意味なんて見つからないぜ。外を見て意味を見なければいいじゃねえか」

「…はあ…」

溜息をつきながらもイリスは甘酸っぱい風味の果実水を飲む。

「すまないな、イリス」

「ルッツが謝る必要はないよ…」

イリスは謝ってくるルートヴィッヒにそう言うのと、先に行っているギルベルトと、彼について行っている菊を見据えた。

2人はアクセサリを売っている店で何かを選んでいた。

数分もかからないうちに2人は戻ってきた。

ギルベルトは淡い桜色、菊は明るい水色、それぞれ掌に乗るくらいのサイズの紙袋を持っていた。

「それは？」

イリスが訊ねると、ギルベルトは待ってました、と言いたそうな表情になる。

「これは、さっき店で買ったやつだ！イリスにやるよ。まだ袋は開けるなよ」

そう言うときギルベルトは紙袋をイリスに渡す。

疑問を感じながらもイリスは小さな袋を受け取った。

「菊も買ったのか？」

「ええ、フェリシアノ君に渡そうと」

「…そう」

頷くイリスは紙袋を服の内ポケットにしまい込んだ。

暫く4人はふらふらと歩いていた。

「あら、イリスに菊、ギルベルト、ルートヴィツヒじゃない」

4人の前に現れたのはシェリルだった。

「シェリル」

「イリス、随分と辛気くさい顔をしているわね。何かあったの？」

シェリルの質問に、イリスは俯くが、唇を小さく動かす。

「…最後の意味を上手く掴めないんだ…」

「古のコトバの歌ね」

イリスは頷く。

するとシェリルは小さな溜息をついた。

「まったく…、イリスも、死んだサクラも、物事を何でもかんでも抱え込みすぎよ。それじゃ、意味なんて一生見つからないわよ」

「……………」

「…明日、フェリシアーノと一緒に私達の所に来なさい。絶対によ」
シェリルはそう言うとその場を離れた。

イリス達はポカンとしてシェリルが去った方角を見据え、暫くして街の散策を再開した。

夕方になり、イリスはルートヴィツヒ達と別れ、菊からフェリシアーノへの手土産を受け取り、家に戻る。

自宅ではフェリシアーノが先に戻っていた。

「お帰り、イリス」

「ただいま…。これ、菊から」

イリスは氣力を失ったように言うと、菊から受け取った手土産をフェリシアーノに渡す。

フェリシアーノは袋を開けると、中には小さなフェナス石が入った、小さな銀の鳥籠のペンダントが入っていた。

「…菊、すごいなあ」

「……………」

イリスはじっと手にしていた紙袋を見据えると、袋の中にあるモノを取り出す。

其処にあったのは、小さいが今では珍しいレムリアンシードと、カテドラルクリスタルをあしらったペンダント。

「…ありがとな、ギル」

イリスは小さく呟き、フェリシアーノに明日出かける事を伝えた。自室に戻ったイリスは、意味を捉えようとしたが上手く掴めず、焦りはかなり大きくなった。

「……………」

割れた机に突っ伏すと、視界にはギルベルトから貰ったクリスタルのペンダントが映る。

イリスはペンダントをしまうと、焦りを消せないまま眠りについた。

聖星華の祭―意味―

翌日、支度を整えたイリスとフェリシアーノは、広場へと向かった。広場につくと其処には先についていたシェリル、ランカ、アルト、ミハエルがいた。

「あっ、イリスちゃんとフェリシアーノ君だ！」

ランカは嬉しそうに言う。

「悪い、遅かったか？」

「少し遅いわよ。まあいいわ。じゃ行きましょう」

「何処に？」

歩き出したシェリルにアルトは訊ねる。

と、シェリルは動きを止めて振り返る。

「まさか：シェリル」

「決めてない：のか？」

「うっ！」

イリスとアルトの言葉にシェリルは凶星になる。

「そ、そんなわけないわよ！」

「「じゃあ、何処に行くんだよ？」」

2人の質問にシェリルは胸を張る。

「そんなの、行けるところ全てに決まってるじゃない！」

「「「「「……………」」」」」」

一気に静寂が訪れた。

「「：やっぱテメエ考えてなかったのか！！」」

大体が予想していた回答だったが、思わずイリスとアルトはキレイながらもつつこんだ。

イリス達は休むことなく歩いた。

そして、ついた場所は街の近くにある清廉の草原。

「疲れた…」

「大丈夫、ランカ？」

草原にへたり込むように座るランカを心配するフェリシアノ。

「「はあ…」」

溜息をつくイリスとアルト。

「何、溜息ついてるのかしら？」

2人の溜息に反応したシェリル。

「アルト姫にはキツかったかな？」

「んだと？もういっぺん言ってみろ、ミハエル」

「お前ら喧嘩するな！」

挑発するミハエルにアルトはキレたが、イリスの鶴の一声でおさまった。

イリスは草原に仰向けになる。

空には色とりどりの花卉が舞い上がる澄んだ青空があった。

気がつくと他の人も横になりながら空を見上げていた。

「…サクラを死なせた時…」

空を見上げていたイリスは思わず語っていた。

「…いや、初めて人を殺した時から…。私さ、自分を支配している運命に従っていたんだ…。誰にも言えない…悲惨な運命に…」

何故こんな話をしているのか、イリスにもわからなかった。

「幾つもの戦場を駆け抜けた私には、何も残ってないって思ってた。だから、家には最低限の家具しか置かなかった。私は…馬鹿げてる…」

「イリスちゃん…残ってるよ」

「え？」

イリスは体を起こし、ランカを見据える。

「私達も、国の民も、花達も、みんなイリスちゃんが守ってくれた生命達…。イリスちゃんがいなかったら、きっと失っていたモノばかりだよ」

「それに、イリスは何でもかんでも自分の心を殺し過ぎているからな」

「ランカ…、ミシエル…」

「それに、イリスは色々溜め込み過ぎているからな。たまには俺達にも話はしろよ」

「そうだよ」

「アルト…、フェリ」

「一人で何でも抱え込まないの。イリスの代わりなんていないんだから」

「シェリル…」

呆然とするイリスは自分の頬を流れているモノに気づかなかった。

そして、歌の最後の意味が漸く掴めた。

「そう…か…、最後の意味…やっと捉えた」

「意味、やっと掴めたのね」

「うん…。ありがとう…みんな…」

イリスはふわりと笑いながら、礼を言った。

聖星華の祭―歌と掃除―（前書き）

祭の最後、イリス達はかなり大変です。

聖星華の祭―歌と掃除―

聖星華の祭も最終日になり、王城の入り口には沢山の人々が溢れかえっていた。

入り口が見えるバルコニーの内側の部屋には、神子の装束に着替えたイリスとフェリシアーノ、質素なドレスを身にまとったミク、特殊部隊の全員がいた。

「始めはミクちゃん、次にフェリシアーノ君、そして最後がイリスちゃんの順だよ」

ランカの説明に三人は頷く。

「イリスちゃんは謳う前、一言何か言うことになってるからね」

「判った。私も言いたい事は一杯あるからな」

イリスはそう言うのと、身の強張りを解き、外を見据える。

外は日が沈み、月が昇ろうとしていた。

初め、ミクが歌の国に伝わる古のコトバの歌を謳った。

次にフェリシアーノ。

フェイエルノートから教わった歌の旋律を1つも間違えずに謳え、彼は謳い終えた時に安心した表情を浮かべた。

そして、イリスの番に差し掛かる。

「イリス、頑張って」

フェリシアーノの応援にイリスは頷き、バルコニーに出る。

視界が一気に開き、夜気を纏った空気がイリスを包む。

「では、華の国第一皇女イリスアリア・デイジー・セルファイア様より、お言葉を！」

噎れた、老人の声にイリスは目を綴じると、ゆっくり唇を動かす。

「…私は、ずっと考えていた。自分が何なのかを。私は皇女である前に、予言者…神子であり華術師…。自分の存在意義を見いだす事が出来ない自分なんて消えればいい…そう思っていた」

途端、民衆にざわめきが走る。

皇女が「自分なんて消えればいい」なんて言ったら誰だって動揺するだろう。

「けど、それは間違いだって判った。教えてくれたのは…大切な仲間達、貴方達国の民…そして、サクラ、ノーチェ、あんず、夕風の皇女フェイエルノート…フェイの弟のフェリシアーノ、ロヴィーノだ」

イリスは柔らかい笑みを浮かべる。

「私は、気付いたんだ…。ヒトは互いに手を取り合い、歩めると。決して1人ではない。ヒトを惑わし、自分の思い通りにするヒトもいるが、そのヒトを止めることも出来ると…。だから…私はこれからも…全てを守るために…変えるために…戦う！」

途端、歓声が沸き上がる。

背後にいたフェリシアーノ達は小さく笑っていた。

イリスは振り返り、彼等を見、頷く。

そして深く息を吸い、謳い始めた。

何処までも届く透き通った、清らかな風のような歌声。

華の古のコトバを用いた神子の歌を謳うイリスは意味を捉え、その意味を伝えるように謳った。

歌の終盤に差し掛かった時、イリスの創星の力は発動し、ほんのりと光を放つ幻想の雪を降らせた。

そして夜が明け、聖星華の祭は終わった。

——そして、精霊の湖がある聖爛の森。

『…ミィ』

「そうだね…ウンディーネ」

青い猫のような姿の精霊ウンディーネとイリス達は、水面に大量に浮かんでいる『ローズクォーツの羽根飾り』の後始末に駆られていた。

「イリスー！終わらないよ！」

「何でこんなに浮いてんだよ！」

フェリシアーノとロヴィーノは絶叫によく似た叫びをあげる。

他のメンバーもくたびれた様子だ。

イリスは何度も華術を発動させ、丸1日かけて湖の掃除を終わらせた。

クタクタになりながらも街に戻り、それぞれの場所に帰った。

異世界からの客人（前書き）

今回は国が出て来ます。

異世界からの客人

聖星華の祭が終わり、街は落ち着きを取り戻していた。

イリスは自室の窓から街の様子を眺めていた。

街は落ち着き、辺りでは咲いたばかりの色とりどりの花が売られ、街路では子供達がはしゃぎ遊んでいる。

何時か儚く消え去ってしまう刹那の風景。

それを守りたいとイリスは思った。

直した机の天板にはレミアから貰ったエルシアの花を飾ったクリスタルを削って造られた小さな花瓶と、冷めたルノアールの花茶が入ったティーカップとティーポット、フルーツタルトに乗った菓子皿と銀のフォークが置かれていた。

イリスは窓の縁に軽く寄りかかると、幻と思える風景に見入った。

「イリス、入るよ」

扉がノックされ、フェリシアノが部屋に入ってきた。

「ああ、フェリか…」

「スイレンからの伝言。特殊部隊は城に集まるようにって」
伝言にイリスは頷く。

「判った。すぐ支度する」

そう言っているとフェリシアノは頷き、部屋を出る。

イリスはルノアールの花茶を飲み干し、タルトを口につめながら支度を済ませた。

王城の謁見の間。

其処には特殊部隊全員が揃っている。

暫くして、フロローラが隣の部屋から現れ、謁見の間の奥に置かれている玉座に座った。

「此処まで、ご苦勞様です。あなた方を呼んだのは他でもありません。黎明の神殿に向かい、今起こってる異変を調べてきてほしいのです」

「異変？」

「まあ、話は彼等から聞いてください」

そう言うとフロローラは侍女に目配せをすると、彼女は隣の部屋に行き誰かを連れてきた。

その9人の内7人を見た途端、全員が驚いた。

7人はそれぞれルートヴィツヒ、ギルベルト、菊、フェリシアーノ、ロヴィーノ、アントーニヨ、最近入ったばかりのイヴァンと瓜二つだったからだ。

イリス達は呆然として彼等を見つめる。

「…誰？」

そう訊ねるとフェリシアーノとロヴィーノによく似た彼等はイリスを見た途端、凄い速さで近寄る。

「はじめまして！俺、イタリア・ヴェネチアーノ！君は？」

「わ…私はイリス…。イリス・プラトリーナ」

フェリシアーノとは正反対に明るい性格のイタリアにイリスは少し引く。

「イリス…いい名前だね！」

「俺はイタリア・ロマーノ。お嬢さん、よかったら俺とお茶しませんか？」

「……………」

イリスは微妙な顔になる。

「兄ちゃん、なんか…俺達と正反対に見えるような気がするんだけど…」

「奇遇だな…。俺もそう思った」

ヴァルガス兄弟は自分達と瓜二つのイタリア兄弟に違うモノを見た。

ふと、フェリシアーノとロヴィーノと視線が合ったイタリアは驚く。
「ヴェ！俺と兄ちゃんにそっくりだ！」

「え…えっと…俺はフェリシアーノ・ヴァルガス」

「俺はロヴィーノ・ヴァルガス。フェリシアーノとは兄弟」

そうロヴィーノが言うと、イタリアとロマーノは更に驚いた表情になった。

「奇遇だね！俺達も兄弟なんだ！」

「イタリア！少しは落ち着け！」

ドイツに叱られたイタリアはフェリシアーノの背後に隠れた。

「ヴェ…フェリシアーノ…」

「…えっと……………」

何を言えいいのか判らないフェリシアーノは言葉に詰まる。

「――つまり、異世界の住民であるドイツ達は突然発生した光に飲み込まれて俺達の世界に飛ばされ、華の国領内にある黎明の遺跡に辿り着いたってワケか」

話を聞いたロヴィーノが復唱するように訊ねると、ドイツは戸惑いを隠すように小さく頷く。

「おい、ロヴィーノ。ドイツの事はジャイモ野郎でいいぞ」

「俺はそう言うあだ名みたいなので相手を呼ぶのは苦手なんだ」

「…イタリアちゃんのお兄様と正反対だな、フェリちゃんのお兄様は」

プロイセンはロヴィーノとロマーノを比較しながら呟く。

「普通…名前だろ。ルッツ、相手の兄貴にお兄様とか言うか？」

「普通は言わないだろ」

ギルベルトとルートヴィッヒはプロイセンをじっと見据えながら呟

く。

「そう云えば、イヴァン君には妹が居るの？」

「ううん、居ないよ。僕、一人っ子だから」

ロシアの質問にイヴァンはキョトンとした表情で答える。

「いいなあ…」

「…なんか…ロシア怖い」

思わずイヴァンは一歩後ずさる。

「姿形は似ていても、性格や生い立ちは違うみたいだな…」

「そうみたいだね…」

「なあ、イリス。此処にはハンバーガーは無いのかい？」

アメリカはイリスに訊ねる。

「ハンバーガー？一体何なのですか？」

その言葉にリヒテンシュタインは訊ねた。

「セーシエルとリヒテンシュタイン…。名前と姿、凄く似ているね

…クマ太郎さん」

「「誰？」」

「カナダだよ…」

リンとクマ次郎の言葉にカナダは笑顔で答える。

「こ…これは、オタクにはたまらないキャラの大集合ではないですか」

「…に…日本さん？」

日本の様子がおかしいのに菊は気づいた。

「まさかガ○ダムキャラやマク○スFキャラ、ボ○ロキャラ、○魂キャラ、東○キャラがいるなんて…」

「あの…日本さん」

「ああ、デジカメを持ってくるべきでした…」

「あの…」

「諦めろ菊。あんなった日本は止められないんだ」

ドイツの言葉に菊は微妙な表情になった。

異世界から来たヒト達の騒ぎにイリスは頭を抱えながらも、黎明の

遺跡で起こった異変について考えた。

水爛の都・黎明の遺跡（前書き）

セリフあまりがない：

水爛の都・黎明の遺跡

自宅に戻ったイリスはイタリア達を三階の客室へと案内し、すぐさま自室へと戻った。

よく判らない疲れが襲い、勢いよくベッドに倒れ込むと、柔らかい羽毛を使ったベッドはイリスの体をゆっくり沈める。

溜息を吐きながら、イリスはイタリア達がこっちの世界に来た原因を考えると、ある2つ仮説に辿り着いた。

夕風の国が放つ魔導か、別の因果から起こる時空間の歪み：

様々な因果からなる時空間の歪みは過去数年で数回と、手で数えられる位発生している。

だが、問題は魔導の方だ。

もし、夕風の国が放つ魔導が別の時空間に干渉し、異変を起こす程の力があるとしたら大変な事になる。

大量虐殺の兵器や、異界の魔物などを呼び寄せたりしたら、この世界は破滅に向かう。

何とか阻止したいイリスは原因を調べようと、明日の支度を済ませた。

――翌日、イリスはイタリア達と、フェリシアーノ、フランドール、ルーミア、レミリア、ランカ、ヒイロ、デュオ、アルト、イヴァンと共に黎明の遺跡へと向かった。

黎明の遺跡は千年ほど前に存在した水爛の都の跡地にある。

千年経った今も都に隙間なく張り巡らせてある水路には絶え間なく水が流れていた。

その水路や水晶をあしらって造られた池には水蓮や蓮、水中で青や白の色彩の花を開くアクアリウスの花、水面下で赤色の花を開くメルティアの花、水面上で可愛らしい白い花を開くライラの花が咲き誇っている。

石造りの家や道は苔むし、壁にはメルキュールの花の蔓が張り付き、小さな淡い水色の花を咲かしていた。

時を止めた都には、低級とは云え魔物が住み着いている。

中には毒性の強いスライム系や虫系、飛行系の魔物もいる。

イリス達特殊部隊はイタリア達を元の世界へ帰す役割を受け持つ他に、護衛も受け持っていた。

性格や世界が違っても同じ存在は同空間に居てはならない。

同じ存在が同空間に存在すると、その時空間に歪や悪い影響が生じてしまい、1日でも彼の者を元の時空間に戻さないと大変な事になる。

イリスは古の書物で学んでいたため、その事は知っていた。

（早くイタリア達を元の世界に帰さないとい……。フェリ達だけじゃない……イタリア達にも悪影響が出る……）

焦りが面に出ていたらしく、ヒイロがイリスの肩を軽く叩く。

「イリス、焦りは禁物だ。失敗を招く」

「……判っている」

口数少なく会話を交えようと、イリス達は遺跡内部へと入っていった。遺跡からは静かな殺気の他に異様な気配が流れてくる。

イリス達は警戒を深めながら慎重に歩みを進めた。

異世界への召還・守護水竜の華

——黎明の遺跡の内部はかなり複雑で、道を間違えたり、知らない
と何時の間にか入り口へと戻される『魔の迷宮』との異名を持つ遺
跡だ。

元々、黎明の遺跡は神事などを行う神殿の役割を担っていたのだが、
都の衰退と共に参拝者は少なくなり、無人と化した。

人は居ないが水に係る精霊などはまだいる。

襲いかかってくるレッドスライムやヴァイパーなどを倒していきな
がら慎重にイリス達は進む。

「ヴェ、青い猫？」

イタリアは周りにいるウンディーネに視線を向ける。

「その子達は水の精霊ウンディーネ。此処に住んでいるんだ」

「へ！？精霊！？」

「こんなにはっきり見えるもの何ですか！？」

イタリアと日本の驚きにイリスはキョトンとする。

「精霊は普通、実体を持つものだろ」

その言葉に彼等は呆然とした。

イリスはその様子から彼等の世界の精霊は実体を持たないと理解し
た。

するとフェリシアアノは1つの紙袋を取り出す。

「フェリ、それは？」

気になったらしくフランドールが訊ねる。

「アーサーがくれたんだ」

「「「「！？」」」」」

その言葉に戦慄が走る。

イリスはフェリシアアノから紙袋をとると、中を確認する。

中に入っていたのは綺麗な小麦色をしたスコーンだった。

それを見た途端、イリス達は冷たい床にへたり込む。

「よ…よかったね…ランカちゃん」

「うん…他の菓子じゃなくて…ホントよかったよ…」
フランドールとランカは安心したように呟いた。

「このスコーン、アーサーが作ったのかい？」

アメリカの質問にイリスは頷く。

「うん…アーサーが唯一まともに作れる菓子」

「イギリスさんとは大違いですね」

「そうだな…イギリスは食べ物らしかぬ物を押し付けるからな…」
日本とドイツはまじまじとスコーンを見据え、呟く。

暫くして精霊華が咲く、魔物の居ない域『精霊華の聖域』に辿り着いた。

休憩中、アーサーが作ったスコーンを口にしながらイリス達は色々な話をした。

「しかし、不思議なものだな」

ドイツは壁に咲き誇る精霊華を見据えながら呟く。

「何が？」

「いや、こんな平和な世界があるとは知らなかったからな。驚いたんだ」

「それに、すごく綺麗な世界だね！」

その言葉にイリスは俯く。

「…平和で綺麗な世界…か…。異世界の人にはそう見えるんだ…」
「え？」

イタリアはよくわからない、と言いたげにイリスを見ると、彼女は顔をあげると彼等を見据える。

その表情には愁いと悲しみが宿っていた。

「この世界は今、戦争が起こっているんだ。数年前に起こった、あまりにも静かな戦争」

そう言った途端、イタリア達は驚きを隠せなかった。

彼等の様子にイリスは苦笑を浮かべる。

「平和に見えた世界が実は戦争をしている、と云う事を知ったら誰だって驚くよな…」

「あ…そんなわけでは…」

「いや、いい。私も分かってはいるんだ…平和は刹那の時しか流れないってな…」

吐き捨てるような言葉。

イタリア達は何も言えなかった。

休憩を終え、イリス達は再び歩き出した。

奥へ進むにつれ、澄んだ空気と共に禍々しさの混じった水の魔力が漂う。

「…この力は…」

「リヴァイアサンね…」

菊の使役する焰の式神の言葉に続いて、レミリアはスピア・ザ・グングニルを強く握り締めながら呟いた。

リヴァイアサンはこの遺跡に祀られた竜神の一体で水を司っている。だが、ある日、リヴァイアサンは暴走を始め、フローラに封印された。

暴走をしたのは何もリヴァイアサンだけではない。

焰を司る竜神ジークフリート、風を司る竜神バハムート、地を司る竜神レーヴィアも暴走し、同じように各地の遺跡に封印されていた。

「やっぱり、夕凧の魔導が原因なのかな…」

「私も魔導が原因だと思う。彼等が暴走した日、夕風の国の方から
凄い力を感じたからな」

「イリス」

フランドールはイリスを見据え、フェリシアーノは暗く俯く。

「フェリシアーノ、どうしたの？」

「っ！な、何でもないよ！気にしないで、ヴェネチアーノ」
「？」

イタリヤはキョトンとフェリシアーノを見据える。

「…フェリ、もしリヴァイアサンの暴走が収まるなら覚悟はしとい
て。リヴァイアサン、バハムート、ジークフリート、レーヴィアの
4神竜は神子の波動に疎い。私達が神子であり、フェリが夕風の皇
子と私が華の皇女だって彼らは知ることになる」

小さく耳打ちをするイリスにフェリシアーノは俯く。

そして、彼が微かに頷くとイリスは小さく溜息を吐き、奥へと歩み
を進めた。

黎明の遺跡、最深部にある水神みづかみの聖域。

イタリヤ達が此の世界に飛ばされた時に訪れた場所だ。

純粋な力が集う場所で、華の国に存在する4の聖域は各国に散らば
る4の聖域よりもかなり強い力を宿しているため、守護竜の力も強
まる。

守護竜の試練を受ける者達は皆、華の国の聖域には近寄らず、他国
の聖域で守護竜の試練を受けた。

理由は、華の国にいる守護竜はかなり手強く、誰一人勝てた事は無
いからだ。

水神の聖域奥にある深い蒼い色彩のクリスタルに封じられた水の竜

リヴァイアサン。

クリスタルには封印の力を宿すエレンの花が清らかな白い花を咲かせ、その蔦を巨大な結晶に絡み付いていた。

イリスはゆつくりとリヴァイアサンに近寄り、封印の楔を外す。

途端、リヴァイアサンが目覚める。

『キュアアアアアアアアアッ!!』

耳をつんざくような叫びは辺りを飛び交っていたウンディーネを光の塊へと変える。

そして、その光をリヴァイアサンは取り込んだ。

「っ！自ら守護精霊を取り込んだのか!？」

驚きを隠せないイリスだが、左手に霊剣・フランヴェルジュ、右手に白翼の装飾を施した細身の刀身を持つ純白の神剣・フラガラツハを構える。

「ヴェネチアーノ達は下がって！此処は俺達がやるから！」

フェリシアーノは背後にいるイタリヤに声をかけると、白銀の刃と真紅の柄の境に純白の翼と白い旗が付いた紅き色彩の神の槍、ロングィヌスの槍を構えた。

フランドールはレーヴァティンを強く握り締めながらレミリアと共に宙へと舞い上がる。

「閃光よ、彼の者に安らぎを与えよ！フォースレイ！」

フェリシアーノが光の魔法を放つと、イリスは一気にリヴァイアサンとの距離を縮め、斬りつける。

「禁忌・レーヴァティン！」

「神槍・スピア・ザ・グングニル！」

「疾黒の矢！」

スカーレット姉妹は弾幕、ランカは破魔弓を構え矢を、同時に放つ。アルトはリヴァイアサンの攻撃を避けながら銃剣・メイルピアスで反撃をする。

デュオはデスサイズ、イヴァンはグリムリパーを構え、リヴァイアサンに攻撃をする。

ルーミアは闇の魔法を放ち、ヒイロはライフルを構え銃撃戦で応じる。

だが、大きなダメージは与えられなかった。

「チツ：流石、華の国4聖域の竜だ。ダメージが与えられねえ。」

デュオは舌打ちしながら呟く。

その時、リヴァイアサンが水の魔法を放つ。

「っ！シールド！」

イリスはシールドを張るが一部間に合わなかった。

其処にはイタリア達がいる。

「危ない！」

「清廉なる流水よ：華となりて護りたまえ！水界の華！」

フェリシアーノはイタリア達の前に立つと、結界華術を発動させる。

蒼白の花弁は結界に変わると水の魔法を跳ね返す。

「みんな、大丈夫！？」

「うん！grazie、フェリシアーノ！」

「わっ！」

イタリアに抱きつかれたフェリシアーノは驚くが、小さく笑う。

その時。

「フェリ！歌だ！」

何か思い付いたイリスが叫ぶ。

「華と夕風、それぞれの古のコトバの歌に華の力を込めて謳えば、多分リヴァイアサンの暴走は収まる！」

「分かった！」

フェリシアーノは頷くとイリスの元に駆け寄る。

そして、2人は謳い始めた。

2つの古のコトバは決して不協和音にはならず、むしろ深い旋律を奏でた。

途端、リヴァイアサンの瞳から怒りが消え失せ、動きが止まる。

そして、リヴァイアサンに取り込まれた精霊達が元の場所へと戻っていった。

『わ：れは：一体何をしていたのだ？』

我を取り戻したリヴァイアサンが呟く。

「リヴァイアサン！」

「暴走が収まったのか」

ヒイロの言葉にリヴァイアサンは暴走していた時を思い出したのか俯く。

『そうか：我は自らを失い、暴れていたのか：。フローラに悪いことを：』

「いいえ、貴方は悪くないわ。悪いのは夕風の国が放つ魔導だから」
リヴァイアサンはじつとレミリアを見据えると、イリスとフェリシアーノに視線を移し、頭を下げる。

『華の国第一皇女、イリスアリア・デイジー・セルフィーア。夕風の国第二皇子、フェリシアーノ・ヴァルガスか：』

その言葉にイリスは頷き、フェリシアーノは俯くとイタリア達を見る。

予想とは裏腹にイタリア達は驚いていなかった。

フェリシアーノは啞然としていたが、何かを考えるように俯く。

「華の国女王フローラ・ローズの娘、イリスアリア・デイジー・セルフィーア。今はイリス・プラトリーナですが」

すると、フェリシアーノは意を決したように顔を上げる。

「夕風の国前女王リーフィア・セシルの息子、フェリシアーノ・ヴァルガスです」

するとリヴァイアサンは懐かしそうに目を細める。

『リーフィアか：懐かしい名だ：。彼女と、そなたの姉フェイエルノート・ティア・リシエル、兄ロヴィーノ・ヴァルガスは今どうしている？』

「兄は私とイリス姫と共にいます。母と姉は：父に殺されました：現国王によって：」

途端、リヴァイアサンの眉間に皺が寄る。

『：やはり、夕風の王は新たなる世界の王になろうとしておるのだ

な。そのために、旭あんず、ノーチェ・エイセル、フェイエルノ
ト・ティア・リシエルを殺め、破壊魔導を造り上げたとは』

「…サクラは、フェリシアーノに臨星の華を返し、私を護るために
破戒ノ華を使い、命を落としました…」

イリスが俯きながら呟くと、リヴァイアサンはそつと目を綴じた。

暫くして、イリスはイタリア達が異世界から来た人だと教え、彼等
を元の世界へと帰して欲しいとリヴァイアサンに頼む。

リヴァイアサンは頷くと水を操り、異世界へと続くゲートを開いた。
「これで、元の世界に帰れるはずだよ」

フランドールはイタリア達に言う。

「短い間だったが、世話になったな。それと、フェリシアーノ」
「何？」

ドイツに呼ばれたフェリシアーノは彼を見る。

「俺達を守ってくれて、ありがとう」

「そんな事はないよ。俺はみんなを守りたい」

微笑みながらフェリシアーノは言う。

「みんなを守るなら、俺は、イリスが受けてる厳しい訓練も受け
るって決めてんだ」

「イタリアとは正反対だな。見習わせたいくらいだ」

「ははっ。ドイツ、あまりイタリアを怒るなよ。彼奴なりに悩んで
るからさ」

「…分かった。お前が言うなら俺は何も言わない」

「……早く行きなよ。ゲートが閉まる」

フェリシアーノはドイツの肩を叩きながら言う。

「また会おうな！イリス！フェリちゃん！」

「機会があつたら、な」

失笑しながらイリスはプロイセンに言う。

ゲートに入っていく彼等を見送っていると、ふとイタリアがゲート前で歩きを止め、フェリシアーノの近くへと近寄った。

「ヴェネチアーノ、早くしないとゲートが…」

「あのね、フェリシアーノに言いたい事があるんだ」

「え？」

「姉ちゃんと母さんを亡くしたのは辛いと思うけど、自分を責めないでね」

その言葉にフェリシアーノはポカンとした。

「意味、繋がってなかったね。ごめん」

「あ、謝る必要はないよ」

慌ててフェリシアーノは手を振りながら言うと、イタリアは何かを考える。

「…そうだ！フェリシアーノ、これ、あげる！」

イタリアは手にしていた白旗の布をフェリシアーノに渡す。

「え？ヴェネチアーノ？」

「仲良くなった印！だから、あげる！」

「…じゃあ、俺からも」

フェリシアーノはロンギヌスの槍についている白旗をとるとイタリアに渡した。

「…元気でね、ヴェネチアーノ」

「フェリシアーノもね！」

イタリアは笑顔で言うとゲートに入ってしまった。

同時にゲートが閉まり、静寂が訪れた。

フェリシアーノは手に持っている白旗を見つめると、槍につけた。

『イリスアリア、フェリシアーノ』

リヴァイアサンに呼ばれたイリスとフェリシアーノは振り返る。

『そなたらに新たな力を授けよう。我を助けてくれたお礼だ』

そう言うトリヴァイアサンは2つの、蒼い色彩の華を創り出し、2

人に渡した。

『水聖の華だ。きっとそなたらの役に立つであろう』
すると2つの華はイリスとフェリシアーノの体に吸い込まれるよう
に消えた。

「「ありがとうございます。リヴァイアサン」」

『礼には及ばん…。そろそろ我は眠ろう…。神子よ…、我が同胞を
救ってくれ…』

リヴァイアサンはそう言うときクリスタルに入り、眠りについた。

「…イリス」

「分かってる。リヴァイアサンとの約束を果たそう」

イリスは小さく微笑みながら言う。

そして、彼女達は黎明の遺跡を後にして、街へと戻った。

設定5

【追加キャラ】

・王耀

華の国出身の青年で菊の義理の兄。
弟の香と妹の湾と共に情報屋を営み、様々な国を旅している。

・香

華の国出身の少年で王の弟。
たまに華の国に帰ると、よくアーサーをからかう。
銃を扱える。

・湾

華の国出身の少女で王の妹。
菊が大好きで、イリスとは親友関係。
格闘家。

・イヴァン・ブラギンスキ

雪の国出身の青年。

ある日、夕風の兵に襲われた所を王達に助けられ、そのまま華の国に移り住んだ。

因みに一人っ子。

巨大な鎌を扱う。

・リヒテンシュタイン・ツヴィンクリ

華の国出身の少女。

兄のバツシュと共に暮らしている。

愛称はリヒテン。

イリスとは仲良し。

法術士のたまごで、初級の回復魔法は使える。

・バツシュ・ツヴィンクリ

華の国出身の青年でリヒテンシュタインの兄。

第一部隊に所属している魔法銃士。

・エリザベータ・ヘーデルヴァーリ

華の国出身の少女。

第四部隊に所属している槍騎士で、ギルベルトとは犬猿の仲。
風の魔術を扱える。

・ローデリヒ・エーデルシュタイン

歌の国出身の青年。

ミク達が華の国に移り住んだと同時に、華の国に移った。
ルナサのヴァイオリンの師匠でもある。

【4 神竜】

・リヴァイアサン

水神の聖域に住む神竜。

蒼い体に蝙蝠のような翼を持つ。

比較的大人しい性格。

・バハムート

かざかみ
風神の聖域に住む神竜。

翠色の羽毛の体に羽根の翼を持つ。

温和な性格。

・ジークフリート

ほむらかみ

焰神の聖域に住む神竜。

深紅の体に蝙蝠の翼を持つ。

好戦的な性格。

・レーヴィア

つちかみ

地神の聖域に住む神竜。

茶色の体を持つが翼はない。

慈悲深い性格。

【新たな国】

・闇の国

漆黒の大地と空に覆われた国。

国民の大半は精霊族と魔族。

悪魔の華が咲く国で、代々女王が治める。

華の国と光の国とは同盟を結んでいる。

・雪の国

一年中雪に覆われた国。

夕風の国に襲われ、海の国、歌の国と同じ境遇に変わる。

・風の国

強い風が吹き荒れる溪谷に位置する国。
そのため、夕風の国の侵攻を防げた。
陽炎の国とは同盟を結んでいる。

・光の国

光水晶に囲まれた国で、夜がないため、闇水晶で夜を来させる変わった国。
代々、女王が国を治める。
華の国と闇の国とは同盟を結んでいる。

・水の国

豊かな水源に囲まれた国。
水の聖地と呼ばれる国で、女王が治める国でもある。
雨の国とは姉妹国。

真実とアレットの花飾り

夏を知らせるエスターテの花が散り、秋を知らせるリリイの花が咲き誇った。

あちこちでは紅葉が見られ、秋に咲く花が暖かい色を放っていた。街中は秋色の服を着た人がちらほら見かける。

イリスはフェリシアアーノ、レミリアを連れて手芸屋へと出かけた。秦皮の葉から作られた糸、エーリスという羊の毛から紡いだ毛糸、コゼロークという山羊の毛から紡いだ毛糸、絹糸、アレニエという蜘蛛が紡いだ糸、大きめの白と淡い空色の布地、装飾用のリュミエールの花、ルークスの花、フォスの花、ルーチェの花、リヒトの花を買いと云う。

大量購入に疑問を感じたらしく、フェリシアアーノは不思議そうにイリスを見つめる。

気がついたのかイリスは苦笑を浮かべる。

「華の国では冬になると、雪華せっかの祭が行われる。その支度は時間がかかるから、今のうちに買っておくんだ」

そう言うといリスは目的の手芸屋へと入っていった。

中では落ち着いた色の灯りが灯してあり、暖かさを感じた。

イリスは雪華の祭に必要な物を一通り買くと、重いものが入った紙袋を持ち、糸類や花が入った比較的軽い紙袋はレミリアとフェリシアアーノに渡すと、帰路についた。

家につくと、テーブルに買ったばかりの品物を乗せる。

「：よし、下準備は出来た。後は作るだけだな」

「イリス、雪華の祭って何なの？」

「あ、フェリは知らないのよね」

気づいたレミリアはイリスに変わって説明する。

「雪華の祭は聖星華の祭と違って1日しかない、来年の豊作や幸運を願うお祭りなの。それに必要な飾りがあるんだけど、作るのに一季必要だから華の民は全員、この時期に作り出すのよ」

「『アレットの飾り』っていう、アレットの花を模した花飾りに五つの花を飾った装飾を作るんだが、結構骨が折れる作業だからな。今のうちが正念場なんだ」

イリスは既に疲れ果てた表情になっていた。

アレットの花は12の花弁を持つ花で、6枚の花弁は白、残り6枚の花弁は淡い空色をしている花だ。

二枚の布で花を作るだけなら問題はない。

だが、その花弁に繊細な紋章を縫い付ける細かな作業をしなければならなかった。

さらにアレットの花飾りは毎年新しくなければならない。

イリスは溜息をつくと、飾り棚から質素な裁縫箱を取り、白い布地を裁ち始めた。

フェリシアーノとレミリアも、簡単な作業ではあるが糸玉を作るのを手伝った。

――夕方になり、ロヴィーノがシンとキラ、アスラン、刹那、ティエリアを連れて帰宅した。

フランドール、ルーミア、チルノはバチュリーから図書館の整備を頼まれたので城に残った。

「イリ：」

彼等の視界に映ったのはテーブルの天板に突っ伏したイリスと、散らかっている布片を片付けているフェリシアーノとレミリアだった。

イリスの傍らには1つだけ仕上がったアレットの花飾りがある。

それを見てロヴィーノ達は、冷や汗を浮かべた。

(…イリス、花飾りつくるの苦手だからなあ…)

一気に全員の心に飛来した言葉だ。

彼等の帰宅に気づいたイリスはゆっくり顔をあげる。

「…おかえり…フラン達はいないのか？」

「フラン、ルーミア、チルノは宿直」

「へえ…。そだ、イタリア達が此の世界に来た原因、判ったか？」

イタリア達がイリス達の世界に来た原因はリヴァイアサンでも分らなかった。

そのため、イリスはバチュリーに原因の解明を頼んだ。

「バチュリーが言うには、時空間の歪みらしい。魔導は直接的な関係はないって言ってたよ」

キラの言葉にイリスは安心した。

「良かった。もし魔導に時空間を歪める力があつたら大変な事になるからな」

「けど、油断は禁物だ。何時それが現実になるか解らないからな」

「分かってるよ、アスラン」

そう言うとイリスはテーブルの上に置きっぱなしにしていた裁縫道具を箱に片付け、飾り棚に戻す。

ソファに座り直すとテーブルの上に置かれたアレットの花飾りに目を移し、手に取る。

布で造られた花飾りは実物よりも繊細な花卉ではないが、滑らかな形をしていた。

花卉に縫いつけられた紋章は来年の豊作や幸運を意味する。

再び花飾りをテーブルに置くと、イリスは立ち上がり、夕食の支度を始めた。

無垢な魂を蝕む病

翌日、フェリシアアノに叩き起こされたイリスは慌てて支度を整えると王城へ向かった。

城のある部屋に向かうと、中央に置かれたベットの上で華の国第三皇女であるスイレンが静かに眠っていた。

「スイレン…」

カシスは静かに眠る妹の頬に触れる。

その頬が炎のように熱いのに対し、手は氷のように冷たかった。

「バチュリーの見立てでは、どうやらスイレンは『キリク』にかかったらしい…」

「キリクって、まさか…」

グラスの言葉にイリスは青ざめる。

キリクは何らかの原因で発症する病で、かかると昏睡状態に陥る。頭は炎のような熱さの熱を発し、体は氷のように冷たく冷えるのが特徴で、発見が遅れば死に至る病だ。

「…華の国でキリクに感染した民は1人も居なかったのに…。なんでスイレンがキリクに…」

信じたくないと、言いたいようにカシスは掠れた声で呟く。

「恐らく、キリクと魔導は因果関係があると、私は推測します。計算すると、キリクが流行りだした時期と夕凧の国で魔導が初めて使われた時期が、ちょうど重なり合ってます」

バチュリーの言葉にフローラは頷く。

「バチュリーの言うとおりかもしれないわ。各国で、キリクにかかった人々の共通点は、スイレンのような『無垢な性格』。しかも幼い子供達や乙女に限って…」

「母上、それは偶然だったのでは？」

グラスは母に訊ねる。

すると、フローラは首を横に振る。

「偶然かもしれないわね。でも、『無垢な魂』を闇に堕とす魔導：『無垢な性格』の人々しかかからないキリクという病：なにかあるわ」

彼女の瞳には強い光が灯されていた。

その光は、母として娘を思う光、一国の王として民を思う光だった。

「…病に効く力…癒やし…水…」

「どうしたんだよ、ティエリア」

何かブツブツと呟くティエリアに魔理沙は怪訝そうな表情で訊ねると、ティエリアはイリスとフェリシアーノに向き合った。

「イリス、フェリシアーノ。確かりヴァイアサンから水聖の華を貰ったよな？」

「うん。貰った」

「一体どうした？」

「古文書で見たことがあるんだが、水聖の華には万病を癒やす力をセラピアの花に与える力を持っているらしい」

「!？」

啞然としたイリスはティエリアを見据える。

セラピアの花とは病を癒やす効力のある、霊草の類に属している特殊な花。

「花に力を与えるには神子の力を媒介して与える。神子は2人いるから大丈夫だ。だが問題はセラピアの花の方だ」

「セラピアは、風の女神の羽根が花となった花。セラピアが咲く場所、調和の遺跡最深部『風神の聖域』^{かぜかみ}には風の守護竜バハムートが封印されている」

「しかも、バハムートが封印されているクリスタルの周りに群生している。採集するためには暴走しているバハムートを倒さなければならぬ」

その言葉にイリスは唇を噛みしめる。

バハムートは動きが素早く、攻撃を当てるのは難しい。

動きを封じるために翼を狙うのが一番なのだが、イリス達には出来

なかった。

どうすればいいか悩んだ時、刹那は何かを思い出した。

「…あの兄弟なら、バハムートを狙えるかもしれない」

「ニールとライル…ディランディ兄弟か！」

イリスは思い出したように言う。

「確かに、あの双子ならバハムートを正確に狙えるかもしれないな。だが、相手は暴走しているんだぜ？」

「行動してみないと判らないだろ？ダメもとでやってみよう」

真顔で言うイリスにデュオは苦笑を浮かべた。

「以前、2人はアレルヤとハレルヤと一緒に風采の都で遺跡の調査をする言っていた。恐らくまだ居ると思う」

「じゃあ、メンバーは私、フェリシアノ、ティエリア、刹那、キラ、アスラン、シンの7人。バチュリーはセラピアの花の調査に必要な霊草や薬草、花、霊水を調べて。他のみんなはそれらの採取」その言葉に頷いたバチュリー達は図書館に向かった。

「私達も行こう。母さん…」

イリスは何か言い掛けるとフローラはふわりと柔らかく笑う。

「スイレンの症状は私達が抑えるわ」

頷くとイリス達は部屋を出、支度を整えると調和の遺跡がある風采の都へと向かった。

風采の都

——水爛の都と同じ繁栄と衰退の道を辿った都は3つあり、それぞれに神竜を祀る神殿があった。

地の守護竜レーヴィアが祀られる豊穡の遺跡がある地霊の都。

焰の守護竜ジークフリートが祀られる琉聖の遺跡がある煉獄の都。

そして、セラピアの花が咲く、風の守護竜バハムートが祀られる調和の遺跡がある風采の都——

風采の都は風の強い場所に造られた都で、風除けが着けられたら居住が目につく。

街の彼方此方には強風に耐性を持つ翡翠色の花卉を持つアイレの花が咲いていた。

此処に生息する魔物は風に耐性を持つ魔物が多い。

だが、雷の力を持つ魔物もいる為、麻痺状態になることもあった。

「ねえ、イリス」

先程の戦闘で危うく麻痺になりかけたフェリシアーノは腕の傷を癒やししながらイリスに声をかける。

「何？」

「華の国では、一度もキリクにかからなかったんだよね？華の国には無垢な性格の人々が多いのに、何でかからなかったの？」

「ああ、確かに疑問に感じるよな」

吹き荒れる風で乱れた髪を梳きながらイリスはぼんやりと空を見上げる。

「華の国はある条件が整ってるんだ。その条件は何だと思う？ヒントは4神竜」

「…吹き溜まりになりやすく、自浄作用がある場所…！」

何かに気づいたフェリシアーノはイリスを見据える。

「そう。華の国は世界を巡る精霊や天使達の力が溜まりやすい。邪の思念も溜まりやすいが、聖なる花や霊草が生息する国でもあり、自浄作用が強い場所でもあるから、邪の思念は無い」

「だから、キリクは流行らなかった」

「けど、魔導の影響もあってか自浄が弱くなってきた。このままじゃ、いずれ民はキリクにかかる」

フェリシアーノは目を伏せると、手を握りしめる。

「：私みたいに自分を責めるな。ロヴィに叱られるぞ」

イリスは困り果てたように笑った。

「私達が進まないとな。助けられる命を失うことになる。行こう、フェリ」

そう言うといリスはフェリシアーノに向けて手を差し伸べる。

「：そうだね：行こう！」

自分を縛る柵を解き放てたようにフェリシアーノは強く頷くと、イリスの手を握った。

調和の遺跡に近い場所にある石造りの居住。

元は遺跡の神官達が住んでいた家だった。

此の周辺で採掘される翡翠を使って造られた扉を開けると、中には2人の男性と青年がいた。

「よっ、久しぶりだなイリス。元気そうじゃねえか」

「ちよっ、ハレルヤ：いきなりそれはないよ：」

「はあ：2人は相変わらず：か」

溜息をつきながら呟くイリスはハプティズム兄弟を見ると、隣にいたディランディ兄弟に視線を移した。

「ニール。久し振り」

「おう、久し振りだなイリス。で、そっちのロヴィーノにそっくりなのが言霊の神子か」

「フェリシアーノ・ヴァルガスです。ロヴィーノ兄ちゃんとは双子で、臨星の華術士、及び言霊の神子です」

フェリシアーノは4人に挨拶をする。

「俺はニール・ディランディ。で、コイツは俺の弟のライル」

ニールはライルを指しながら自己紹介をする。

「あ、僕はアレルヤ・ハプティズム。彼は…」

「俺はハレルヤ・ハプティズム。アレルヤの兄貴だ。よろしくなフェリシアーノ」

「よろしくお願いします」

彼等の自己紹介にフェリシアーノは深々と会釈をした。

「で、ティエリア達はどうして此処に来たんだ？」

ライルの質問にイリスが俯くと、変わりに刹那が答える。

「スイレンがキリクにかかった。風神の聖域に咲くセラピアの花を採取しに来たんだ」

「スイレンが!？」

驚きを隠せないアレルヤ。

ニールはじっと刹那を見据えると口を開く。

「だが、風神の聖域はバハムートがクリスタルに封じられている。近寄ればエレンの楔を解放する事になるぞ」

「このままだと、民もキリクにかかる。時間がない」

刹那は落ち着いていたが、その声には焦りがあった。

すると、イリスは意を固めたように口を開く。

「神竜の暴走は、私とフェリなら止められる」

その言葉に全員は一斉にイリスを見据えた。

「華の古のコトバを用いた歌、夕風の古のコトバを用いた歌に神子の力を合わせれば、暴走は収まる。多分、自浄の力も少しは取り戻せる筈だ」

一旦、言葉をきるとイリスは大きく息を吐き出す。

「そのためにはニール達の力が必要なんだ。：頼む」

そう言うといリスは頭を下げる。

すると、ニールはイリスに近寄るとその頭を軽く撫でた。

くしゃりとなった碧の髪を押さえながらイリスは呆然としてニールを見据える。

「何、頭さげてんだよ。イリスは俺達の隊長だろ。隊長の命令には従うさ」

「：ニール」

イリスは啞然としたが、小さく笑った。

「：行こう。バハムートとスイレンを助けに」

そう言うといリスは外に出る。

一陣の風が吹き、アイレの翡翠色の花卉は空に舞い上がった。

セラピアの花・守護風竜の華

調和の遺跡は黎明の遺跡とよく似ていた構造をしており、違っているのは此処を守護する精霊がシルフとカーバンクルで、遺跡内部に風が流れている事だ。

長年、放置されていた為、壁や床の石は風化し所々が脆くなっていた。

「わあっ！」

「フェリ、大丈夫か!？」

風化した床に当たり、浅い穴に落ちたフェリシアーノをイリスは助ける。

が、フェリシアーノを落とし穴から助け出した途端、足を踏み外し自分が代わりに落ちてしまった。

「どわあっ!!！」

「イリス、大丈夫!？」

アレルヤはイリスを落とし穴から助け出した。

「だ…大丈夫…。だいぶ風化してるな…道。黎明の遺跡は水が凍って滑ったし…」

イリスは腰をさすりながら呟いた。

一部、強風が吹き荒れる通路や通路と同じように風化してボロボロになった橋もあった。

道中グリフォンやヒポグリフ、コカリトスなどに襲われ、再び落とし穴に落ちそうになった。

浮遊魔法でそこはなんとかしようと考えたが、風によって飛ばされそうになるのが予想されたので止めた。

先に進むには、所々に仕掛けられたスイッチを押し、風力を押さえる必要があった。

だがそのスイッチも強風が吹き荒れる通路の先にあったり、崩れ落ちた道の途中にあったりした。

「これじゃ、先に進めねえぞ！」

「だあーっ！少しは静かにしろ！」

果てにはイリスとハレルヤが喧嘩する羽目になったり、同じ通路をぐるぐる回ったりする事になった。

漸く中間地点である精霊華の聖域に辿り着くと、イリス達は休憩した。

全員、魔物から受けた傷ではなく、落とし穴のダメージやギミックのダメージが一番多かった。

「つてて…流石に風化しすぎだろ…」

イリスは服の袖を捲り、どうなってるか確かめる。

腕は赤く痣になっていたがそんなにはひどくなかった。

だが、念の為回復魔法を使い痣を消した。

そして、全回復魔法の呪文を唱え、パーティーの傷と体力を回復させた。

体力は回復したのだが、落とし穴によるメンバーの精神ダメージは色んな意味で深かった。

「…体力はこまめに回復しないと、此処はしんどいよな」

「だからといって、アイテムは浪費しないようにな」

「…へーい」

ティエリアのツツコミにイリスは分の悪い顔になった。

「ねえ、ニール。華の国に存在する4神竜が強いのは、此の大地が力の吹き溜まりになりやすい大地からだよね？」

「ああ、確かにそうだな」

フェリシアーノの質問にニールは頷く。

「竜の名称も他国と違うのも、他国の4神竜より強いから、だよな」

「そうだな」

「あのさ。夕風の4神竜はどんな名称なの？」

アレルヤの質問にフェリシアーノは唸る。

「確か：地はドレイク、水はルサルカ、焰はフィニカス、風はグライフだったよ」

「国によって力の差はある。だから名称も違うんだろうな」

ライルはそう言うと言と武器の調子をみた。

イリスは苦笑を浮かべながらも風神の聖域がある道の手を見据えた。その瞳に何かを感じたのだろう、シンと刹那は小さく笑いながらも武器の手入れをした。

休憩を終え、再び体力を削られながらも、イリス達はようやく風神の聖域に辿り着いた。

奥の祭壇に浮かぶ巨大な翠色のクリスタルに封じられた風の守護竜バハムート。

クリスタルにはリヴァイアサンが封じられていたクリスタルと同じようにエレンの花が白い花を咲かせ、柔らかな緑色の蔦を絡めていた。

その周りには優しい匂いを放つ、ペリドットの色をした5つの花弁を持つセラピアの花が咲き乱れている。

イリスはクリスタルに近寄り、絡み付くエレンの楔を外し、バハムートを目覚めさせた。

『プユイイイイイイイッ!!』

風が吹き荒れ、此の場をを守護する精霊シルフとカーバンクルは啼き声に共鳴するかのように光となり、バハムートに取り込まれた。クリスタルから数歩下がったイリスは銀の髪に紅い双眸：本来の姿

に戻ると、フランヴェルジュ、フラガラッハを鞘から刀身を抜き、構えると一気に先制をしかけた。

だが攻撃はかわされ、バハムートは空気に溶け込んだかのように消え、姿を見せない程の速さで辺りを飛び回る。

「攻撃が当たらないよ！」

ロンギヌスの槍を構え、魔法を放っていたフェリシアーノは叫ぶ。

「ニール！ライル！」

シンはルーンソードを構えながらニールとライルに呼びかける。

「判ってるって！」

「シン達は時間稼ぎを頼む！」

ニールは静寂の力を込めたライフル・サイレントバレル、ライルはアサルトライフルを構え、バハムートの動きを捉えるため、視線を辺りに巡らせる。

「悠久の闇夜に沈みし、月に蝕まれし太陽。その闇を解き放て！オプスクーリタース！」

ケリュケイオンの切っ先を地に突き刺し、ティエリアは闇の魔術を発動させた。

刹那はルーンナイフとショーテルを構えながらバハムートの動きを探る。

キラは銀で造られたマスケットナイフを構え、バハムート動きを見据え、攻撃のチャンスをはかる。

「真空斬破！」

「最初の光、時を超え、今此処に現れん！プロエレフスイ・ルークス！」

ミスリルダガーを構えたアスランは光の魔術を発動させ、キラが放った技に合わせた。

「チッ！かなりすばしっこいじゃねえか！」

「ハレルヤ、気をつけて！」

刹那と共にバハムートの動きを探る、長剣・ルーンブレードを構えるアレルヤと、短剣・フリーズナイフを構えるハレルヤ。

イリスはフェリシアーノの背中を合わせ、バハムート動きのパターンを掴む。

「右…左…左斜め上…右下…」

小さく呟きながらパターンを探る。

イリスは目を綴じ、風を切る音、肌で感じる風圧で位置を測定していた。

「…右下…左上…右…真横…上…」

延々と続く観測。

途端、左の頬に微かに強い風が当たる。

「ニール、ライル！左！」

「判った！」

「狙い撃つ！」

そうイリスが叫ぶと、ニールとライルはイリスの左側に弾丸を放つと、弾丸が当たったらしくバハムートが動きを止め、翡翠で造られた床の上に堕ちる。

「フェリ！」

「うん！」

2人は頷き合うとそれぞれの古のコトバの歌を謳い始めた。

リヴァイアサンの時と同じ、澄み切った歌声は風と共鳴し、深い音色を刻む。

バハムートの翼の傷は癒え、風の竜の暴走は収まった。

取り込まれた精霊達は解放され、バハムートの翠色の瞳には愁いを帯びた光が宿る。

『私は、悪しき力に操られ、暴走していたのですね…』

バハムートの澄んだ少女の声にフェリシアーノは驚いたが、すぐに首を横に振る。

「バハムート、あなたのせいではありません。気にしないでください」

バハムートはじっとフェリシアーノと、彼の側にいるイリスを見据える。

2人は居住まいを正し、バハムートの目を見つめる。

「私は夕風の国、前女王リーフィア・セシルの息子、フェリシア・ノ・ヴァルガスです」

「私は華の国女王フローラ・ローズの娘、イリスアリア・デイジー・セルフィア」

2人の口から出て来た人名にバハムートは驚いた。

『貴方達、リーフィアの息子とフローラの娘なの？…成る程。…その眼差し…確かに2人のお母上とよく似ていらっしゃるわ…』

バハムートは小さく微笑むが、すぐに目を伏せる。

『リーフィアとフェイエルノート、あんず、ノーチェの訃報は風から聞いております…。夕風の王、スファギは新たな世界の王となるべく、破壊魔導を造り上げたのでしょ…ね…。魔導から貴方を守るために命をはって破戒ノ華を発動させたサクラの事も、聞いております…』

リヴァイアサンと同じような事を語るバハムート。

イリスはそっと目を伏せた。

バハムートにスイレンがキリクにかかった事、その治療にセラピアの花が必要だという事を話すと、バハムートは頷き、セラピアの花をニールに渡した。

そして、バハムートはイリスとフェリシアノに翠の色彩をした華を渡した。

『それは『風聖の華』。水聖の華は水の力を宿した華ですが、風聖の華は風の力を宿しています。2人のお役に立つでしょう』

「ありがとうございます、バハムート」

フェリシアノは頭を下げ、礼を述べる。

バハムートは柔らかい笑みを浮かべると、宙を見上げた。

『幾らか、自浄の力が戻ったようです…。これなら民がキリクにかかることはありません…』

「良かった…」

イリスはほっとしたように呟く。

『光を見通す神子、霊を聴く神子…。私の同胞達と、世界の御霊をお救いください…。そして…二度と『あの悲劇』を起こさないで…』
バハムートはそう言うところクリスタルに入り、眠りについた。

「あの悲劇？」

フェリシアーノは首を傾げる。

「一体何だろう？…とりあえず、城に急ごう。スイレンを助けないと」

「うん」

イリスの言葉にフェリシアーノは頷いた。

「俺達の調査も終わった事だし、城に戻るとするか」

「ところで、何の調査だったんだ？」

大きく伸びをするニールにシンは訊ねる。

「話は城で。先ずはスイレンを助けるのが先だろ」

「…判った」

微妙な表情のシンにニールは苦笑を浮かべ、彼の頭を軽く2、3回叩いた。

サクリファイスの悲劇（前書き）

段々ストーリーが複雑になってきました…

サクリファイスの悲劇

——イリス達が生まれる数年前。

華の国と夕風の国の国境付近にあった、オリジンの村。

其処には、世界を生み出した2人の神子を祭る神殿があった。

当時、まだ王位を継いでいなかったフローラとリーフィアは、其処で暮らしていた創星の神子アリアと言霊の神子フィンと共に暮らしていた。

ある日、フローラとリーフィアの体調が優れなかった。

2人の異変と理由に真っ先に気付いたのはアリアだった。

アリアとフィンは宿屋にいるフローラとリーフィアに会いにいった。

「アリア、フィン、おはよう」

リーフィアは、その時赤子であったフェイエルノートを抱きながら神子を迎えた。

「リーフィア、大丈夫？」

「ええ。大丈夫よ。問題はフローラの方なのよ」

リーフィアは顔をしかめながら呟く。

フローラは既に2人の子供を産んでいたが体調に異変はなかった。

だが今回、フローラはリーフィアより体調が優れなかった。

「カシスとグラスを産んだ時は何も無かったのに……。フローラの夫も私の夫も理由が判らないって言うのよ」

「……その事で話があるんだ」

フィンは真顔になる。

その後、2人はフローラとリーフィアが寝室として使っている部屋に入る。

ベットの上には顔色の優れないフローラが枕を背もたれにして、起きあがっていた。

彼女は来客に気付くと、弱々しく微笑む。

「神子様、おはようございます」

「挨拶はいいわ。あなた達に話したい事があるの」

アリアはフローラとリーフィアにそう言うと、近くにあった椅子に座る。

「率直に言うわ。あなた達の中に新たな命：特にリーフィアには双子の命が宿っている。けど、3人は『人の子』じゃない、『神の子』よ」

淡々と語るアリアの言葉にフローラとリーフィアは言葉を失った。

「フローラに宿る神の子は『星の神子』。リーフィアに宿る双子の神の子は『満月の神子』と『太陽の神子』。特に、星の神子は私の力、太陽の神子はフィンのを、いずれ宿することになるわ。満月の神子は竜の光を宿す者として。けど、今は産まれない。母体に宿った神の子の成長は遅い。数年後、産まれるわ」

「待って！」

リーフィアはアリアの言葉を遮る。

「何で私とフローラに神の子が宿っているの！？」

「…時間が無いからよ…。新たな『鍵の器』が必要になるから…」
凍り付くようなフィンの言葉に、フローラとリーフィアは何も言えなかった。

これが、フローラとリーフィアにとって、アリアとフィンとの最期の会話となった。

数日後、フローラが華の国、リーフィアが夕風之国に帰国したのと同時にオリジンの村が魔王スファギに襲われた。

深紅の血に染まった大地で神子と魔王は戦ったが、アリアとフィンは戦いに負け、体は光の泡となって消えた。

2人の命と御霊は新たな世界へと導く鍵『ゲネシスの鍵』へと変え

た。

魔王がゲネシスの鍵を手にした途端、空間が歪み、魔界に生息する魔物が世界中に散らばった。

逃げ惑う民や、民と愛する人を避難させる王や兵士達は魔物に襲われ、命を落とした。

世界の大地は赤く、生贄となった人々の鮮血で染まっていく。

それは華の国と夕風の国も例外でなかった。

「リーフィア！早く逃げろ！フェイエルノートも避難した！早く！」

夕風王レインは妻にそう言うが、リーフィアは動かなかった。

「リーフィア！」

「『我は…夕風の姫神…』」

ポツリと呟いたリーフィアの言葉にレインは息を呑んだ。

夕風の古のコトバをリーフィアは呟いたのだ。

「『生と死は鏡合わせの輪廻…祈り捧げよう…華の姫神と共に…』」

途端、リーフィアの周りに魔法陣が現れ、光は空を貫いた。

その時、華の国でも同じ事が起こっていた。

フローラは華の古のコトバを呟いていた。

「『我は…華の姫神…光と闇は相対する境界…祈り謳おう…夕風の姫神と共に…』」

リーフィアと同じくフローラの周りに魔法陣が現れ、光は空を貫いた。

2つの光は交わり、魔王が持っていたゲネシスの鍵を砕いた。

鍵の破片は光に取り込まれ、光の予言はフローラに宿る子、知の予言はリーフィアに宿る双子の片割れに宿った。

鍵を失った魔王は魔力を奪われ、そのまま魔界へと帰った。生き残った人々もいたが、あまりにも被害が大きかった。

魔王が降臨し、沢山の生命を奪われ、大地が贄の血で紅く染まった悲劇は後に『サクリファイスの悲劇』と呼ばれるようになった。

数年後、フローラは神の娘を、リーフィアは神の双子の息子を産んだ。

そして、フローラの娘に光の予言、リーフィアの息子の片割れに知の予言が宿っている事がわかった。

だが、その事が魔王に知られてしまった。

魔王は華の国を乗っ取ろうとしたが、その時期、華の国は聖星華の祭の真っ最中だった。

そして、魔王は夕凧の国を乗っ取ろうとした。

レインは国を守ろうと戦ったが、力が及ばず魔王に殺された。

リーフィアはレインの仇を討つべく魔王に挑んだ。

だが彼女は、幼い娘と双子の兄弟を残し此の世を去った。

レインとリーフィアの訃報と夕凧の国の宣戦布告にフローラは、ある決意をした。

何としても、レインとリーフィアの子ども達を、娘達を、世界を守る。

二度とあの悲劇を繰り返してはならない、と。

そう、決意をした。

語られた真実

風采の都から帰還したイリス達は急いでバチュリーのいる部屋に向かう。

バチュリーの部屋には薬草の類や傷を癒やす効力のある花や霊草がずらりと並んだ棚が壁一杯にあった。

「バチュリー！」

「イリス！セラピアの花は！？」

イリスはニールから受け取った、既に癒やしの力を注いだセラピアの花を渡す。

花を受け取ったバチュリーは、火にかけてある壺に花を入れ、薬を作り始めた。

――暫くして、青い色をした霊薬が完成した。

バチュリーは霊薬を瓶に入れるとイリスに渡す。

「これはスイレンの体質に合わせた『エリシオンの霊薬』。早くスイレんに飲ませて」

イリスは頷くと、フェリシアーノと共にバチュリーの部屋を後にした。

部屋に居るのはバチュリーと、ディランディ兄弟、ハプティズム兄弟、刹那、ティエリア、キラ、アスラン、シンの10人。

「バチュリー。お前に頼まれた依頼、終わらせてきたぜ」

ニールはバチュリーにそう言うと、小さな空色のクリスタルを渡す。クリスタルを受け取ったバチュリーは、それに魔法をかける。

と、クリスタルは光り出し、小さな風神の聖域が宙に浮かび上がった。

「確かに風神の聖域のコピーね。ありがとう」

「水神の聖域は終わってるから、あとは、焰神の聖域と地神の聖域だけだね」

キラの言葉にバチュリーは頷く。

「他の聖域のコピーは特殊部隊全員に頼んでいるわ。これが判れば神子が産まれた経緯が判るはず……」

「バチュリー達、何を調べているんだ？」

空気に乗れないシンは訊ねる。

「イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノについてよ。あの3人は特殊過ぎるから」

「どういう事なんだ？」

「ちゃんと聞いてよね。……あの3人は……」

バチュリーの言葉にシンは真剣に耳を傾け、3人の真実を聞いた。

——その頃、イリスとフェリシアーノはスイレンの部屋にいた。

スイレンの部屋にはフローラ、カシス、グラス、ロヴィーノがいた。バチュリーから渡されたエリシオンの霊薬をスイレンに飲ませると、彼女は意識を取り戻した。

「良かった……霊薬が効いたんだな」

「はい……他の病との合併症もないようです」

スイレンは弱々しく微笑んだ。

「けど、今は安静にして。病み上がりだから」

カシスはそう言うと、スイレンを眠らせる。

すると、フローラはイリス、フェリシアーノに向き合う。

「守護竜の暴走を抑えたのですね」

「はい」

イリスは頷くと、じっと母親を見据える。

「バハムートは眠りにつく前『あの悲劇を二度と繰り返してはなりません』と、言いました。：母さん、バハムートが言った悲劇とは何ですか？」

その質問に、フローラは答えるのを躊躇ったが、決意を固めたかのように瞳に鋭い光を宿した。

「：あなた達が産まれる数年前、世界中の生命達の半分が殺された『サクリファイスの悲劇』は知っていますね？」

イリスとフェリシアーノ、ロヴィーノは頷く。

「私とリーフィアはまだ皇女でした。私達は、イリスの父親であるシオン、リーフィアの夫：フェリシアーノとロヴィーノの本当の父親であるレインと共に、夕凧の国と華の国との国境付近にあるオリジンの村に仮住まいしていました」

「「え：！？」」

フェリシアーノとロヴィーノは驚きを隠せなかった。

2人の驚き様にフローラは苦笑を浮かべた。

「仕方ありません。レインが殺されたのはあなた達2人がまだ赤子だったのですから」

「じゃあ：彼奴は本当の親父じゃなかったのか：」

「はい。彼の真の名は『魔王スファギ』。創星の神子アリア、言霊の神子フィンを殺し、2人の御霊が生み出したゲネシスの鍵の力を使い、サクリファイスの悲劇を引き起こした張本人。そして、レインとリーフィアを殺し、夕凧を悪国にしまった魔界の王です」

「私達も魔王を倒そうとしました。ですが、相手は魔界の王：。全く歯が立たない相手でした」

「じゃあ、どうやって世界の破滅を回避出来たのです？」

カシスは訊ねる。

「私とリーフィア：いえ、イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノの力のお陰だったのです。あなた達の力がゲネシスの鍵を破壊し、世界の破滅を防げたのです」

「「ちょっと待ってください！」」

イリスとロヴィーノはフローラの言葉を遮る。

「俺は確かにフェリシアーノの兄だ。けど…俺にはイリスやフェリシアーノみたいな力はない…」

「それに、私達はサクリファイスの悲劇の時、母さん達には宿ってない筈です！」

2人の言葉にフローラはそっと目を伏せる。

「…あなた達は人の子ではないのです。あなた達は神の子供。神の子供は人間の母体に宿ると成長は遅くなる…。サクリファイスの悲劇の時、確かにイリスは私に、あなた達双子はリーフィアに宿っていました。イリスは光の力を継承する『星の神子』、フェリシアーノは言霊の力を継承する『太陽の神子』、ロヴィーノは竜の力を継承する『満月の神子』として」

フローラの言葉に3は言葉を失った。

自分が人の子ではなく神の子と知っただけではなく、古のコトバを最初から知っていたと言う事に何も言えなかった。

「古のコトバの記憶は封じたのです。魔王に神の子だと知られないように」

「「……………」」

3人は沈黙を守った。

その後、城にある寮に向かったイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノは夕食を済ませると、与えられた部屋で体を休めた。

郷愁

早朝、イリスは中庭で花を見ていた。

淡い瑠璃色の花卉を持つユーリスの花。

風に吹かれ花びらが散っていくのが儚く見えた。

「イリス」

呼び掛けられ、ゆっくりと振り返ると其処にはヴァルガス兄弟が立っていた。

「大丈夫なのか？フェリ、ロヴィ」

「うん」

「俺も何とか大丈夫だ」

そっか、とイリスは呟くと花を見つめた。

ユーリスの花やサファイアブルーの花卉を持つシルフィアの花が咲く中庭の光景は、海原を思わせた。

一陣の風が強く吹き、青い花卉と瑠璃色の花卉は大きく蒼空を舞い、大空へと消えていった。

「…私達が神の子だなんて、まだ実感が沸かないんだよな…」
思わずイリスは言葉を零した。

すると、フェリシアーノとロヴィーノはイリスの隣に座った。

「俺達もだよ。しかも、サクリファイスの悲劇ん時にお袋の腹ん中居たなんての実感もねーしな。でも、あのクソ親父が本当の親父じゃなくて良かったぜ」

「そうだね、兄ちゃん。でも…」

フェリシアーノは近くに咲いていたリランの花に触れる。

「私達は何で神の子として産まれたんだろう…か？」

イリスの言葉にフェリシアーノは頷く。

「確かに私達が神の子として産まれていなければ運命は変わっていただかもしれない…。けど、魔王を退けた力を母さん達に与えなければ、世界は完全な破壊の道を歩いていた…」

イリスは宙を漂っていたユーリスの花弁を掴み取る。

花弁の色が移ったらしく、掌と指先は瑠璃色に染まった。

「私達が神の子として、此の世界に生まれ落ちたのには何らかの理由があるはず…」

「イリス…」

途端、強い風が吹き荒れる。

同時にイリスの髪の色が碧から白銀に、瞳の色も深紅に変わった。

「刹那の平和でもいい…。誰もが安心して暮らせる世界になるといいな…」

微かに微笑む彼女の表情には小さな愁いが混じっていた。

煉獄の都・琉聖の遺跡

秋風に吹かれながらイリスとフェリシアーノ、ロヴィーノは中庭で花を眺めていた。

ふと、感じる風がおかしいのに気づき、イリスは立ち上がった。

「イリス！フェリシアーノ、ロヴィーノ！」

同時に、慌てた様子でローザが駆け寄ってきた。

「ローザ、どうした？」

ローザの様子が張り詰めているのに気づき、イリスは表情を引き締める。

「シアトルが焰神の聖域に現れたわ！それで、かなめがシアトルと決着をつけに聖域に行ったの！」

彼女の言葉に一気に戦慄が走る。

「たった1人で！？」

「うん…。かなめ、『彼奴は俺が倒す』って言って1人で言ったの」
ローザは俯きながら語る。

「あんずの仇をとりにつたのか…。けど、場所が悪すぎる」
顔を歪めながらイリスは呟く。

シアトルは精霊を操る魔法剣士だ。

焰神の聖域がある琉聖の遺跡は焰の守護竜ジークフリートが封印されている場所。

炎の精霊であるサラムンダーもいる。

かなめ1人では返り討ちにあってしまうと、イリスは思った。

「ローザ。私とフェリシアーノ、ロヴィーノの3人は煉獄の都に行く。だけど、この事は母さん達には黙ってて」

「え…」

「私達なら大丈夫。だからローザ達は城で待ってて」

ローザは戸惑った表情になるが、頷くと城に向かった。

「フェリ、ロヴィー」

イリスはヴァルガス兄弟に向き合っていると、兄弟は小さく笑っていた。

「なもん判ってるぜ、イリス」

「うん。俺もシアトルと決着をつけないとね」

3人は頷きあうと、馬屋に向かった。

馬屋につくと、イリスは誰も居ないことを確認し、愛馬である白い毛並みの馬と、二頭の黒い毛並みの馬に馬具を着け、こっそりと人気がない場所に連れ出す。

「リエル、シエル、ユエリア、頼むよ」

イリスはそう言うのと、白い毛並みの馬リエルに跨る。

フェリシアーノは黒い毛並みの馬シエル、ロヴィーノはシエルとよく似た黒い毛並みの馬ユエリアに跨り、駆け出したイリスの後を追いかけた。

一方、イリス達3人が煉獄の都に向かおうとしている時、特殊部隊全員は机に置かれた擬似空間を生み出すクリスタル―ホログラム・ストーンを囲んでいた。

「…水神の聖域と風神の聖域に画かれた壁画、守護竜の揺りかごであるクリスタルの周りに画かれた紋様…繋がったわ」

バチュリーは紙に描いた紋様を繋げると仲間全員に見せる。

「後は、焰神の聖域と地神の聖域に画かれた壁画と紋様だけだな」
ルートヴィッヒの言葉にレミリアは頷く。

「そうね。これが判ればイリス達に眠る『力』が何なのかが判る…」
「あ！」

突然、窓辺に寄っていたチルノが大きな声を出した。

「チルノ、どうしたの？」

「イリス達がどっか行くみたい。リエルとシエル、ユエリアに跨って」

チルノがそう言ったのと同時にローザが部屋に入ってきた。

「ローザ。イリス達が何処に行ったか判るか？」

「え…？」

ヒイロの質問にローザは答えようか戸惑ったが、イリス達が焰神の聖域がある琉聖の遺跡に向かった事を言った。

「…やっぱりか」

デュオは呆れたように呟く。

イリス達が琉聖の遺跡に向かった事を、既に彼等は知っていたのだ。

「シアトルとの決着をつけに行ったかなめの後を追いかけたんだろ？」

「ええ。でも、フローラ様達には話すなって言われてるわ」

「判ってるよ。何も言わないから」

キラの言葉にローザは安心すると、煉獄の都がある方角を見据えた。

——煉獄の都は活火山であるエルツイオーネ火山の麓にある、風采の都と水爛の都、地霊の都と並ぶ古代都市だ。

硫黄の匂いがするが、火山に咲くアデイスの花のお陰でそんなに匂いはきつくはなかった。

3頭の馬を安全な場所に繋げると、イリス達は琉聖の遺跡に入った。琉聖の遺跡はエルツイオーネ火山の内部にある。

炎系の魔物と対峙すると同時に、彼方此方に存在するダメージトラップを回避しながら先に進んだ。

中間地点である精霊華の聖域につくと、かなり匂った筈の硫黄の匂いは消え、澄んだ空気が肺を満たす。

「精霊華に宿る浄化能力のお陰だな…」

イリスは呟くと、床にへたり込んだ。

溶岩を身にまとった魔物の攻撃を喰らった為、右腕は火傷を負って

いた。

火傷を見たロヴィーノは羽織っている上着の一部を破いて包帯を作り、イリスに近寄る。

「じっとしてろよ」

そう言うのと、火傷の箇所には包帯を巻いていった。

「ありがとな、ロヴィ」

「お前には借りがあるからな。ちゃんと借りは返したぜ」

「はいはい」

イリスは苦笑すると、フェリシアーノを見据える。

「フェリ、怪我はない？」

「うん。大丈夫」

「大丈夫なワケねーだろ。右手で隠してる場所、火傷してんだろ」
フェリシアーノは虚を突かれ、あはは、と軽く笑う。

ロヴィーノは溜息をつくと上着の一部を破き、包帯を作る。
そして、フェリシアーノが押さえていた箇所には巻いていった。

「兄ちゃん、ありがとう」

「しかし、怪我してるって、よく見破ったな」

イリスが感心したように言うと、ロヴィーノは再び溜息をついた。

「…お前が教えたんだろぅが…」

「そだっけ？ 忘れたわ」

「…教えた本人が忘れるのか、普通!？」

「私は覚えてない」

「忘れるなあああああつ!!」

精霊華の聖域にはロヴィーノのツツコミの叫びが響き渡った。

ロヴィーノの覚醒・守護焰竜の華と水焰風の水晶

休憩を終えたイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノの3人は精霊華の聖域を後にし、焰神の聖域へと向かった。

その時、イリスは硫黄臭に混じって鉄の匂いを感じ取った。

「…鉄の匂いが硫黄臭に混じってる…」

「イリス…精霊達がいらないよ」

フェリシアーノは周りを見回しながら呟く。

琉聖の遺跡には守護精霊である焰の精霊サラマンダーがいる。

サラマンダーの姿が見当たらないのにフェリシアーノは気付いた。

「…かなめとシアトルの魔力を感じる…。きっと焰神の聖域にいる」

「急ぐぞ、イリス、フェリシアーノ」

ロヴィーノの言葉にイリスとフェリシアーノは頷くと、通路を駆け抜けた。

——紅い色彩の、巨大なクリスタルが安置された焰神の聖域に辿り着くと、其処でシアトルとかなめが戦っていた。

同時に焰の守護竜ジークフリートが目覚め、暴走を始めていた。

「かなめ！」

名を呼ぶ声に気付いたかなめはシアトルと刃を交えながらイリス達を見据えた。

「イリス！？それに、ロヴィーノとフェリシアーノ！？」

「ほう…フェリシアーノ様が来られるとは…」

シアトルは呟くと刃を弾き返し、イリス達との距離を縮める。

イリスは素早く動き、フェリシアーノの前に立つと、フランヴェルジュとフラガラッハを鞘から引き抜き、シアトルが構える魔剣・ダークスレイヴの刃を二振りの刃で受け止めた。

ガキン、と音と同時に火花が散る。

「邪魔はしないでください。イリスアリア姫」

「いい加減、目を覚ませ！シアトル！」

イリスは刃を大きく、ダークスレイヴの刃を振り払うと体勢を立て直す。

フェリシアーノもロンギヌスの槍を構えると、何時でも詠唱出来るようにと備える。

ロヴィーノは聖剣・バルムンクと聖銃・フェザーショットを構えた。
『グオオオオオオオオオオッ!!』

ジークフリートは雄叫びをあげると、辺りにいた精霊を取り込んだ。

「かなめ！一旦退け！」

イリスはシールドを張るとかなめに呼びかけるが、かなめは退かなかった。

「俺はシアトルを…姉さんの仇をとるまで退かない！」

「違う！あずさを殺したのはシアトルじゃない！」

訴えるようにイリスは叫ぶ。

だが、復讐に燃えたかなめにイリスの言葉は届かなかった。

「止めろ、かなめ！」

「はああああっ!!！」

かなめは一気にシアトルとの距離を縮めると、バルムンクを振り下ろし攻撃する。

が、刃は弾かれ、シアトルが放った魔術をまともに喰らった。

「う、あ、っ!!！」

強力な攻撃を受けたかなめは壁に強く当たり、床に叩きつけられる。

「かなめっ！」

ロヴィーノは跳躍をつけ、かなめの元へと駆け寄った。

かなめの右腕と額からは紅い血が流れている。

「くそっ！」

立ち上がろうとするかなめをロヴィーノは制する。

「動くな！傷に障るぞ！」

「触るな！僕は：俺は姉さんの：！」

「っ：！馬鹿野郎！」

怒りの緒が切れたロヴィーノはかなめの頬を殴った。

「復讐に自我を蝕まれるな！シアトルを殺して、お前の姉ちゃんが生き返るのかよ！？」

「！！」

はっとしたかなめはロヴィーノを見据える。

「死んだ人間は生き返らねえが、輪廻は繰り返す。それは自然の摂理であり理だって、サクラから聞いたろ」

「輪廻：」

「復讐なんてするな。あずさが悲しむぜ」

ロヴィーノの言葉にかなめは一筋の涙を零した。

「：とんだ茶番ですね：ロヴィーノ・ヴァルガス」

シアトルはそう言うのと、ダークスレイヴを床に突き刺す。

「復讐するのは、その人の勝手でしょう。彼の復讐心を止めたって、何も変わりませんよ」

嘲笑うシアトルを、ロヴィーノは鋭く睨みつけた。

「茶番だろうが：変わらないとか何だろうが：んなもん関係ねえ！」
ロヴィーノは立ち上がると、バルムンクの刃をシアトルに向ける。

「確かに復讐するのは自身の勝手だ。けどな、復讐をしたって何も変わらねえって判った！死人が生き返るワケもねえ復讐なんぞ、ただの憂さ晴らしに過ぎねえってのもな！それを、仲間が教えてくれた！」

その時、イリスはロヴィーノから『力』が放たれるのを感じた。

「俺達は進まなきゃならねえ！世界を守る為に！」

力強くロヴィーノは叫ぶ。

と同時に、強い光が聖域を包んだ。

光が消えると、ロヴィーノの装備が変わっていた。

ボロボロになっていた上着は、翼を模した小さな銀の装飾が施され

たミスリル製の上着に変わり、籠手はクリスタルをあしらったリング、ブーツも小さな翼の装飾が施された青いブーツに変わっていた。「兄ちゃんの…装備が変わった!?」

フェリシアーノは驚きを隠せなかった。

「あれは…竜の力を継承する満月の神子専用の装備。覚醒したのか」イリスは複雑な表情に変わるが、すぐに顔を引き締めた。

「ロヴィー！水竜と風竜の力を使え！私とフェリがバックアップする！」

「判った！」

「フェリ、いくよ！」

「うん！」

ロヴィーノは負傷したかなめの周囲に結界を張ると、バルムンクに力を溜める。

「流れゆく、清き水…巡りゆく、浄き風…今ここに、力を解き放て！」

イリスとフェリシアーノは水聖の華、風聖の華の力を解放させる。力の解放と同時にバルムンクの刃が光り出す。

「フェリ！」

「うん！」

イリスとフェリシアーノは古の歌を謳い始めた。

「流れ巡る風と水を司りし竜よ…我が声に答え、神子の歌声と共に道を示せ！」

ロヴィーノは詠唱と共に剣を地に突き刺すと同時に、クリスタルが安置された祭壇に画かれた紋様が光り出した。

歌声に呼応するかのように強弱をつけ光る紋様。

途端、クリスタルの周囲に深紅の花が咲き乱れ、かなめの傷も癒えた。

「傷が…」

呆然としたかなめは3人の神子を見据えた。

そして、ジークフリートの暴走が収まり、取り込まれていた精霊が

解き放たれる。

『俺は：一体：』

ジークフリートは辺りを見渡すと同時に、バハムートとリヴァイアサンが姿を現した。

『バハムート、リヴァイアサンか！？』

驚きを隠せないジークフリートとは対称的に、リヴァイアサンは落ち着いていた。

『暴走が収まったんだな、ジークフリート』

リヴァイアサンの言葉にジークフリートは頷く。

『良かった：これで自浄の力が大半戻りました』

バハムートは嬉しそうに語った。

ジークフリートはイリス達に視線を移す。

『創星の神子・イリスアリア、臨星の神子・フェリシアーノ。そして、竜星の神子・ロヴィーノ：。助けてくれて感謝する』

「いえ、神子として、世界の異変を見過ごす訳にはいきませんから」イリスがそう言うと、ジークフリートは小さく笑う。

そして、2輪の紅い華をイリスとフェリシアーノに渡した。

『それは『焰聖の華』。役に立ててくれ。そしてロヴィーノ。竜星の神子であるそなたにこれを』

ジークフリートは紅いクリスタル、バハムートは翠のクリスタル、リヴァイアサンは蒼いクリスタルをロヴィーノに渡した。

『それらは『焰竜の水晶』、『風竜の水晶』、『水竜の水晶』。竜星の神子に与えられる、華のようなものだ』

『お役に立ててくださいね』

リヴァイアサンとバハムートはそう言うと姿を消した。

『そろそろ俺も眠ろう…。神子よ、世界を頼んだぞ』

ジークフリートは小さく笑いながら言うと、クリスタルに入り、眠りについた。

イリス達はシアトルを見据える。

彼は片膝をつき、苦しげに呼吸をしていた。

かなめはゆつくりと彼に近寄る。

「旭…かなめ」

「シアトル…」

幼馴染を呼ぶ声に、怒りはなかった。

「帰ろうよ…俺達の場所に…」

かなめが手を差し伸べたその時。

「う…うわああああっ！！」

シアトルが絶叫をあげ、気を失い倒れ込むと同時に、黒い靄が彼の体から飛び出る。

それはイリス達を襲おうとしたが、ジークフリートが眠る深紅のクリスタルが赤く輝きだし、空間を浄化し、靄を消した。

倒れたシアトルは気がつく、辺りを見渡す。

「…僕は…なに…を…？」

「シアトル…やっぱり操られていたんだ…」

イリスの言葉にシアトルは何かを思い出したらしく、暗い表情のまま俯く。

「…イリス様…申し訳ありませんでした…。私がいたらなかったばかりに…私は…あずさを…」

「気にするな。シアトルは悪くない」

小さく笑うイリスにシアトルは戸惑う。

と、かなめが彼の肩を軽く叩いた。

「かなめ…。僕…あずさ…ノーチェ姉ちゃんを…殺し…」

「…お前は悪くないよ。帰ろう…シアトル」

差しのばされた手に、シアトルは自分の手を重ねた。

イリス達は焰神の聖域を後にすると、馬に跨り城に戻った。

巫女とクレスト（前書き）

によたぷー登場します（笑）

巫女とクレスト

城に戻ったイリス達を待っていたのは、特殊部隊のメンバーと、フローラ達だ。

シアトルは恐る恐るフローラの前に出る。

すると、フローラはそつと、彼を抱きしめた。

「よく、戻ってきてくれましたね…シアトル・ベイリーフ」

「フローラ…様…」

「貴方は何も悪くありません…。自分を責めてはなりませんよ」

その言葉にシアトルは思わず涙を流した。

ふと、イリスは背後から感じた気配に振り返ると、其処には長い銀髪の赤い瞳、ギルベルトとよく似たふいんきの女性が立っていた。

「…!?」

「久しぶりだな、イリス」

ユールヒェンの声に、ギルベルトとルートヴィッヒは振り返ると、驚きを隠せなかった。

「姉貴!？」

「姉さん!？」

「よっ! ギル、ルーヴィ。随分身長が伸びたんじゃねえの?」

からかうようにユールヒェンが言うと、突然ルーミアが彼女に抱きついた。

「うおっ! どうした、ルーミア?」

「おかえり、ユール! アリス達はまだ帰ってきてないの?」

「帰っては来ているが、後から来る。随分デカい荷物があるからな。それと、ただいま」

ユールヒェンは少し乱れたルーミアの金色の髪をを手櫛で、優しく梳いた。

そして、フローラに向き合うと居住まいを正す。

「フローラ様、ユールヒェン・バイルシュミット、ただいま戻りま

した」

「お疲れさまです、ユールヒェン。ごめんなさいね。立て続けに水の国と光の国に向かわせてしまつて」

彼女の言葉にユールヒェンは首を横に振る。

「いえ、大丈夫です」

ユールヒェンの言葉にフローラは、「ごめんなさい」と云つた表情になる。

だが、すぐに表情を引き締めた。

「…光の国と水の国はどのような状況でしたか？」

「二国も魔導の影響を受けていました。光の国では『ユレイネスの水晶』の採掘に影響が、水の国では『エフィエールの水花』が咲かないようです」

「…そうですか」

フローラは目を伏せる。

「あれは、魔王が生み出した殺戮兵器と、言うべきです。あれが放つ魔力は…人の心を操ります」

背後にある入り口から聞こえる少女の声。

イリス達が振り返ると、其処には1人の女性と5人の少女がいた。

「…鍵山雛、河城にとり、アリス・マーガトロイド、村紗水蜜、八雲藍、聖白蓮か」

ヒイロはじつと謁見の間に現れた6人を見据えながら呟く。

「私と橙もいるけど？」

「うわっ!？」

イリスの背後の空間に開いた目のような形の、両端に赤いリボンがついている隙間から現れた2人の少女・八雲紫と、藍に仕える式の少女・橙に驚く。

「紫、橙…驚かさすなよ…。魔理沙と小町、妹紅、輝夜の悪戯よりたちが悪いぞ…。あとで四季映姫に叱ってもら…」

「いや。ヤマザナドウの説教は長いから」

「……………」

笑顔で語る紫の言葉に、イリスは自分の頬が引きつるのを感じた。

――イリス達はユールヒエン達が持ってきた荷物を見に行き、驚きを隠せなかった。

光の国女王フォス、水の国女王ネロが贈ったモノとは、ユレイネスの水晶とエフィエールの水花。

そして、ルークスの結晶がはめ込まれたクレストと、アクアの結晶がはめ込まれたクレストだった。

「デカイ荷物って：これらの事か？」

「ああ」

イリスの言葉にユールヒエンは頷く。

「確かに『大きな荷物』ですね。ルークス・クレストは光の国の国宝、アクア・クレストは水の国の国宝に等しい代物ですから」

フローラは2つのクレストを手にながら呟く。

純白の結晶と蒼白の結晶がはめ込まれたクレストは仄かな光を放っていた。

「どうして、二国は国宝に等しい代物を？」

疑問に感じたレミリアが訊ねる。

「竜の力を継承する神の子が覚醒したって、女王達は言ってたの」
雖は呟くように語る。

「ロヴィーノが覚醒したから？何で？」

「国の女王は神の子の波動に疎いの。覚醒すると、その覚醒した神の子の波動を感じ取るのよ」

「だからクレストを私達に？」

訊ねたフランドールに白蓮は頷く。

「ネロ様は『水の巫女』、フォス様は『光の巫女』だからね」

村紗が頭をかきながら語ると、フローラは頷いた。

この世界では、国の女王は特殊な力を持った『巫女』と云う存在。

『巫女』はエレメントや聖霊に接触する事が出来る為『神子』の波動を感じ取れる。

因みにイリスやフェリシアノ、ロヴィーノの3人：一般的に『神の子』とも呼ばれている『神子』は世界に直接的な接触が出来る他、エレメントや聖霊にも接触が可能だ。

巫女の呼び名は国の名によって名称が違う。

華の国女王フローラは心を奉る『華の巫女』

陽炎の国女王リラは蜃気楼を奉る『陽炎の巫女』

風の国女王アリアは恵を奉る『風の巫女』

水の国女王ネロは安らぎを奉る『水の巫女』

雨の国女王リースは潤いを奉る『雨の巫女』

光の国女王フォスは秩序を奉る『光の巫女』

闇の国女王ルシアは混沌を奉る『闇の巫女』

霧の国女王レティーツィアは幻を奉る『霧の巫女』

海の国女王マリンは水を奉る『海の巫女』

雪の国女王スノウは大地を奉る『雪の巫女』

蒼天の国女王マリアージュは魂を奉る『蒼天の巫女』

焰の国女王フレアは感情を奉る『焰の巫女』

そして、ロヴィーノとフェリシアノの母親、夕風の国女王リーフイアは豊穡を奉る『夕風の巫女』国の巫女は神子へ力添えする他に、それぞれの力を使い国を守っていく存在でもあった。

と、フローラはスカートのポケットから虹色に光る結晶がはめ込まれたクレストと、淡い橙色に光る結晶がはめ込まれたクレストを取り出した。

「母さん、それは…」

イリスはじつと母が持っているクレストを静かに見据える。

「アルクスの結晶がはめ込まれたクレストよ。華の国の国宝でもあるの。こっちはトランクイリタースの結晶がはめ込まれたクレスト。夕風の国の国宝でもあるの。リーフィアが貴方達に渡すようにと、

言っていたわ」

そう語り、フローラは優しくクレストを撫でると、イリスに4つのクレストを渡した。

「貴方達に渡します。これは神の子に渡す神器でもあるのですから」
「…神器…」

小さく呟くとフェリシアアノはトランクイリタース・クレストをじっと見据えた。

茶会（前書き）

今回は東方キャラが多いよ。

茶会

城から帰宅したイリス達は、リビングで花茶を飲みイリスが作った菓子を摘みながらくつろいでいた。

テーブルの上には花茶やハーブティーが入ったティーポットがそれぞれ絵柄ごとに分けて置かれていた。

「咲夜。ルノアールの花茶おかわりはいただけるかしら？」

「かしこまりました」

イリスの家に来ていた咲夜はルノアールの花茶が入っている桜の花が画かれた陶磁器のティーポットを持つと、レミリアの目の前に置かれた同じ絵柄のティーカップに花茶を注いだ。

「…どう考えたってメイドだな」

「咲夜は私達のお母様の家に仕えていたメイド長の娘だからね。咲夜、メイドに関する事柄は全てお母様に教わっていたみたい」

「へー…、咲夜ってスカーレット家に仕えていたメイド長の娘なんだ」

イリスはフィラの花茶、フランドールはジャーマンカモミールのハーブティーを飲みながら話をした。

「フェリエのアイスティどこ？」

「チルノ、冷たいフェリエの花茶なら目の前にあるわよ」

冷たくしたフェリエの花茶が入ったティーポットを探しているチルノに、パチュリーはその花茶の入ったティーポットを示す。

「むぐむぐ…雛、其処にあるお菓子…むぐ…取って…」

「にとり…キュウリ食べながらお菓子食べるの止めて」

胡瓜を食べながら話すにとりに、雛は顔についた胡瓜の欠片を払いながら突っ込む。

「仕方ないよ、雛。にとりは河童なんだから」

村紗はエリシルの花茶を飲みながら言うと、胡瓜を頬張りながら菓子を食す水色の髪に緑の帽子をかぶった少女を見据える。

「でも…本当に止めてほしいわ、にとり」

白蓮は苦笑を浮かべながら呟く。

「藍さま、お菓子どうぞ!」

「はう…橙、可愛い…」

藍はほわほわとした顔になりながら、橙から受け取った菓子を頬張る。

「…藍…羨ましいわ…」

隙間から現れた紫はじつと2人を見ながら呟く。

「イリス、ドレンチェリーのタルトをとってもらえる?」

「はい、どうぞ」

イリスは切り分けたタルトをアリスに渡す。

「そう言えば、輝夜、妹紅。永琳はどうした?」

「永琳なら、キリクに効く霊薬が他にあるかどうか調べているわ」

「まっ、薬剤師として気になるんだろうな」

魔理沙の質問に輝夜は答えると、その答えに妹紅は付け足しながらハーブティーを飲む。

「そろそろ冬が来るわね」

「そうですね」

窓際の席でレイフィルの花茶を飲みながら外を見据える幽々子と四季映姫は呟く。

「ルーミア、蜜柑取ってくれる?」

「あ、うん」

ルーミアは霊夢に蜜柑を渡すと、苺デニッシュを口にする。

「幽々子さま、四季映姫さま。お茶のおかわりはいかがですか?」

妖夢はティーポットを持ちながら幽々子と四季映姫に訊ねる。

「メルラン、リリカ。服汚れるわよ」

「わかってるよ、ルナサ」

「むぐむぐ…イリス、チョコデニッシュちょうだい」

「話はちゃんと聞きなさい、リリカ」

ルナサは末っ子のリリカを叱ると、アップルパイを食べる。

その様子を見、苦笑を浮かべたメルランはなににもいわずユリシアの花茶を飲む。

「イリス、あたいの鎌知らない？」

「小町、あんたまた鎌無くしたのか!？」

自身の武器を紛失した小町にイリスが突っ込むと、四季映姫は小さく溜息をついた。

「小町、また新しく鎌が渡されるまで、これで我慢しなさい」

そう言うと四季映姫は小町に長ネギを渡す。

「はぁーい…。わかりました、四季映姫さま」

「いや、その前に何で鎌の変わりが長ネギかを突っ込め!!」

長ネギを受け取った小町にイリスは突っ込む。

「…なんか、話にくいね、兄ちゃん」

「…そうだな…」

置いてきぼり気味のフェリシアーノとロヴィーノはティーカップを持ちながら、話をしている女子を見据える。

少し日が傾いた頃、パチュリーは決意したように本をパタンと閉じるとイリスを見据える。

「…イリス」

「ん？何、パチュリー」

パチュリーに呼ばれたイリスは振り返る。

「神の子について、少し分かった事があるの」

「神の子（私達）について？」

コクンとパチュリーは頷くと唇を動かす。

「人の母体に宿った神の子は、様々な性質を持って産まれてくるわ。聖者が宙に浮かぶ事や何もないところから食物を出す話は知ってるわよね。それらは神の子として生まれた者が持っている性質の1つなの」

イリスは黙ってパチュリーの話を聞く。

「他にも死人を生き返らせた事とか、水を操る事とか特殊な性質は色々あるわ。けれど、イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノの性質はかなり特殊過ぎるの」

「どういう事なの？」

不安げにフェリシアーノは訊ねる。

「よくわからないわ。でも3人に宿る力が『特異な性質』であるのは確かね。自身の母体である巫女に力を与え、魔王を退けた程の膨大な力を持った神の子は『今まで存在しなかった』のよ」
パチュリーの話に3人は視界が黒く染まっていき、足が地に着いていないような感覚に襲われた。

夢現の状態になりかけたイリスは、頭を左右に振る。

碧い髪が少し靡く。

「…つまり私達は魔王を凌駕する力を持っている…か？」

「いいえ…3人に宿る力は魔王だけでなく、神をも凌駕する程の力でもあるの。でも、まだ力の封印は解放仕切れていない。今のイリス達3人の力だと、魔王に従っている四天王くらいなら退けられるわ」

その言葉に3人は何を言い返せば良いか悩んだ。

「いや、何て言えば良いか分からなかった、と言った方が正しいだろう。」

特殊過ぎた力が自分自身の内に宿っているという真実に、3人は戸惑いと焦燥を隠せなかった。

「封印は守護竜の暴走を解く事と、竜神の華、竜神の水晶を集める事によって大半が解放されるわ。真の力を解放する為には、己に宿る力の意味と名の意味を知ることが大切よ」

「…意味」

フェリシアーノは小さく呟く。

「まるで、古の歌みたいだな…」

小さく呟き、ティーカップに注がれた冷めたティエの花茶の紅色の

色彩の水面を見つめるロヴィーノ。

「…そうだな…。けど、歌とは違い、複雑な意味を有しているけどな…」

哀しげに笑いながら語るイリスは、ティーカップに注がれた冷め切ったルノアールの花茶を一気に飲み干す。

開け放たれた窓からはオレンジ色の夕陽が差し込み、秋風が花卉と紅葉を乗せながら空を舞い、小鳥の囀りが儚げに響き渡った。

設定6（前書き）

追加キャラ：東方キャラが多いです。

設定6

【追加キャラ】

・ユールヒエン・バイルシュミット

雨の国出身の聖騎士で、ギルベルトとルートヴィッヒの姉。
細かい事は気にしない性分。

エリザベータとは親友。

闇と氷の魔法を扱える。

・河城にとり

水の国出身の少女。

河童の一族の長の娘で、ヒトの姿をしている。

雛とは親友。

弾幕と水の魔法を扱える。

・鍵山雛

闇の国出身の少女で、にとりの親友。

運がかなり悪く、にとりが食べている胡瓜の欠片が顔に飛ぶなどの不幸に見舞われる事が多いが、ルカが作成した御守りのお陰で不幸は少し免れている。

弾幕と闇の魔法を扱える。

・聖白蓮

陽炎の国出身の魔女。

ふわふわとつかみ所がない性格だが、魔法ではかなりの成績を残している。

弾幕と全ての魔法を扱える。

・村紗水蜜

海の国出身の少女で、船乗り。

夕凧の国が母国に侵攻した時、セーシエル、刹那と共に国を脱出した。

弾幕と水の魔法を扱える。

・アリス・マーガトロイド

陽炎の国出身の魔法使いの少女。

人形を操る人形師でもあり、沢山の人形を従えている。
弾幕と全ての魔法を扱える。

・八雲紫

蒼天の国出身の少女。

隙間を使った空間移動の能力を持っている。

弾幕と闇の魔法を扱える。

・八雲藍

蒼天の国出身の少女。

紫と同じ姓だが、血のつながりはない。

式神使いでもあり、式の1人である橙を可愛がっている。

弾幕と闇の魔法を扱える。

・橙

藍に仕える式神の少女。

ふわふわとした性格で、イリスの作る料理と菓子が好き。

弾幕と闇の魔法を扱える。

・十六夜咲夜

華の国出身の女性。

フランドールとレミリアの母親の生家に仕えていたメイド長の娘。

弾幕と風の魔法を扱える。

・魂魄妖夢

華の国出身の少女。

霊魂の都で守護者としていたが、イリス達の力になるため現実世界に戻った。

魔法が扱えない代わりに様々な剣術を扱える。

弾幕を扱える。

・蓬莱山輝夜

蒼天の国出身の少女。

妹紅とは犬猿の仲でよく喧嘩している。

弾幕と光の魔法を扱える。

・藤原妹紅

蒼天の国出身の少女。

輝夜とは犬猿の仲でよく喧嘩している。

悪戯好きで、毎回イリスに叱られる。

弾幕と炎の魔法を扱える。

・八意永琳

華の国出身の女性。
薬剤師でもあり、昼夜、霊薬の研究をしている。
弾幕を扱える。

・小野塚小町

闇の国出身の少女。
四季映姫の護衛として華の国に来た。
瞬間移動の能力を持っている。
よく自分の武器である鎌を無くす。
弾幕と闇の魔法を扱える。

・四季映姫・ヤマザナドゥ

闇の国出身の少女。
華の国で起こっている異変を調べるために、部下である小町と共に
来た。
弾幕と闇の魔法を扱える。

・紅美鈴

霧の国出身の少女。
格闘家でよく神楽と手合わせをしている。

立ったまま眠れる。
弾幕を扱える。

・ニール・ディランディ

風の国出身の男性。
スナイパーで、銃の腕はかなり凄い。
陽気な性格だが、任務には忠実。
風の魔法を扱える。

・ライル・ディランディ

風の国出身の男性で、ニールとは双子の兄弟。
兄と同じスナイパーだが、腕はニールより少し下。
風の魔法を扱える。

・アレルヤ・ハプティズム

光の国出身の青年。
気弱な性格だが、芯はしっかりしている。
よくフランドールや兄のハレルヤにからかわれている。
光の魔法を扱える。

・ハレルヤ・ハプティズム

光の国出身の青年で、アレルヤの双子の兄。

性格は弟とは正反対だが、根は優しい。

フランドールと共に弟のアレルヤをからかっている。

闇の魔法を扱える。

・シアトル・ベイリーフ

華の国出身の少年。

夕風の国の密偵をしている最中に、魔王によって操られた。

操られていた時、自らを『シアトルⅡクロア・メイティック』と名乗った。

今は、かなめのお陰で正気に戻り、元の部隊に復帰している。

全ての魔法と精霊魔法を扱える。

過去と無くした花の種（前書き）

イリス 「…はあ…」

…どうやらイリスは何かを紛失したようです。

イリス 「あれ…何処に落としたんだっけ…」

おーい…暗いぞ、イリス。

過去と無くした花の種

真夜中、イリスは自宅の屋根に登り、蒼空に浮かぶ白銀に輝く満月を眺めていた。

ぼんやりと朧がかった月の周りにかかる薄雲は、月明かりの加減で紫や淡い紅色の色になり、綺麗な色彩をしていた。

「…儚い願いは…風に解ける…届かない世界へ祈りを捧げるのは…対の光…」

小さく歌を口ずさむと、イリスの脳裏に今は亡き2人の親友と父親が姿を掠めた。

「…サクラ…フェイ…父さん…」

名を呟くと、上着のポケットに入っていた金のペンダントを取り出す。

月明かりを反射し、月と同じ白銀に光り輝くそれに刻まれた名は、ヴァルガス兄弟と血のつながった、今は亡き姉の名前。

「初めてロヴィと会った時、まさかフェイと血のつながった弟だとは思わなかったなあ…。ぜんっぜんフェイと似てなかったし」

小さく笑うとイリスはペンダントを再びポケットへとしまう。

と、一陣の風が木葉と紅葉、リリィの花弁を巻き上げて吹き荒れた。

「……………」

空を見上げると、鈍い光が一瞬だけ鋭い光を放ち、秋風と共にまわりついた薄雲を払いのける。

「そういや、母さんよく言ってたよな…。父さんは『我、風と共に去りぬ』といった感じの人だったって。いかにも自由奔放だったらしい父さんにピッタリの表現だな」

苦笑するイリスだったが、実のところ父の顔は覚えていない。

イリスの父・シオンは彼女が幼い頃、親友であった夕風王・レインと共に魔王と戦い、その戦いで命を落とした。

父親の性格が自由奔放だと知ったのはカシスが教えたからだ。

イリスは屋根の上に寝転がると、微かに動く雲を眺めた。

「イリス、此処に居たんだね」

「…フェリ」

起き上がって振り返ると、其処にはロヴィーノとフェリシアーノが寝間着の上に白い上着を羽織った姿で現れた。

「ロヴィーノか。2人共、眠れないのか？」

「うん…。夕方の話のせいで、全然眠れないんだ」

苦笑しながらフェリシアーノは呟く。

「以前生まれた神の子の奴らより強い力を持って生まれたなんて、信じられねえからな。寝付けねえんだ」

頭をかきながらロヴィーノは呟く。

「私もだ…」

小さな笑みを浮かべると、イリスは再び夜空に視線を向けた。

満天の星空では小さく光り輝く星が揺らめきながら光を放ち、満月と共に蒼黒い空を彩っていた。

「…不思議だな…。この空と時空、次元を隔ててイタリア達の世界があるなんて、わからないよな」

イリスは思わず呟く。

「他にどんな世界があるのかな？」

「そこまでは知らないけど…、もしかしたら、数え切れない数の世界があるのかもしれないな」

目を輝かせて語るフェリシアーノに、ロヴィーノは苦笑しながら言う。

「あっ、そう言えば…」

「何？どうしたの、イリス？」

キョトンとしたフェリシアーノとは裏腹に、イリスは苦虫を噛み潰したような表情だった。

「…前さ、日の光と水を与えるだけで育つように品種改良したエルシアの花の種が幾つか入ったケースをなくした記憶があるんだ…。育成してるときに奇跡的に生み出した種なんだ。探したんだけど、

結局、見つからなかったな…」

「つまり…紛失したんだ」

「…うん…。しかも広大な森の中で」

虚ろな表情で笑うイリス。

「広大な森の中って…其処で紛失したのか。絶対見つかるわけねえから」

微妙な表情になり、イリスに突っ込むロヴィーノ。

「うん…わかってんだ…。ケース自体翡翠を削って作ったやつだし、飾りもあるけど、琥珀と瑠璃を細かく砕いたやつをまぶしただけだから…」

「絶対見つからねえぞ、それ」

ロヴィーノは苦虫を噛み潰した表情になった。

フェリシアーノは苦笑を浮かべると、空を見上げた。

「そう言えば、イリス。エルシアの花って、どんな花なの？」

突然の質問に、イリスは唸る。

「様々な薬害に効く霊薬の素材になる花。品種改良したやつは蕾の時、イルフィアの花の香りと同じ、麝香とよく似た匂いを放つんだ」
そう答えると、フェリシアーノは「そうなんだ」と言うとき空を見上げた。

「…何処に行ったんだろう…エルシアの花の種を入れた翡翠のケース」

「諦めろ。また、新しく改良すればいいだろ」

「…出来れば苦労しねえよ…」

溜息をはきながらイリスは空を見上げた。

出撃

翌朝、支度を済ませるとイリス達は城に向かった。

城にある特殊部隊専用の会議室に向かうと、室内には部隊員全員が揃っていた。

「遅れてすまない」

イリスは何時もの白い軍服とは違う、蒼い軍服を身にまとっていた。碧の髪は白銀に、瞳の色も深紅に戻っていた。

長い髪は高くポニーテールに結わえ、服と同じ蒼いベレー帽を軽く乗せる程度にかぶっていた。

「いや、俺達も今来たところだ」

気にするな、とヒイロは言うと言元にある資料に視線を落とす。

イリスは微かに笑うがすぐに表情を引き締め、隊長席に座り、机に置かれている資料に目を移す。

「夕凧がまた侵攻を始めたのか。エリン、場所と現在の戦況は？」
イリスは近くにいる軍師の赤く長い髪を一つに結び、明るい空色の瞳を持った少女、エリン・グラシオラスに訊ねる。

「今度はユトウルア渓谷付近に出現したもよう。敵数は五万。既に第一、第二、第三部隊が出動しておりますが、敵は魔物を召喚しており、苦戦を強いられております」

「敵に召喚師がいるのか：厄介だな」

ルートヴィッヒは資料に視線を向けながら呟く。

確かに、とイリスは微かに思った。

戦闘相手に召喚師がいるとなると、彼等が召喚する魔物と戦うことになる。

だが、魔物は異世界から無差別に喚ばれ、長期戦を強いられる事が多い為、素早く対処するには先に召喚師を倒さなければならぬ。
今回はそんなパターンに陥っていた。

「…姫様」

心配した表情でエリンはイリスを見る。

「わかってる」

小さく呟くと、イリスは資料を机に置く。

「私達、特殊部隊もユトウルア溪谷に向かう、とフローラ様に伝えてくれ」

「かしこまりました」

エリンは一礼すると急ぎ足で部屋を出る。

「イリス」

レミリアは不安げにイリスを見据える。

「わかってる。なるべく早く戦いを終わらせよう」

イリスは安心させるように言うと、前を見据える。

「各小隊で遊撃、及び救護を行うように」

特殊部隊全員が頷くのを見ると、イリスはフェリシアーノに向き合う。

「：フェリ、気を抜くなよ。一瞬の気のゆるみがどんな結末に向かうか判らないからな。惑わされるな」

「わかった」

フェリシアーノは頷く。

彼の瞳は強い意思の光が宿り、まるで鋭い刃物の刃のように見えた。イリスは小さく微笑み、すぐに表情を引き締めると右腕を前に出す。

「：特殊部隊、出撃！」

「「了解！！」」」

神子と魔王

——ユトウルア渓谷は華の国と夕凧の国の国境線となっているレイシェル山脈の中央に位置している渓谷で、かつてオリジンの村があった場所でもあった。

今では村の名残を残し、葉草や霊草が辺りに生えていた。

そして、度重なる華の国と夕凧の国の間で起こっている戦争の戦場でもあった。

戦場に着いた途端、血と土が混じり合った強い匂いがイリス達の鼻腔をつく。

「イリス!？」

イリスに気付いたバッシュとエリザベータが驚いた声をあげる。

「バッシュ! エリザ！」

急な坂を一気に駆け下りたイリスは2人の元に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「ああ、我輩たちはなんとか大丈夫である。だが、数人の兵士が負傷を負った」

「何人か召喚師は倒したわ。けれど、まだ5人くらい倒し切れてないの」

「そうか…わかった」

イリスは頷くと親指と人差し指の輪を口にくわえ高らかに、途中何か所か鋭くし、指笛を吹き鳴らす。

と、ユトウルア渓谷に暮らしている精霊と妖精が姿を現した。

『イリスさま、いかがなさいましたか?』

妖精の1人がイリスに訊ねる。

「すまないが、召喚師の居場所を突き止めてくれるか？」

『かしこまりました』

妖精は一礼すると、精霊達と仲間の妖精を連れて姿を消した。

「よし、精霊達が召喚師の居場所を突き止めるまで、私達は前線で

被害を食い止めるぞ」

「わかった」

「フェリ、初陣だからって浮き足だけは立つなよ」

「イリスの意地悪」

からかうイリスにフェリシアーノは頬を膨らませたが、イリスの笑みの裏にある思惑を感じ取った。

「『戦は己の生と死をかけている』：でしょ？」

「ああ、そうだ。戦いは自分の命をかける。だから：『死ぬな』」
そう言うといリスは土煙が舞い上がる戦場を悲しげに見据えた。

イリス達特殊部隊が加わり、戦いは以前より熾烈を極めた。
何人か増援は来たが、それでも状況は苦しかった。

「咲夜、輝夜、妹紅はレミイ達の援護に回れ！永琳は救護班の手伝い！シアトル、フリージアはバッシュ達の援護！美鈴、四季映姫、小町はキラ達の援護に！」

イリスは手負いの魔物を退治しながらも指示を下す。

彼女の指示に従い、応援に来た者達はそれぞれの場所に行った。

「チツ：きりがねえぞ！」

デューオは夕風兵と魔物を倒しながら叫ぶ。

「イリス！あと2人、召喚師が残ってる！けど、居場所が分からないよ！」

フランドールは敵に弾幕を放ちながらイリスに叫びかける。

同時に妖精達が姿を現した。

『イリスさま！残り2人の召喚師の居場所は、目の前のリエルの大樹の影です！』

「ありがとう！」

イリスが礼を言うのと妖精達は姿を消した。

「：灯台もと暗しってよく言ったもんだ！」

そう叫びながらイリスはリエルの大樹に駆け寄り、其処を根城にしていた召喚師2人を一気に倒した。

「魔物の根元は断ち切った！兵も残り少ない！あと少しだ！」

「「おお！！」」

戦姫の声に華の国の兵士達は勇ましく雄叫びをあげた。

そして、イリス達は一気に残り少なくなった敵勢力を一掃し、此の戦いは華の国の勝利で終わった。

：筈だった。

「イリス！」

フェリシアーノの叫びと同時に強い力がイリスを襲う。

だが、予兆を感じ取っていたイリスは素早くかわし、フェリシアーノ達の元に戻る。

力の波動にロヴィーノは顔を怒りに歪めた。

「てめえは…」

「まさか、あなたも居たとのですね…魔王スファギ！」

背後から聞こえた華の国女王の声にイリスは一斉に武器を構えなおした。

「：久しいな、フローラ王女。いや、フローラ女王と、言うべきか」
嘲笑う言葉と同時に黒装束を身にまとった魔王が姿を現した。

「魔王！よくも…父様と母様を！姉ちゃんを！」

「父さんを…フェリとロヴィの両親を、フェイを…よくも殺したな！私は絶対に許さない！」

「親父、お袋、姉貴の仇…！てめえだけは絶対に許せねえ！」

フェリシアーノとイリス、ロヴィーノは怒りを露わにし、強く武器を握り締めて叫ぶ。

「ほう…厄の皇子が竜の神子とは…」

「黙れ！」

イリスは感情と魔力を抑えきれず、怒りを混ぜ合わせた揺らめくオ

ーラを放つ。

威圧に辺りの風や水、大地は小刻みに震えた。

「勝手にロヴィを厄だとか言い：挙げ句の果てには、尊い大切な命達を弄ぶ…。絶対に許さない…」

本気でイリスは怒っていた。

「俺も、絶対に許さない！大切な人達を傷付けるお前だけは！」

「俺もだ！イリスをフェリシアーノを贄として創られた世界なんぞ、まっぴら御免だ！」

フェリシアーノとロヴィーノは怒りを露わにしながら叫ぶ。

「行くよ、フェリ、ロヴィー！」

「うん！」

「ああ！」

イリス達が魔王に攻撃しようと身を構えたその時、フローラはすと3人の前に立った。

「母さん！？」

3人は驚きを隠せなかった。

「イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノ。憎しみだけでは魔王は倒せません。少し頭を冷やなさい」

「「……………」」

何も言い返せず、3人は黙り込む。

フローラはキラ達にイリス達を守るように指示すると魔王を見据える。

「消えなさい。此処は貴方が居てはならない場所です」

「ふん：忌々しい華の女神さえいなければ華の国なんぞ簡単に侵略出来た」

「消えなさい」

冷静にフローラは語る。

今イリス達がいる場所は華の国側である為、魔王は入ってはこれない。

例え、操り術をかけようとも華の国内では効果がなかった。

「ふっ…今は退いてやる。だが、何時かはお前の娘と夕風の女王の息子は抹殺してやる…。覚えておくんだな」

嘲笑う魔王は側近の四天王を従え、溪谷を出る道に入っていた。

静寂が訪れ、其処にいる全員は何らかの魔術がかかっていないか確認をした。

「イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノ」

フローラと呼ばれ、3人は彼女を見据える。

「真の意味を見つけないさい」

彼女はそれだけ言うと、特殊部隊以外の部隊と共に峡谷を出る。暫くして、イリス達も峡谷を出た。

街に戻ると、紅葉で埋め尽くされた石畳の街路が目映った。

「…そろそろ、リリィの花からネージュの花に移り変わるな…」

小さく眩くとイリスは冬の気配を少し漂わせている空を見上げた。

狂い歪む理（前書き）

…段々複雑になってきた。

イリス「それ、作者のせいじゃないのか？」

フェリ「そうだよね」

うう…容赦なさすぎ…

イリス「…容赦はしないけどな…」

狂い歪む理

夕風との戦いが終わり、イリス達はそれぞれの家でゆっくりしていた。

フローラ以外の、誰も思ってたなかった魔王との遭遇。

父親を失ったイリスと、両親と姉を失ったフェリシアーノとロヴィーノは憎しみにかられたが、彼女達の心をフローラは落ち着かせた。『憎しみだけでは魔王は倒せない』

その言葉に3人は何も言えなかった。

戦いが終わった後、パチュリーは「神の子と魔王について調べる」と言って図書館に閉じこもった。

イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノはフローラが言った「真の意味」について考えていた。

「真の意味：何だろうね、イリス、兄ちゃん」

「私も分からない」

「知るか」

イリスは花飾りを作りながら、ロヴィーノは武器の手入れをしながら答えた。

因みにフェリシアーノはイリスの手伝いをしていた。

3人はそれぞれの作業をしながらも、真の意味について考えていた。だが、考えれば考えるほど分からなくなっていた。

「何の事だろうな…」

思わずイリスは呟く。

「…イリス。アレットの花飾りって幾つ作るの？」

「？」

イリスは縫う手を止めてフェリシアーノを見据える。

既にテーブルには九十個のアレットの花飾りが置かれていた。

「…これを含めてあと十個。花飾りは百個必要だから」

「うわー…、気が遠くなりそう…」

「死ぬぞ、これ」

苦笑しながらイリスは作業を始めた。

既にイリスの両手は針を刺した傷が無数にあり、絆創膏が貼られていた。

裁縫をするのに邪魔だということで包帯は巻かなかったが、絆創膏のシール越しから見えるガーゼには赤い血が滲んでいた。

と、玄関の扉が叩かれる。

「あ、はい」

イリスは針と縫いかけの花飾りをテーブルに置くと、玄関に向かい扉を開く。

其処には刹那が立っていた。

「刹那、どうした？」

「パチュリーから、イリス達に伝えるように言われた。神の子と魔王について様々な文献を調べていたら、ある文献に奇妙な記述があったらしい」

「奇妙な記述？」

「パチュリーは首を傾げる。

「とりあえず中に入って」

イリスは刹那をリビングに案内すると、エリシアの花茶を淹れ、菓子皿にミアルの実を使ったクッキーを入れた。

あらかた片づけたテーブルの天板に花茶が入ったティーポットとティーカップ、クッキーが入った菓子皿を乗せると、花茶をティーカップに注ぐ。

「何でパチュリーが知らせに来ないの？」

疑問に感じたらしくフェリシアノが訊ねる。

「パチュリーはスイレンと同じで体が弱いんだ。花を調べる以外は図書館に居る」

「あ…。そう…。なんだ…」

フェリシアノは俯く。

彼の様子を見、イリスは苦笑を浮かべた。

「フエリが気にする事じゃないよ。それより、刹那。気になる記述って何だ？」

イリスの質問に刹那は頷くと、唇を動かす。

——それは此の世界が生まれた千年後の話。

此の世界は『天空の雫』と呼ばれる花の種が芽吹いた世界で、初めは何もない空っぽの世界だった。

空っぽの世界に神々は心を与え、星は沢山の命を生み出した。星の心が生み出した沢山の命達。

だが、沢山の命達から思いもしないモノが生まれてしまった。

正の心が募り募った世界である『天界』とは真逆の世界。

負の心が募り募った世界である『魔界』と云う世界。

魔界の命達は星の命達を脅かし続けた。

憎悪、嫉妬、焦燥、恐怖、嫌悪、激怒：様々な負の心の化身である魔の王は星の心を蝕み続けた。

神々は魔界を異空間に飛ばしたが、星の心は既に衰弱していた。

だが、星は最期の力で世界創造の鍵を産み出し、新たな理ことわりを創りだし、自らの体を新しく創り直した。

体を新しく創り直した星は予言の神子を2人産み出し、世界創造の鍵を光と知に分け、神子の片割れには光の予言の力、もう1人の神子の片割れには知の予言の力を与えた。

そして、2人の神子を守るため、3人の神子を産み出した。

竜の力を与えた神子。

聖霊の力を与えた神子。

そして、星の力を与えた神子。

予言の神子と守護の神子はそれぞれ力が交わらないように転生を繰

り返し、鍵が魔の王に渡らないようにと、星は決めた。

——話を聞いていたイリスは内容について何かが引かなかった。かつては守護の神子と鍵を宿した予言の神子がいた。

そして、サクリファイスの悲劇では2人の神子が命を落としている。

「3人の守護と2人の予言：鍵：サクリファイスの悲劇で死んだ予言の神子：私とフェリに宿った予言の力：！！」

「気付いたようだな」

エリシアの花茶を飲みながら刹那はイリスを見据える。

「本来、私とフェリは：守護の神子として産まれる筈だった：」

「だが、サクリファイスの悲劇の時、鍵の破片は予言の力に変わり、イリスとフェリシアーノに宿った。つまり：」

「世界の理が：変わり始めている：」

フェリシアーノの言葉に刹那は頷く。

変わり始めた理から産まれた予言の力を宿す守護の神子。

イリスとフェリシアーノは言葉を失った。

暫く話をし、刹那は城の寮に戻った。

3人は彼を見送ると、赤い葉を巻き上げる風を感じ取る。

秋の気配を失った風は、何時か訪れる冬の気配を告げていた。

ユリアの霊薬

数日して、華の国は本格的な冬に入った。

リリイの花が散り、純白の雪の色を持つネージュの花に変わると同時に街路樹は不思議な色彩の果実を沢山実らせた。

そして、街の男衆は果実を実らせた街路樹に綺麗な飾り付けを施す。

「ねえ、イリス。街路樹に実っている実は何？」

白いマフラーを首に巻き、薄茶色のロングコートを羽織り、コートと同じ色のロングブーツを履き、白い手袋を着けたフェリシアノが訊ねる。

コートやマフラーは呉服屋、ブーツは靴屋で買ったもので、イリスが春にフェリシアノの為に買った冬の必需品だ。

「あれは『プリズムの実』。『プリズムの樹』に実る果実で、冬の季節、夜に七色の光を放つんだ。因みに観賞用」

イリスは空色のマフラーに顔を埋めながら言う。

「で、街の男衆が勢揃いでプリズムの樹の飾り付けをするんだ。雪華の祭もあるからな」

「へえ…」

フェリシアノは飾り付けされているプリズムの樹を見上げた。

「お！イリス、フェリシアノ、ロヴィーノ！」

飾り付けをしていた青年の1人がイリス達に声をかける。

「よ、ヘリオ。飾り付けは順調か？」

「ああ！今年はプリズムの実が豊作みてえだからな！夕方には終わるぜ！」

青年ヘリオトロープは笑顔で答えた。

「そうか。頑張れよ」

イリスは軽く手をあげると、フェリシアノとロヴィーノと共にその場を離れた。

暫く歩いていると広場に着いた。

広場のプリズムの樹も街路のプリズムの樹と例外なく飾り付けが行われていた。

噴水前には髪飾りを着けたピンク色の長い髪の少女と、金色の短く切った髪の少女、少し色の濃い金色の短い髪の少女が居た。

「ラクス、カガリ、ステラだ」

思わずイリスは呟く。

と、ピンク色の長い髪の少女ラクスがイリス達に気付き、駆け寄る。

「イリス！お久しぶりですわ！」

「久しぶり、ラクス」

イリスがそう言うときラクスは少し悲しそうな表情になる。

「：少し悲しいですわね。昔は『お姉ちゃん』って言って私達やキラ達の後を必死で追いかけていましたのに…。時はあつという間に流れるのですね…」

「ちよっ！！それは一体何十年前の話だ、ラクス！？」

唐突に語られた過去話にイリスは真っ赤になる。

「森で迷子になった時は何時も泣きべそをかいていたもんなあ…」

「おい！カガリ！」

「それにイリス、よく転んだ」

「ステラまで…」

イリスは突っ込む氣力を失った。

「あの時の可愛かったイリスは何処に行ったのかしらね」

「シェリル！？」

背後から聞こえたシェリルの声に振り返ると、其処にはアルト、ラシカ、シェリル、キラ、アスラン、シンが居た。

「シン！」

ステラは嬉しそうにシンへと駆け寄ると抱きついた。

「ステラ、元氣そうで良かった…」

「…ホント、あんたらはバカップルだよな…」

引きつり笑いを浮かべながらイリスは呟く。

「確かに、イリスはよく『キラお兄ちゃん、ラクスお姉ちゃんまつて』って言いながらよく僕達の後を着いてきたよね」

「それに、よく華冠作ってくださいましたよね」

「キラ！ラクス！もうその話は止める！」

これ以上過去話を語られたくないと、真っ赤な顔で焦るイリス。

空気に乗れないフェリシアーノとロヴィーノはじつとその様子を見守った。

すると、彼女達の近くを永琳と咲夜が通りかかった。

「あら、フェリシアーノとロヴィーノじゃない。おはよう」

「おはようございます、フェリシアーノ様、ロヴィーノ様」

「永琳、咲夜。おはよう」

「おはよう。あのさ…2人に聞きたいんだが…」

「「？」」

ロヴィーノは2人にイリスの小さい時の話を聞く。

因みにフェリシアーノは噴水の水面に張った薄氷で遊んでいた。

「イリス様の幼少時代…で、ございますか。少々難しいですね…」

咲夜は眉間に皺を寄せると、唸る。

すると永琳は悪戯っぽく笑った。

「…そうだ」

「「…？」」

よく分からないという表情のメイドと双子の兄をよそに、永琳は持っている籠から瑠璃色の液体が入った硝子瓶を2つ取り出す。

「イリス、フェリシアーノ。ちよーっとコッチに来て」

心なしか永琳の声が楽しそうに聞こえる。

「「何？」」

「この霊薬、イリスとフェリシアーノに試してほしいの。家にあった薬なのだけど、効能が判らないのよ」

じつと硝子瓶を見据える、フェリシアーノの瞳には不安、イリスの

瞳には疑惑が浮かぶ。

「…こないだ飲ませた睡眠薬じゃないよな？」

イリスが訝しげに訊ねると、永琳は「違う」と言って2人に瓶を渡す。

「…まあ、試してやるよ」

「そう…だね」

小さく溜息をついたイリスと、不安そうな表情になるフェリシアーノは瑠璃色の液体を飲み、空になった瓶を永琳に返す。

途端、倒れた。

「フェリシアーノ君！？イリスちゃん！？」

ランカ慌てて倒れた2人に駆け寄った。

「おい、永琳！2人に何を飲ませたんだ！？」

ロヴィーノは永琳に掴みかからんばかりに問い詰める。

「それは、明日になってからのお楽しみよ♪」

そう言うのと永琳はその場から逃げ出した。

「待てやゴラァァァッ！！」

「ロヴィーノ君！それよりもイリスちゃんとフェリシアーノ君を家に運ばなきゃ！」

永琳を追いかけてようとしたロヴィーノをランカが止める。

彼は不満そうだったが頷くと、気絶したフェリシアーノを背負った。

イリスの方はキラが背負う。

そして、気絶した2人をロヴィーノ達はイリスの自宅に運んだ。

家につき、中に入るとフランドールとレミリアが帰宅していた。

「あ、ロヴィーノおかえり…って！イリス、フェリシアーノ！？」

気絶した2人をおぶって帰ってきた彼等にフランドールは驚いた。

「一体どうしたの!？」

「話は後だよ!レミリアちゃん、フランちゃん!私達はイリスちゃんとフェリシアーノ君を寝室に連れて行くから、咲夜さんとステラちゃんを手伝って!」

「わ、分かったわ!」

レミリアは頷くと咲夜とフランドール、ステラと共に井戸のある裏庭に向かった。

ラクス、カガリ、ランカ、シェリルは台所に向かい、ロヴィーノ、キラ、アスラン、アルト、シンはイリスとフェリシアーノを2つのベッドがある客室へと連れて行った。

2人を客室のベッドにそれぞれ寝かすと、程なくして井戸水を汲んできた4人が入ってきた。

咲夜は水に浸けたタオルを絞ると眠っている2人の額に乗せる。

イリスとフェリシアーノは健やかな寝息をたてていた。

「…一体、何があったの?」

フランドールは心配そうにイリスを見据えながら訊ねる。

「…永琳に変な薬を飲まされた」

「…なるほどね…」

呆れかえったレミリアは溜息混じりに呟く。

「なんか薬の匂いがすると思ったら…。で、何を飲まされたのかしら?」

「…分かったら苦勞しねえつつうの…」

額を押さえながらロヴィーノは言う。

そうね、と軽く言いながらレミリアは窓の外を見る。

空は厚い灰色の雲に覆われ、暫くして柔らかな雪が静かに降り始めた。

その夜はロヴィーノと台所に居た女子達が夕食を作り、キラ達はイ

リスの家に泊まった。

翌日、徹夜でイリスとフェリシアーノの様子を見ていたロヴィーノとランカが目を覚ました。

2人は疲れが溜まり、何時の間にか寝ていたのだ。

慌てて目覚めると、2人はベッドに居るはずのイリスとフェリシアーノが居ない事に気付いた。

2人が気付いて起きたとしても、ベッドのシートが乱れていないのは不自然だ。

「あ…あれ！？イリスちゃんとフェリシアーノ君は！？」

突然居なくなった2人にランカは混乱する。

「落ち着け！俺はアルト達を呼んでくる！」

「う…うん！」

部屋を飛び出したロヴィーノを見送ると、ランカは再びベッドを見据える。

ふと、イリスが眠っているベッドとフェリシアーノが眠っているベッドに小さな塊がシート越しに見えた。

恐る恐る2つのシートを避けると、其処にいたのは…

その頃、ロヴィーノはアルト達を起こした。

事情を聞いた彼等が2人とランカがいる客室に向かおうとしたその時。

「きゃあああああつ！」

「！？」

「今のは……ランカ!?」

突然の悲鳴に、ロヴィーノ達は慌てて客室に向かう。

そして、中に入ると驚きを隠せないランカと……

白銀の肩辺りまでの長さの髪と紅い双眸の6歳ぐらいの少女と、茶色い髪と毛先がくるんとなったくせつ毛、淡い翠の双眸の、幼女と同じ年頃の少年が其処にいた。

すると、2人はラクスとロヴィーノを見てはあつと顔を明るくする。

「ラクスお姉ちゃん！」

「ロヴィーノ兄ちゃん！」

その声に、ラクスは嬉しそうに笑うが、逆にロヴィーノは溜息をつく。

「あらあら。この子は小さい頃のイリスですわね」

「…チビの時のフェリシアーノだ…」

「え……ええええええええええつ！？」

スカーレット姉妹は思わず大声をあげた。

ロヴィイーノはパチュリーを呼び、イリスとフェリシアーノの事を話す。

彼女は頷くと手持ちにある霊薬の本で調べる。

「――恐らく、永琳が2人に飲ませたのは『ユリアの霊薬』ね。ユリアの霊薬は服用者の時間を十年前に巻き戻す作用があるの。2人の時間が十年前に戻ったのよ」

本に書いてある記述を目で追いながらパチュリーは語る。

「つまり、体と記憶が6歳の時に戻ったと云うことね」

シェリルの言葉にパチュリーは頷いた。

「薬自体は持続性は短いけど、もし永琳が調合したとなると……」

パチュリーは苦虫を噛み潰した表情になる。

永琳は薬剤師で、持続性が短い霊薬を長い時間でも続けるようにと

改良を加えていた。

「…ずっと小さい時のままとは思えないと思うけど…何時薬の効力が切れるか判らないわね。夕風の事もあるし…」

「…エルシアの霊薬は使えないのか？」

「無理よ…。ユリアの霊薬は効能が強すぎるから、更に強いエルシアの霊薬を投与したら2人は二度と元の姿には戻れなくなるわ」
その言葉にロヴィーノは俯く。

「…とりあえず、私は永琳を問い詰めてくるわ。ロヴィーノ達は2人の面倒を見て。レミリア、フラン、咲夜は私の手伝いをお願い」

「わかったわ」

「かしこまりました」

パチュリーの言葉にレミリアと咲夜は頷くが、フランドールは少し不服そうな表情になる。

「せっかく小さい頃のイリスと遊べると思ったのに…」

フランドールは不満げに呟くが、先に行ったパチュリーとレミリアの後を追った。

残されたのはロヴィーノ達は、近くのソファで遊び疲れて眠った2人を見詰めた。

小さな記憶・セラの霊薬

朝方に降り始めた初雪は、昼頃になるとあちこちの土や街路を白く染めていた。

「イリス！こっちだよ！」

「まってよ、フェリシアーノお兄ちゃん！」

家の裏庭に出て微かに積もった雪で遊ぶ、霊薬の効能で幼くなったイリスとフェリシアーノをロヴィーノとアルトはじっと見据えた。

「：アルト。イリスが小さい頃って、あんなだったのか？」

「ああ。俺もよく『アルトお兄ちゃん』って呼ばれてたよ。まあ、それはイリスが十歳の時に呼ばなくなっちゃったけどな」

「：そうか」

苦笑しながらロヴィーノは呟く。

「昔のイリスは無邪気だったけど、自分の運命を知り、戦姫となる覚悟を決めた時から今の性格になったんだ。：もし、神の子じゃなかったらずっと無邪気な性格だったろうな：」

「：そうだな：。俺もたまに思う事もある。魔王が現れなければ、俺とフェリシアーノが神の子として産まれなければ、運命は変わっていたなってさ：」

その言葉に空気が重く沈んだその時、遊んでいたイリスとフェリシアーノは2人に近寄った。

「アルトお兄ちゃん、ロヴィーノお兄ちゃん。どうしたの？」

「兄ちゃん達、元気ないよ」

心配そうにイリスとフェリシアーノは訊ねる。

「あ：ああ、大丈夫だ。心配すんな：」

アルトは小さく笑うとイリスの頭を軽く撫でる。

雪が乗った白銀の髪は何故か氷のように凍てつくほど冷たかった。よく見ると、白い服やマフラーはしっとりと濡れた土で汚れ、髪からは雫が垂れていた。

フェリシアーノもイリスと同じように水と雪、土にまみれていた。

「イリス、フェリシアーノ、何で濡れているんだ？」

「…井戸の近くにあった桶に水が入っていたのに気付かなくて、転んだ時に桶をひっくり返しちゃったの」

イリスの言い訳に、ロヴィーノは溜息を吐きながらも素早く立ち上がる。

「アルト、俺はリビングの暖炉に火を点けてくる。すまないが、フェリシアーノを見てくれ」

「わかった」

アルトはロヴィーノを見送ると、イリスとフェリシアーノに着いた雪と土を払い落とす。

「ちゃんと、気をつけろよ」

「うん」

素直に頷くイリス。

「おっじゃまっしまーす♪…って…」

隙間を作って遊びに来た紫は、幼くなったイリスとフェリシアーノをまじまじと見る。

「アルト…、その子達は誰なの？」

「「!」？」

紫に驚いたイリスとフェリシアーノは、素早くアルトの背後に隠れた。

「…イリスとフェリシアーノ。永琳がユリアの霊薬を飲ませたから2人が6歳の頃に戻ったんだ」

溜息混じりにアルトは説明する。

「なるほどねえ…。その頃のイリスとフェリシアーノには会ってないし、人見知りするのは仕方ないわね」

納得した紫は苦笑を浮かべた。

彼女が雪除けに差している薄桃色の傘はうつすらと雪を積もらせていた。

「…お姉ちゃん、誰？」

恐る恐る紫を見ると、イリスは訊ねる。

「私は八雲紫。アルトとは仕事仲間よ」

「紫お姉ちゃんは、アルトお兄ちゃんのお友達なの？」

「…まあ、そんな所ね」

紫は苦笑を浮かべながら語る。

「紫さま、お忘れ物で…ふええええっ!!」

「藍さま、いかがなさいました…え!？」

紫への忘れ物を届けに来た藍と橙は、幼児化したイリスとフェリシアーノを見て驚いた。

「い…イリスと…フェリ…なの？」

藍が啞然とした表情で訊ねると、イリスは大きく震えた。

「…お姉ちゃん達、誰?なんで私とフェリシアーノお兄ちゃんの名前しってるの?」

イリスは怯えた様子で訊ねる。

「私だよ。橙だよ、イリス。忘れたの?」

「永琳が2人にユリアの霊薬を飲ませたの。だから私達にあう前の記憶を失っているわ」

その言葉に藍は納得したが、ユリアの霊薬を知らない橙は複雑な表情になった。

と、ロヴィーノが外に出てきた。

「アルト、暖炉が温まったぞ。…って、紫達、何時の間にいたんだ?」

ロヴィーノは驚きながら言う。紫、藍、橙の順に視線を移した。

「悪いかしら?遊びに来たのよ。…どうやら永琳が飲ませたユリアの霊薬のせいで2人は幼児化しているようね」

「…何でその事を知ってるんだ?」

「さつき、アルトから聞いたの。また、永琳の異常過ぎる研究心が働いたのね」

溜息混じりに紫は呟く。

「…とりあえず、中に入れよ。此処で話すのも辛いだろ」

ロヴィーノは家の中を示しながら言う。

「ありがと。じゃ、おじゃまします♪」

紫は意気揚々と中に入り、彼女に続いて藍と橙が入った。

アルト、イリス、フェリシアーノが中に入ったのを確認するとロヴィーノも中に入り、裏口の戸をしっかりと閉めた。

リビングは暖炉に灯った炎で程良く暖まっていた。

炎はパチパチと音を立てて薪を燃やしながら暖気を室内に送っている。

暖炉の近くに置かれている、ささやかな飾り付けが施された小さなプリズムの樹の植木鉢。

その枝を覆う青々とした葉の微かな動きが暖気の流れを示していた。二階で汚れた服の着替えを済ませたイリスとフェリシアーノは橙と一緒に布製の玩具で遊んでいた。

一方、ロヴィーノは今の2人について大体の筋を紫と藍に話していた。

話を聞いた紫は腕を組むと、何かを深く考え始めた。

藍はと云うと、遊んでいる3人をほんわかとした表情で見ていた。

「…そうなる、レミリア達を待つしかないわね。今の私達じゃ、2人を元に戻せないわ」

「…だよな」

大体の話を聞いた紫はそう言う、ロヴィーノは手を額に当て、溜息混じりに呟く。

「ただいまー。あれ、藍ちゃんと紫さん、橙ちゃん、何時来たの?」
買い出しから戻ってきたランカは3人を見て少し驚いた表情になる。

「あつ、ランカお姉ちゃん!」

イリスは玩具を置くと、嬉しそうにランカに駆け寄る。

「おかえり! お姉ちゃん、何買ってきたの?」

「サンドウィッチの材料。レミリアちゃん達にご飯作っておかないとね」

と、ランカが言った途端イリスは俯いた。

「…レミリアお姉ちゃん達、まだ帰って来ないのかなあ」

「まだだよ。もうちょつと待っていようね」

「うん…」

小さく頷くとイリスはフェリシアーノと橙のいる場所に戻る。

「…昔っから1人で居るのが嫌いだからな…イリスは」

「？」

ロヴィーノがキョトンとすると、アルトは苦笑した。

「ん？ ああ、…つい言っちゃったな」

どうやら無意識に呟いた言葉だったらしい。

「俺達がガキの頃、イリスを精霊樹の森に置いてけぼりにしちゃった事があるんだ。精霊樹の森は別名『迷いの森』って呼ばれているからな」

「アルト君が『イリスを置いていこう』なんて言ったから悪いんですよ！」

その事を思い出したランカは怒りながら紅茶を淹れる。

「お陰でお父さん達に怒られたんだよ！『大事な皇女を迷いの森に1人置いてけぼりにするのは、どういう事だ！今すぐ皇女を捜してきなさい！』って！」

「仕方ねえだろ！イリスが皇女だったなんて知らなかったんだからよ！」

「それは言い訳にしか聞こえないよ！」

2人の言い争いが激しさを増していったその時。

「ランカお姉ちゃん、アルトお兄ちゃん！」

大きく声を張るイリスが2人の間に入るが、急に怖くなったのか、小さな手で服の裾を強く握った。

「2人共…お願いだから、喧嘩…しないで…」

「…あ…」

今にも泣き出しそうな表情のイリスに、2人は言い争うのを止めた。

「：ねえ、イリス：遊ぼうよ」

恐る恐る橙はイリスに語りかける。

イリスは小さく頷くと、目を擦りながら橙とフェリシアーノの元に駆け寄った。

「：そう言えば、イリスちゃんを見つけたとき、私達も迷って喧嘩したよね。あの時もイリスちゃんが喧嘩を止めてくれた。その後はずっと泣いていたっけ」

ランカは悲しげに笑いながら呟いた。

——十年前。

精霊樹の森に置いてけぼりにしてしまったイリスを捜しに、アルト、ランカ、シェリル、ミハエルの4人は夜の精霊樹の森に向かった。漆黒の闇に包まれた森は異様な程、不気味な気配を漂わせていた。

「うう：アルト君のせいだよ：。イリスちゃんを置いてけぼりにしようなんて言わなければ：」

ランカは怯え歩きながら呟く。

「お：俺のせいにするなよ！」

「確かに、アルトが悪い」

叫ぶアルトを、叱るようにミハエルは言う。

「けど、イリスが皇女だったなんて知らなかったわ」

シェリルは帰る道標を決め、歩きながら呟く。

暫く歩いていると、地面にうずくまり泣いているイリスを見つけた。

「：ひっく：ぐすっ：」

「イリスちゃん！」

ランカの声に気付いたイリスは顔をあげると、余計顔をくしゃくしゃにする。

「…ランカお姉ちゃん！」

イリスはランカに抱き付くと、再び泣き始めた。

「お姉ちゃ…怖か…怖かったよ…。独りぼっちに…しないで…」

「…ごめんね。イリスちゃん、ごめんね…」

ランカは泣きじゃくるイリスの頭を優しくなでながら何度も謝る。

「…ごめん、イリス」

掠れた小さな声だったが、アルトも謝った。

その後、イリスの手を引きながらアルト達は村へと戻る…筈だった。闇が深くなり、シェリルが付けた道標が見えなくなったのだ。

「どうしよう…、このままお家に帰れなかったら…」

「だ…大丈夫だろ」

「大丈夫なわけないよ！」

ランカは泣き出しそうな表情で叫ぶ。

「何時も何時も、なんでアルト君は無茶するの！？振り回される私達の身にもなってよ！」

「お前だって、サクラとリリに迷惑かけてるじゃねえか！」

「それとこれとは違うよ！もういい加減にしてよ！」

「ランカお姉ちゃん、アルトお兄ちゃん！喧嘩は止めてよ！」

イリスは掠れた声で2人を叱るが、すぐに顔をくしゃくしゃに歪める。

「…喧嘩…しないでよ…」

イリスの言葉にランカとアルトは黙り込み、謝った。

そして、イリスの声で目覚めたリリーホワイトのお陰で5人は村へと帰れた。

——話を聞いたロヴィーノは意外そうな表情を浮かべた。

「チビのイリスも現在のイリスも、根本的なところは変わってないな」

「そうだな」

その言葉にアルトは苦笑する。

と、玄関の扉が開き、レミリア達が帰ってきた。

「ただいま。永琳から解毒薬(?)の『セラの霊薬』を貰ってきたわ」

「まあ、ホントは輝夜のお陰なんだけどね…あいたっ!」

付け足したフランドールの頭をレミリアは軽く(?)叩いた。

「…とりあえず、セラの霊薬をイリスとフェリシアーノに飲ませましょう。今日の記憶は失うけれど、明日には元に戻るはずよ」

「…わかった」

レミリアの説明にロヴィーノは複雑な表情で頷くと、イリスとフェリシアーノを呼ぶ。

素直に来た2人はフランドールからセラの霊薬を受け取ると瓶の中身を飲み、眠りについた。

そして、眠った2人をそれぞれの部屋のベッドに寝かせた。

「いい夢視ろよ。イリス、フェリシアーノ」

ロヴィーノは柔らかい笑みを浮かべ、幼い皇女と弟に語りかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908t/>

華と夕風の魔法

2011年12月3日20時56分発行